684
257

滿蘇支辺境事情

満洲事情案内所編

0000554000

0000554-000

６８４－２５７

滿蘇支辺境事情

満洲事情案内所・編

満洲事情案内所

昭１１

AAB

684
25

滿洲事情案內所報告（32）

滿蘇支邊境事情

—蘇領極東・外蒙古・新疆事情—

滿洲事情案內所編

緒言

過ぐる數世紀、ロシヤ帝國に依つて行はれた極東經略は、滿洲の地に於ける日本英靈の鮮血と、ロシヤ帝國の崩壊により、一先づ終決されたかに見えたが、代つて起つたソヴエート・ロシアによつて、又新たなる攻略と七化機承された。即ち蘇聯の極東地區に對する軍事的、經濟的施設の白熱的擴充、外蒙共和國の赤化的獨立、或は新疆への術策等々によつて日本・滿洲及び支那は完全に赤禍の包圍的危機の下に晒された。滿洲の赤族の南下は日・滿軍警の未然的努力により遮斷されてはゐるが一方外蒙、新疆を赤化の徑路に與へた支那は、內政不統一の虛に乘せられ、今やその主要版圖を赤軍の蹂躙下に委ねてゐる。これが防遏の任は今や日本民族に課せられた一大試練であらねばならぬ。

發行所寄贈本

昭和十一年一月

滿洲事情案內所

滿洲事情案內所既刊資料

告示番號	書名	實費	殘部
	滿洲年鑑（普及版）	100圓	無
	滿洲經濟指針（各產業別七種）	20	無
(1)	採算上より見たる滿蒙牛の輸出事情	20	無
(2)	滿洲國に於ける砂糖事情	20	無
(3)	滿洲國財政に見る王道政治	20	無
(4)	國都新京經濟事情	50	無
(5)	首都新京の經濟的發展策	10	無
(6)	滿洲國の諸々廟會と其市場研究	50	無
(7)	奉山線・錦縣經濟事情	10	無
(8)	新京に於ける貨物集散機關と其設備	20	無
	滿洲經濟地圖	80	無
(9)	滿洲國企業統制の現況	30	無
(10)	農安事情	20	無
(11)	新京事情	30	無
(12)	扶餘事情	20	無
(13)	滿洲國產業資源と其開發	20	無
(14)	滿洲事情（上）農・畜・林・水產篇（九年版）	40	無
(15)	同（中）通貨・金融・商業・貿易篇（九年版）	40	無
(16)	同（下）工業・鑛業篇（九年版）	40	無
(17)	滿洲國の自然	10	無
(18)	在滿主要會社一覽	10	無
(19)	滿洲國の產業（概說篇）	15	無
(20)	松花江	40	無
	滿洲國有鐵道沿線及背後地各縣概況	50	無
	Industry of Manchoukuo（英文）	30	有
(21)	滿洲事情（下）工・鑛業篇（十年版）	30	有
(22)	滿洲事情（上）農・畜產篇（同）	30	有
(23)	滿洲事情（中）林・水產篇（同）	30	有
	滿洲經濟地圖（改訂十年版）	50	有
(24)	蒙古事情概要	30	有
(25)	松花江（改訂版）	40	有
(26)	遼河	40	有
(27)	滿洲國の產業（概說篇）〔改訂版〕	15	有
(28)	滿洲に於ける農村聚落狀況・耕作面積・地價	10	有
(29)	滿洲國に於ける交通事情	40	無
(30)	滿洲國の習俗	50	有
(31)	北支那事情	40	有
(32)	滿蘇支邊境事情	40	有

凡例

一、本篇は蘇領極東、外蒙古及び新疆の三大邊境に關して、その沿革竝に現況を集錄し、附錄として寧夏・甘肅・青海各地の概要を附加したもので、既刊「蒙古事情概要」及び「北支那事情」と共に滿・蘇・支邊境に關する姉妹篇を成すものである。

一、記事及統計中の度量衡或は貨幣單位等のうち一般的ならざる呼稱には、夫々の箇所に於て必要に應じ註釋を加へる事とした。

一、尙ほ本書に輯錄する事項に關し、更に詳細なる調査、研究をさるゝ便宜のため、本篇の卷末に當所が蒐集せる文獻資料の索引を添へた。（之れ等の資料は特殊扱のものを除き、總て來所者の閱覽に備へてゐる）。

昭和十一年一月

滿洲事情案內所委囑調査員
西藤辰雄

184-217

目次

第一編　蘇領極東地方……一

第一章　極東地方の自然と人文……一

第一節　地域・地勢・面積・氣候……一
第二節　住民及び人口……三
第三節　言語及び宗教……六

第二章　極東地方略史……七

第一節　シベリア族時代……七
第二節　ロシアの東方侵略……九
第三節　露・支の衝突……一一
第四節　革命混亂時代……一四

第三章　極東地方の政治組織……一六

第一節　政治組織……一六

第二節　行政區劃……一七
第四章　極東地方の資源……一九
第一節　鑛物資源……一九
第二節　森林資源……二二
第三節　水產資源……二三
第四節　毛皮資源……二四
第五章　極東地方の產業……二四
第一節　農業……二五
第二節　工業……二七
第六章　極東地方の交通運輸……三〇
第一節　交通……三〇
第二節　運輸……三三
第七章　極東地方の政治的地位……三四

第二編　外蒙古……三八
第一章　外蒙古の自然と人文……三八
第一節　地域・地勢・面積・氣候……三八
第二節　住民及び人口……三九
第三節　言語及び宗教……四一
第二章　外蒙古略史……四一
第一節　蒙古の興隆……四四
第二節　清朝と外蒙古……四六
第三節　外蒙古の獨立……五〇
第三章　外蒙古の政治組織……五〇
第一節　政治組織……五〇
第二節　行政經濟區劃……五二
第四章　外蒙古の產業と貿易……五二

第一節　牧畜……五二
第二節　農業……五四
第三節　鑛業……五五
第四節　狩獵……五六
第五節　工業……五七
第六節　商業及び貿易……五九
第五章　外蒙古の都市と交通……六二
第一節　都市……六二
第二節　交通……六三
第六章　外蒙古の政治的地位……六四
第三編　新疆……六七
第一章　新疆の自然と人文……六七
第一節　地域・地勢・面積・氣候……六七

第二節　住民及び人口……六八
第三節　言語及び宗教……七〇
第二章　新疆略史……七二
第一節　清朝以前……七二
第二節　清朝時代……七三
第三節　新疆の獨立……七五
第四節　回教徒の蜂起と政變……七六
第三章　新疆の都市と交通……七八
第一節　都市……七八
第二節　交通……七九
第四章　新疆の資源・産業・貿易……八三
第一節　資源及び産業……八三
第二節　對外貿易……八六

目次

第五章　新疆の政治的地位……八七
附錄一　寧夏・甘肅・青海事情……九〇
附錄二　ウラル・アルタイ民族分類表……九五
附錄三　滿蘇支邊境地方に關する資料一覽……卷末
地圖　滿蘇支邊境要圖……卷末

滿蘇支邊境事情

滿洲事情案內所編

第一編　蘇領極東地方

第一章　極東地方の自然と人文

第一節　地域・地勢・面積・氣候

茲に謂ふ極東地方とは、ロシア社會主義聯邦ソヴェート共和國の現行政區劃に於ける極東地方及び東部ザバイカル地方を總稱し、ソヴェート聯邦の東端に位する。

その地域は、東は蜿蜒一萬八千粁に亘つて延長する太平洋岸—ベーリング海、オホツク海、日本海—に圍繞せられ西はヤブロノヴイ、スタノヴオイ兩山脈を以つてシベリア地方—ヤクート自治共和國、ブリヤート・モンゴル自治共和國—に連り、南はウスリー江、黑龍江、アルグン河を隔てゝ滿洲帝國の北境を覆ふてその一端を朝鮮に接し、北は遙かに北氷洋中に沒する。總面積は二百七十一萬七千七百平方粁にして、ソヴェート聯邦全アジア領の半に達する廣大なる地域である。

極東地方の西部は外蒙古に連るが、その地帶は、地質學者によつて「アジアの最初の擡頭地」と稱せられる高臺の

一部を構成し、極東地方の大略の地勢は、その高臺地帶より東北方に傾斜して、太平洋、北氷洋に沒するのであるが、山岳誌的には相異る山脈が起伏するので、實際には地勢は相當複雜である。

山脈の主たるものは、西部の高臺を成すヤブロノウイ山脈及び之れに續いて北走しオホツク海に至るスタノウオイ山脈、子午線に沿ふて重疊する小興安嶺山脈(又は外興安嶺山脈)、東部海岸に近く南北に連亘するシホタ・アリン山脈、カムチヤツカ半島の骨幹を成すカムチヤツカ山脈等があり、ヤブロノウイ山脈、スタノウオイ山脈、小興安嶺山脈は何れも千古の大處女林を藏して、極東地方のタイガ(森林帶)を構成する。

河川はヤブロノウイ、スタノウオイ、小興安嶺等の諸山脈に源を發するもの多く、インゴダ、オノンの兩河は西部高臺を深い溪谷によつて裁斷しつゝ合してシルカ河となり、滿洲帝國領より流れるアルグン河と合して黑龍江と呼ばれ、スタノウオイ山脈及び小興安嶺より發するゼーヤ河、ブレーヤ河等の大河を併せつゝ東流しウスリー江と合流して北に向ひ、日本海とオホツク海を連結する韃靼海峽に注いでゐる。アムグン河はスタノウオイ山脈より直接にオホツク海に入る大河である。

平原はシホタ・アリン山脈が南に沒する興凱湖附近及び北樺太、オホツク海沿岸等に於て最も廣大であるが、諸山脈の溪谷及び諸河川の流域には何れも平野を有し、黑龍江下流には多くの湖水及び濕地が散在する。カムチヤツカの北部は地勢頗る低く、一年の大半は氷雪に覆はれるツンドラ(凍土帶)で、北氷洋に沒するところは海陸の區別すら判然せぬと謂はれる。

島嶼は樺太島を最大のものとし、カムチヤツカ半島に續いてアリューシヤン群島があるが、樺太島は北緯五〇度を以つて日本領と分れる。海岸線はオホツク海、日本海岸に幾多の港灣を有し、ベーリング海岸には良港灣に乏しい。

氣候は、北氷洋よりベーリング海、オホツク海及び日本海に流れる寒流の影響をうけて概して寒冷であるが、太平洋との近接と山脈の關係に依つて、北部地方と南部地方とは大いに趣きを異にする。

冬期の極東地方の上空には高氣壓を構成して、北極の寒風を太平洋上に送る北西の風即ち冬期季節風を生じ、四月頃からは反對に太平洋上の氣壓が上昇して、熱帶の暖風を北方大陸に送る南東の風即ち夏期季節風が起り、多量の濕氣を含んだ暖風を齎すのであるが、極東地方に於ては、シホタ・アリン山脈及びカムチヤツカ山脈が溫暖なる夏期季節風の北上を遮る結果、北部地方は之れの影響を蒙ることが比較的尠く、年平均溫度は南部地方に比して著しく低い。之れに反して南部地方は夏期季節風に惠まれること多く、從つて溫暖なる期間が比較的永いので、四月より九月までの植物繁茂期には農作物が成育し、興凱湖以南の地方に於ては半熱帶植物たる米の栽培すら可能である。

第二節　住民及び人口

極東地方の現住民は、人種學並びに民族學的に嚴密に之れを分類すれば驚くべき複雜多種に渉るが、歷史的及び政治的に大別して

一、古シベリア族
二、新シベリア族
三、ヨーロツパ族

の三種とする。又古シベリア族及び新シベリア族は一括して地方アジア族と稱する。

一、古シベリア族　古シベリア族は古代の北方アジアに活躍せる種族の子孫及びアラスカより移住せる種族にして、

人種的には獨立せる系統のものが多く、現在に於ては人口頗る少くして石器時代を脫したのみで、種族滅亡の一途を辿りつゝあり、既に新らたなる民族運動の對照とは爲し難いと謂はれる。之れを細別すれば即ち左の如くである。

チエクチ族……古シベリア族中で最も多くの人口を保有する種族にして、主としてベーリング海峽に臨むアナデイル河附近に居住し人口約一萬三千人である。海獸を狩り、馴鹿を放牧して生活する。

コリヤーク族……主としてチエクチ族の南方地帶に居住し、人口約八千人である。漁獵を生業とするものを漁獵コリヤーク、養鹿を業とするものを養鹿コリヤークと稱する。

カムチヤダール族……カムチヤツカ半島に居住し、人口約四千二百人。古來より千島列島の土人と交渉を有し、屢々之れと種族的闘爭を演じて來た。

ギリヤーク族……黒龍江下流地方及び樺太に住み、人口約二千人。漁業に從事する。

エスキモー族……所謂アメリカノイドにして、アラスカよりベーリング海峽沿岸及び附近の島嶼に渡來せる種族。人口千三百人にして漁獵を生業とする。

アレウト族……エスキモー族と同じくアメリカノイドにして、カムチヤツカ半島及びアリューシヤン群島に居住し、人口約三百五十人である。

チユヴン族……人口約七百人。カムチヤツカ半島に居住する。

アイヌ族……多くは日本帝國領に居住し蘇領北樺太に約四十人。

其の他、古シベリア族はヤクート自治共和國にユカギール族（人口四百人）及びエニセイ族（又はケト族）が約千人居住する。しかし、エニセイ族は全くロシア人化して何等の特徴をも有しない。

二、新シベリア族　新シベリア族はツラン系（又はウラル・アルタイ系）民族にして、（イ）トルコ族、（ロ）蒙古族、（ハ）ツングース族が之れに屬し、その特質は、古シベリア族に反して人種的に同一系統に屬し、古シベリア族に代つて數千年の久しきに亘つて北方アジアに活躍し、亦屢々支那本部及び中央アジアに威を振るひ、或る時はヨーロッパを侵した勇猛なる種族であると共に、現在尙同系の民族は世界の政治、經濟に重大なる關係を有するところに存する。

（附錄・ツラン民族分類表參照）しかして、極東地方に現住するツラン系民族はツングース族と左の如く細別せられる。

トルコ族で、ツングース族は左の如く細別せられる。

北部ツングース（シベリア・ツングース）

サモギール族　オロッコ族
ニギダル族　固有ツングース族
オリチ族　マネギル族

南部ツングース（滿洲ツングース）

滿洲族　ゴルド族
ソロン族　オロチヨン族　その他

居住地域は滿洲、東部シベリアより北氷洋岸に及び人口は約七萬人である。北部ツングース族の中で最も多くの人口を保有する固有ツングースは、ザバイカル以東沿海州に至る極東地方に分散し、その人口約六萬人に達する。ツングース族は外貌は概ね蒙古型にして、本來は馴鹿を飼ひ、狩獵を營み、獸肉を主食とし、毛皮を衣服に用ひたのであろが、各地に分散して異種族に同化したので、現在に於てはその生活樣式は一樣ではない。

トルコ族はソヴエート聯邦に於てスラヴ族に次ぐ大民族にして、曾つては全トルコ回教運動により、近くはイデルウラル運動と稱してアジア民族解放の闘爭史を血で染めた民族である。極東地方に於ては黒龍江岸より樺太に散在するシベリア・トルコ族が居り、極東地方に西隣するヤクート共和國にはトルコ系のヤクート族（二十四萬人）が居住し

西部シベリアの韃靼人もトルコ系である。勇猛なる騎兵として知られる哈薩克（カザック）人もトルコ系で、シベリアより極東地方に散在する。

蒙古族は極東地方には居住しないが、西隣するブリヤート・モンゴル自治共和國はブリヤート蒙古族を主要構成分子とし、その人口二十三萬八千人にして蒙古諸族中最もロシア人化して文化の程度も高く、蒙古民族運動の對照として特殊の地位を占めてゐる。朝鮮人は最も近年に極東地方に移住したが、その數は約二十萬人と稱せられる。

三、ヨーロッパ族　極東地方はソヴエート聯邦の一構成部分となつてゐるので、その地に於て絶對的主權を掌握してゐるものは謂ふまでもなくヨーロッパ族たるスラヴ族である。彼等は所謂ロシア人にして、十六世紀以降に於てシベリア及び極東地方に移住し來たり、人口的、政治的、經濟的に斷然先住のシベリア族を壓服して今日に至つた。シベリア及び極東地方の人口は過去三百餘年間に約六千八倍に達したが、その增加數の大部分はロシア人である。

しかして、極東地方には現在約七萬人の漢民族、三千五百人のユダヤ民族があり、之れ等を合して總人口は一九三一年一月の發表に據れば百六十六萬人（中男九十萬二千九百人、女七十五萬七千百人）であつたが、その大部分が所謂ロシア人であることは上述せるところによつて明かであろう。ソヴエート聯邦政府は、極東地方の如上の人口を以つてしては未だ極東地方の經濟、軍事建設に不充分であるとし、一九三三―三七年に至る第二次五ケ年計畫に於て、一九三七年末までに極東地方の人口を二百八十萬人に達せしめる植民政策を實施しつゝある。

第三節　言語及び宗教

極東地方に於て用ひられる言語は人口、政治、經濟上の諸關係よりしてロシア語が普通語であることは謂ふまでもないが、古シベリア族及び新シベリア族の間に於ては、未だ固有の族語が多く用ひられてゐる。

宗教は、帝政ロシア時代に於てはギリシヤ正教が國教として全領域に布教せられ、ロシア人は深く之れに歸依した外、シベリア及び極東地方に於ては、先住のシベリア諸族にも之れが强制せられたが、古シベリア族及びツングース族は表面ギリシヤ正教を奉じたのみで、實際には傳來のシャマン教を信じてゐた。帝政時代にはウラヂオストック金角灣頭では先づニコライ堂の白堊の圓塔や金色燦然たる十字架の尖頭が目に映じ、曠野の果てに鐘の音が聽ゆる時、そこには信仰に浸つた村落があり町があつた。暗い冷たい極地のロシア人は、宗教に依つて無上の愉悅と慰安を得てゐたのであつたが、極東地方がソヴエート聯邦政府の宗教禁壓政策のために、寺院の領地及び財産は悉く沒收せられ、反抗せる僧侶の頭上にはボルシエヴイキの鬼刃が躍つた。しかし、シベリア諸族の間に於ては言語と共にシャマン教が今日尙信奉せられてゐる。

第二章　極東地方略史

第一節　シベリア族時代

古シベリア族及び初期新シベリア族の事蹟は明かではないが、シベリア及び極東地方がシベリア族の天地であつた時代は、古代より十七世紀に至るまでの數千年に渉る。又民族學的な推測に據れば太古に滿洲及び蒙古に居住したツングース族の一隊が、古シベリア族を追ふて極東地方に入り、西紀前二千年頃に韃靼海峽を經て樺太より日本列島に渡り、西海岸傳ひに南下し出羽及び越後の地に土着して國神（クニツカミ）と稱したと謂はれ、太古既に日本民族にとつて極東地方

が、全く無意義なる對岸ではなかつたことが知られる。

しかして、太古のシベリア族を追ふて新シベリア族が隨所に勢威を振るつた。オビ、イルチス兩河の流域には堅昆（チエンコン）、イルクーツク地方には高車（カオチユ）、セレンガ河の流域には烏揭（ウチエ）等が割據し、周時代—西紀前一〇五〇年頃以降—に匈奴がアルタイ地方に興つて東進しシベリア南部を領有し、後漢時代—西紀二五年頃以降—に鮮卑（シベ）が東南方よりシルカ河とアルグン河の間に移り、漸次勢力を增大してバイカル湖附近を占めた。晉時代—西紀二六五年以降—には蠕々（シエンシエン）、柔然（シエンジヤン）がエニセイ河とバイカル湖附近に現はれ、次いでアルタイ山に據つてゐた突厥（チユルク）が大いに勢ひを得てシベリアの大半を領し、又屢々長驅して支那本部を侵した。

その頃、支那本部を統一して邊疆よりの脅威を除かんとしてゐた唐は、西紀六三〇年頃に兵を北に送つて東突厥（チユルク）を討ち、シベリア南部を平定してザバイカルに幽陵都督府を、レナ河、エニセイ河の間に燕然都督府、セレンガ河、エニセイ河の河域に仙萼、天闕等の州を設けた。これ即ち唐の羈縻府州であつた。唐の勢力が衰へるや北方には契丹（キタイ）族の遼—西紀九三七年建國—及び女眞（ニユルチン）族の金—西紀一一一五年建國—が興りオビ河、セレンガ河の附近には結骨（カガス）斯、エニセイ河流域よりコソゴル地方には乃蠻（ナイマン）、エニセイ河よりアルタイ山及びドウラ河畔には克烈（ケライト）特等が割據してゐたが、蒙古部が興ると共に悉く之れに併合せられ、シベリア及び極東地方は擧げて蒙古部の支配下に入つた。

蒙古の元朝は、隷下の部將をシベリアの各地に分封したが、間もなく崩壞した。明朝となつてからは、シベリアと支那本部との交通は蒙古によつて遮斷せられ、シベリアに於ける事蹟は不明となつたが、この時代にあつては、元朝によつてシベリアに封ぜられた諸王公の勢力も亦衰退して、之れに乘じた土民が各々の部衆を統一し、汗國を建設したであろうと觀られる。

斯くて西紀一五〇〇年代に移つたのであるが、當時のシベリア及び極東地方は未だ完全に新シベリア族の天地であつた。然るに一五〇〇年代の末葉に至るや、シベリア族のシベリアの夢は無慘に破られ、やがて東亞全局の形勢を一變せしむべき新事態の萌芽がウラル地方に現はれた。即ち現代シベリア及び極東地方の絶對的主權者たるロシア人の東方侵略が開始せられたのである。

第二節　ロシアの東方侵略

一五〇〇年代に於ては、ウラル山脈東部のシベリア地方にはトルコ族の韃靼人が勢力を占め、トボルスク地方のシベリア城には庫程汗（クチユムハン）が居たが、この頃、封建領主の苛斂誅求に因つて起つたロシア國民の移住運動は既にウラル地方に達し、東方の富源を傳へ聽いた勇敢なるロシア商人は、續々とウラル山脈（當時は之を險岨なる山道として「鐵門」と稱した）を越へて、シベリア族との交易を始めてゐた。次いでトボリスク地方にはロシア農民の移住が徐々に行はれ、一五八一年には哈薩克（カザツク）の首領エルマークが、シベリア城を攻擊して之れを屠り、その翌年にはトボリスク全省を攻略して露帝に獻じ露領に併合した。之れによつて、トボリスク地方に於けるロシア國民の數は急激に增加し、不良の徒輩は群れを成して平和なる土民の村落を掠奪し、婦女を凌辱した。

韃靼、ウオグル、オスチヤク等の土着諸民族は、最初はこの暴虐なる侵入者の名を聽くのみで戰慄してゐたが、遂ひには武器を執つて反抗した。しかし、ヴオルガ河畔に據つて强盜を業としてゐたと謂はれる獰猛なる武將エルマークが率ゆるカザツク兵は、土民軍の反抗を物ともせず、迅速にシベリアの曠野の奥深く侵入し續けた。そして、エル

マークは遂ひに土民軍の奇襲に遭つて死んだ。しかして、カザツク兵の斯るシベリア侵略は、ロシア政府の命令に依るものではなくて、大部分は彼等の自由なる發議に基く行動であつたことは、注意せらるべき點である。

元來、狩獵民族であるカザツク人にとつては、シベリアの曠野に豐富に棲息する黒貂及び黒狐等の如き最も高價なる毛皮獸を追ふて無二無三に奥地へ奥地へと突進したのであるが、カザツク人の背後には、それ等の毛皮をヨーロツパに販賣して巨利を獲得した商人團があつて、カザツク兵の侵略を支持して益々奥地に進ましめた。即ちカザツク兵の本能的な狩獵慾と、利益を追求する商業資本が結合してシベリアの侵略が進行したのであつた。

然るに、ロシア本國内に於ける專制貴族の重壓に堪へ兼ねて、鄉土を捨てゝ逃亡する農民や異端者分子等は、カザツク兵と商人の跡に從つて、滔々とシベリアに流入し、隨所に柵を設け、砦を築いて村落や町を建設し、そこでは農耕と共に先住土民を對照とする商業が繁榮したので、カザツク兵が野獸を狩つた跡は、自然にロシア人の植民地となつて行つた。一六五〇年頃までにバイカル湖以西のシベリアの曠野には、斯くて到るところにロシア國民が居住するやうになり、次いで極東ザバイカル地方への植民が進行しつゝあつた。

極東地方侵略の先鋒たるハバロフの率ゆるカザツク兵の一隊は、一六四九年には早くも極東地方の大半を過ぎて、黒龍江とウスリー江の合流點に到達し、城砦を築造し、附近の漢人農民を掠奪し迫害した。その支隊は間もなく太平洋岸に出で、一六九七年には遂ひにカムチヤツカに達した。商人の一團は十八世紀の末葉には、千島列島及びアリユーシヤン群島を經てアラスカに渡り、北米カリフオルニヤまで南下して、毛皮會社を興したのであつた。

斯くて、僅々百年の間に於て、自由なる掠奪者の手に依つて、全歐洲の一倍半に匹敵するシベリア及び極東地方一千二百五十萬平方粁の地域が、何等の國際法的條約に據らずして、且つ素よりシベリア及び極東地方の先住諸民族は、ロシア國民の侵略に對して到る處で不斷に反抗したが、當時シベリア諸族が、原始的な武器を使用したに比し、カザツク兵は既に大砲を有し、彼我の武器には數段の差があつたので、無數の土民男子は、恰も野獸を狩るが如くに殺戮せられ、財産は掠奪せられ、婦女は怖るべき惡德の犧牲に供せられたのみであつた。又カザツク兵は征服の後には必らず土民より貢物を徵收したが、一五八六年にシベリアよりロシア皇帝に獻上した貢物は、黒貂二十萬、黒狐一萬、栗鼠五十萬に達したと謂はれる。シベリア及び極東地方に於けるツラン民族敗退の悲慘なる情景は、寔に目を覆ふものがあつたであろう。

第三節　露・支の衝突

ロシア國民の東方侵略の魔手が、黒龍江岸に及んだとき、支那政府(清朝)は始めて滿洲北境の脅威に目覺めたのであつた。

卽ち、ハバロフがウスリー河口に城砦を築造した一六四九年頃には、極東地方は滿洲地方官憲の支配下に屬し、黒龍江北岸には、既に漢人農民が移住して、土地を開墾しつゝあつたのであるが、それ等の支那農民はカザツク兵のために土地を追はれ、逃げ遲れた者は虐殺や凌辱をうけた。しかも、勢ひに乘じたカザツク兵は滿洲を脅威したので、滿洲の地方官憲は急を北京政府に報じ、兵を出してカザツク兵と戰ひ、一時は黒龍江岸及び東部ザバイカル境界附近のロシヤ人を完全に擊退したのであつた。しかし支那政府は、溫暖にして人口稠密せる南方の領域に眩惑せられて、寒冷未開の極東地方及びシベリアを重要視してゐなかつたがために、ロシア國民の東方侵略に對しても部分的には强

硬に反對したが、廣大なる全シベリア極東地方に對しては、何等の對策をも有しなかつたと見られる。

之れに反し、ロシア政府はカザック兵の東方侵略の經過に鑑みて、その豐富なる資源に着目し、シベリア及び極東地方に進出せる自國民の保護及び新らたなる植民政策を考慮しつゝあつたので、一六八九年に滿洲北境に於ける露・支兩國間の紛爭を解決すべきネルチンスク條約を締結して、一と先づウスリー江及び黒龍江岸の、ロシア國民の撤退を承認した後も、實際には條約を空文に歸せしめて、依然としてロシア國民の當初の侵略地域を維持したのであつた。蓋し、當時のロシア本國は、積年の貴族の跋扈と宮中の腐敗及び國民負擔の加重によつて、國内的憂患を助成し、且ヨーロッパ列强間には、熾烈なる軍備競爭が行はれてゐた時も時、支那兵のために黒龍江畔アルバヂン城を殘すのみでロシア兵は驅逐せられたので、一と先づ四十餘年に亘る露・支紛爭を解決すべく、ネルチンスク條約を締結したのであつたが、條約締結後は狡猾執拗に、當初の侵略地域を奪つたのであつた。

そも〳〵一六八九年に、ネルチンスク條約に於て定められた露支國境は、條約中の

「ロシアと支那との境界は、外興安嶺とアルグン河を連ぬる線を以つて規定す。又黒龍江に注ぐエルグナ河南方の地域は、支那帝國に屬し、その北部はロシアに屬す。」

との條項によつて、シベリア東部即ち極東地方は完全に支那領となつて、清帝聖祖(康熙帝)は、ゼーヤ河畔に屯田兵を駐屯せしめたのであつた。然るに、その後支那の内憂外患に乘じ、ロシア人は再び黒龍江岸に侵入したもので、ネルチンスク條約は、外交的道義感を有せぬロシア政府の、御都合主義的な一つのトリックに過ぎなかつたのである。

一七四一年頃に至るや、ロシア本國では、カムチヤツカ方面との連絡の必要上、黒龍江航行權の獲得が盛んに論議せられ始め、一八〇四年にはアレキサンドル一世の命を奉じたレザーフが長崎に來たつて、日本との通商を要求して將

軍家齊に拒絶せられ、樺太、擇捉を荒し廻り、一八一一年にはロシア測量隊員が日本邊防隊に捕へられる等、極東地方の緊張は日本の北境にも波及したのであつた。

一八四九年にはロシア探險隊は、太平洋よりする黒龍江の航行が可能であることを知り、その翌年黒龍江口にロシア國旗を打ち建てるに及んで、當時の露帝ニコラス一世の極東經略は、愈々積極的となり來つた。之れより先、ニコラス一世は一八四六年にムラビョーフをして、極東經略の衝に當らしめることゝし、大命を奉じたムラビョーフは一八四八年にイルクーツクに到着し、翌年五月に極東地方視察の途に就いた。そして、ニコライエフスクを極東經營の根據地と定め、本國より招致した陸海兵を以つて武備を整へ、玆にロシア極東經營の最初の足場を築くことに成功した。

斯くてムラビョーフは一方支那政府に「極東守備の必要上、黒龍江に軍艦を下航せしめるに依り、改めて露・支國境を劃定し度き」旨を通達し、他方海陸の兵員を黒龍江の要地瑷琿に集中し、一八五八年遂ひに滿洲の地方官憲を威嚇してロシアの黒龍江領有を型式的に認めしめた。之れ即ち瑷琿條約であるが、北京政府は之れを批准しなかつたので、二年後に支那が英佛と紛議を起せるに乘じて、漸く北京條約を締結して黒龍江北岸の領有を確實にし、遂ひに現在の極東地方を完全に獲得したのである。同時にロシア政府は一七六〇年に、エリザベート女帝がシベリアを流刑地とした消極的な植民政策を廢し、普通農民の移住を奬勵して、シベリア及び極東地方の經濟的發展を企て、アレキサンドル三世は「此の豐穰なる地に對して、何等開發の手段を盡さず放任し置きたるは、朕の深く慚愧するところ、今や其の時機は至れり」と宣して、歐亞を連結するシベリア横斷大鐵道の敷設に着手し、一八七二年にはウラヂオストツク港を發見して、東洋艦隊の根據地をニコライエフスクからウラヂオストツクに移し、此處に要塞を築造した。

しかして、シベリア鐵道は一九〇〇年に完成して全世界を驚倒せしめたが、それはウラヂオストツクの武裝と共に

武斷的東方征略の基礎を成就したものと謂ふべく、既にロシアの東方經略は、カザック兵と毛皮商人團とに依つて遂行せられたところの、冒險と掠奪による無軌道的發展ではなくして、確固たる大帝國の强硬なる國策として、東亞の天地に顯現したのである。そして斯るロシアの東方經略は、折柄南支に殺到せる歐米海洋勢力の强壓と、國內の不穩なる情勢に苦悶しつゝあつた支那政府の弱勢に乘じて益々發展し、日淸戰爭後は、所謂三國干涉の擧に出でゝ當時の日本國民に悲憤の血涙を絞らしめ、滿洲、遼東はロシアによつて急速に武裝せられた。朝鮮は露骨に威嚇せられた。東亞全局の情勢は極度に緊張し、遂ひに滿洲の曠野に戰塵が揚つた。

斯くて奉天原頭の神風一過、敗戰したロシアはシベリア及び極東地方の經濟的發展に主力を注ぎ、以つて他日を期したが、成果を見ずして一九一七年の帝政崩壞に遭遇したのである。

第四節　革命混亂時代

ロシア帝政の崩壞と共に、極東地方は俄然異常の混亂に陷つた。極東ソヴエート政府は一度び組織せられたが、中央よりの支持が弱く、騷然たる反革命的情勢の裡に一九一八年まで維持せられ、同年シベリア政府組織問題に關聯して、列國がコルチヤック軍援助の共同出兵を斷行すると共に崩壞した。そして、極東地方の政權はコルチヤック將軍の手に歸したが、各國の利害——特に日本の優越を嫉視したアメリカの防害に基く——不一致と、それに伴ふ反革命軍即ち白軍の離反によつて、一九一九年に至つても統一された政權は樹立せられなかつた。

革命黨員は、斯る反革命軍の混亂に乘じて極東地方に暗躍し、所在にパルチザンを蜂起せしめ、一九二〇年三月には所謂ニコライエフスクの慘劇が勃發して、日本の上下を憤激せしめ、皇軍の北樺太出兵が行はれた。

黑龍州、沿海州、ザバイカル地方にはセメヨーノフ、ウンゲルン、チルバツハ等の白系將軍の政權や、親蘇的な政權が地方的に出現し、混亂は益々甚だしくなつたが、一九二一年に至りメルクーロフ政府が日本の支持に依つて成立し、將さに極東地方の統一が成就するかに見へたが、極東地方及びシベリアの富源に虎視耽々たりしアメリカが、當時歐米追隨主義に墮してゐた日本の外交を壓迫して、日本軍を撤兵せしめたので、メルクーロフ政府は忽ち崩壞し、一九二二年十月にはウヂラオストックが革命軍の手に歸した。

次いで白系諸將軍は悉く敗退して、革命軍による極東共和國が樺太を除く全極東地方を統一し、一九二二年十一月ロシア社會主義聯邦ソヴエート共和國中央執行委員會幹事會は、極東共和國の領域を以つて、極東州の名の下にソヴエート聯邦の一部分となす旨を宣言し、茲に始めて、革命ロシアの政治、經濟の機構が極東地方に實施せらるゝことゝなり、一九二五年の日・蘇條約により、北樺太もソヴエート聯邦に復歸し、兩後數次の行政區劃變更が行はれて今日に至つた。

しかして、十六世紀の末葉以來シベリア及び極東地方に移住せるロシア人達は、永きアジアの生活によつて、アジア人としての意識を抱懷するに至り、シベリア出身の碩學者ヤドリンツエフ、ポターニン、ガラワチョーフ等は、一八六〇年頃既に「アジア人のアジア」を主義として絶叫し、シベリア及び極東地方の獨立運動を企てたが、時機到らずして捕縛投獄せられた。けれ共、一度び芽生へた獨立への憧憬は容易に消滅せず、一九一八年以降の反革命鬪爭は、即ちそれの復活であつたとも見られ得るであろう。

從つて、シベリア及び極東地方の民衆の胸底には、今尙ソヴエート政權に對する反抗の血が流れ、生活の困窮に刺激せられて、最近年に至るも峻烈な彈壓の下から、絶望的な反抗が企てられつゝある。若しもソヴエート政權が政策

に蹉跌を生ずるか、又は對外戰爭に破れるが如き場合には、獨立運動は再び熾烈化するに至べく、その場合、シベリア及び極東地方の獨立運動は、運命的のものと見なければならぬであろう。

第三章　極東地方の政治組織

第一節　政治組織

ソヴエート政權下に在る極東地方の政治組織は、特種の地方を除くソヴエート聯邦の他の地方と、何等異るところはない。

即ち、その最高權力機關は極東地方ソヴエート大會にして、之れは地方内の都市ソヴエート、市的勞働者居住地ソヴエート、工場ソヴエート、村落ソヴエート等の代表者を以つて組織し、普通は年一回招集せられる。その權限は、下級ソヴエート大會及びソヴエートの監督、地方豫算の承認、社會文化及び經濟の地方的施設に關する基本的計畫樹立等の、地方的政治行政上の諸問題を解決し、又ソヴエート聯邦ソヴエート大會委員及び地方ソヴエート執行委員を選出する。

地方ソヴエート執行委員會は數多の部に分かれて、一切の政治行政を執行する機關で、地方ソヴエート大會閉會中に於ける最高權力機關である。これの下に、州又は區ソヴエート大會及び執行委員會があり、その執行委員會は、農村經濟の社會主義的建設及び發展、プロレタリヤの集團協同化、食料の貯藏及び配給の統制、教育文化施設の施行、州又は區豫算の遂行等の全般の行政を掌る。

しかして、斯る上層機關の下に、村落ソヴエート、都市ソヴエートが置かれ、之がソヴエート聯邦に於ける細胞單位であつて、ソヴエート聯邦を形成する巨大なる全ソヴエート・システムの礎石と成るものである。

第二節　行政區劃

極東地方は一九二二年十一月にソヴエート聯邦に併合され、一九二六年まで帝政時代の縣別の内部區劃に基いて極東州と稱したが、一九二六年に縣別區劃を廢して

黒龍管區、浦鹽管區、ゼヤ管區、カムチヤツカ管區、ニコライエフスク管區、
サガレン管區、スレーチンスク管區、ハバロフスク管區、チタ管區、
の九管區及び七十五區に分ち、名稱を極東地方と改めた。（本書に於て謂ふ「極東地方」は即ちこの地域を指すのである）。

次いで一九三〇年にはシベリア全般に亘る行政區劃改正を行つてチタ、スレーチンスクの二管區は新設の東部シベリア地方（即ち所謂ザバイカル）に編入せられて、極東地方から脱し、同時にカムチヤツカ、サガレン、オホツクを除く他の管區制を廢して地方――區――村に分ち、ヤクート自治共和國コマリ河下流のシベリア族居住地域を、新たに極東地方に編入した。

また一九三三年一月には、地方經濟發展の指導上の便宜のためと稱して、左の如く區劃變更を行つた。

極東地方の政治組織

	州名	管區名	區名
獨立區	沿海州	チユコートスク	ピロ・ビヂヤン
	黒龍州	コリヤーク	ニヂネ・タンボフスク
	カムチヤツカ州	オホツクエウエンスク	都市附屬地
	樺太州		

獨立都市——ハバロフスク

然るに同年六月及び一九三四年七月に復亦行政區劃を變更し、現在の極東地方は左の八州、一自治州となつてゐる。

州名	區域
沿海州	日本海沿岸の七區、州都ウラヂオストック市
ウスリー州	舊沿海州内のウスリー江沿岸、州都ニコリスク市
ハバロフ州	舊獨立區、都市附屬地、コムソモリスキイ區、クル・ウルミイスキー區、州都ハバロフスク市
ニヂネ・アムール州	舊ニヂネ・アムールスク、オホツク兩管區、州都ニヂネ・アムールスク（舊稱ニコライエフスク）
カムチヤッカ州	舊州區域びコリヤーク、チユコウツク兩管區、州都ペテロパウロスク市
樺太州	舊區域、州都アレクサンドロフスク市
黒龍州	舊黒龍州東部六區、州都ブラゴウエシチエンスク市
ゼヤ州	舊黒龍州西五區、州都ゼヤ州市
ユダヤ自治州	舊ビロ・ビヂヤン獨立區、州都ビロ・ビヂヤン市

ユダヤ自治州即ちビロ・ビヂヤンはソヴエート聯邦政府が「虐げられた世界のユダヤ人よ、ビロ・ビヂヤンに來たれ」とのスローガンの下に、世界の無籍漂泊民ユダヤ人のためにビロ河、ビヂヤン河の流域四萬八千平方粁（四國の約二倍の面積）の廣大なる土地を解放して、ユダヤ人のみの自由國を五ケ年計畫の一つとして結成せしめんとし、全ユダヤ人に異常なセンセーションを惹起し、ソヴエート政府の極積方針と、在アメリカのユダヤ大財閥の支援によつて、バルチツク沿岸及びアメリカから二萬人のユダヤ人移民が行はれ、世界の關心を惹いた。しかし、移住地としての施設に不充分であつたがために、一九三五年一月の戸口調査の結果、二萬人のユダヤ人は僅かに三千人餘に激減し後にはウクライナ人、支那人、ツングース人、ヤクウツク人等が何處からともなく移住し來たり、その數四萬人に達して勢力を揮るつてゐることが判明した。しかして、ソヴエート聯邦政府がユダヤ人自由國を建設せんとした目的は、世界各地に鞏固な財力を布いて、しかも世界何處に於ても排撃、迫害をうけつゝあるユダヤ人を懐柔して、遠大なる極東政策を樹立せんとしたものであると觀られるが、斯るソヴエート聯邦の世界ユダヤ人政策は、破綻に頻してゐると謂はれてゐる。

尙ソヴエート聯邦政府は、地方經濟事情の變化その他の理由に基いて、頻繁に行政區劃を改正し、或は地名を變へるので、上記の區劃及び地名も何時、如何に變更せられるかは、素より圖られぬところである。

第四章　極東地方の資源

第一節　鑛物資源

極東地方の地下に豐富な鑛物資源を藏してゐることは、夙に知られてゐたが、ソヴエート聯邦政府は一九二八—三二年に亘つて之れが精密調査を行ひ、愈々極東地方がソヴエート聯邦にとつて最も重要なる鑛業地帶であることを明確にしたと謂はれる。しかして、ソヴエート聯邦政府の調査は、未だ完全に終了したものではないが、その主要なるものは左の如くで、之れに依つて尨大なる重工業地帶建設が企圖せられ、新らしく世界の注視を惹いてゐる。

金鑛　主として砂金であるが、極東地方の各河川の流域には悉く產出し、その埋藏量は六千噸乃至九千噸と推定せられ、之れを一匁五圓として英噸に換算すれば、實に八十一億圓乃至百二十三億圓に相當する巨額である。又之れを全ソヴエート聯邦領の金埋藏量に比較すれば約その六〇%を占め、アラスカに匹敵すべき世界的產金地帶である。

革命前は比較的交通容易なる地方に於て、帝室經營及び個人經營の産金事業が盛んであつたが、技術的設備を有するものは僅かに九鑛區に過ぎず、大部分は原始的方法に依つてゐた。革命後はソヴェート聯邦政府によつて一九二五年四月に國營機關として「極東採金トラスト」を設けて漸次設備を改善し、鑛區を擴大して金の産出增加を計つてゐる。最近の産金額は公表せられてゐないが、革命前數年間に於ける一ヶ年の平均産金額は約三萬瓩に達し、革命後は激減して一九二六―二七年度は五千七百瓩であつた。

埋藏量の最も多い地方は黒龍州にして、約三千九百噸を有すると謂はれ、更に最近年に發見せられたレナ金鑛區の砂金鑛區の金含有量は世界有數のもので、就中、コモルコの金鑛區は露天掘りで金を採取し得られる程に多量に埋藏するといふ。將來之れ等の廣大なる産金地帶に化學的方法が適用せらるるに至れば、金生産額は驚くべき數字を示すに至るであろう。

銀鑛　革命前にはザバイカルで盛んに銀産業が行はれたが、現在ではシホタ・アリン山脈東部傾斜地にあるテチュヘの銀鉛鑛が最も經營價値を有すると謂はれる。貧つてイギリス資本によつて經營してゐたが、近年ソヴェート聯邦政府の壓迫に因り休業してゐる。

鐵鑛　昭和七年にカズロフ博士は、極東地方全體の鐵埋藏量は六億噸と發表したが、鐵を産する地層として知られてゐるのは、ザバイカルのペンギンスコエ、黒龍州の小興安嶺山脈地帶及び沿海州南部のオリガ地方その他數ケ所である。

現在採鑛中に屬するものはペンギンスコエ鑛鑛にして、附近にペトロフスキー鐵工場を有し、鑄鐵を製造して極東地方及びシベリア地方に供給してゐる。小興安嶺鑛區は既に七十年前に發見せられ、三億噸乃至五億噸の赤鐵鑛を有すると謂はれてゐたのであるが、最近年精査の結果、六十億噸の埋藏量を有することが判明し、ブレーヤ河畔の石炭と相俟つてブレーヤ・マロヒンガン聯合企業が計畫せらるるに至つた。

石炭　極東地方は石炭地層が豊富であつて到る處に産する。主なる炭田は次の如くである。

黒炭＝(A)蘇城炭田　沿海州蘇城河、シイッア河附近にあり、沿黒龍兩州に於ける第二の炭田として炭質良好、埋藏量二億四千五百萬噸、國營として採掘中である。(B)上綏芬河炭田　沿海州の西南部綏芬河流域にあり、滿・蘇國境寄りと、ウスリー鐵道寄りとの二

炭田に分れ前者は瀝青炭にして灰分五―一〇%、後者は揮發分、灰分共に多い。未稼行炭田であるが地質的埋藏量七億噸と稱せられ、極東地方に於ける有望炭田である。(C)ブルペス炭田、黒龍州ブレーヤ河の上流及び中流にあり、總面積一萬五千平方粁、埋藏量一千億噸乃至一千四百億噸、炭質良好にして極東地方第一の大炭田として、クズバス炭田に次いでソヴェート聯邦第二位と稱せられる。(D)北樺太西海岸炭田　日・蘇國境線より西海岸寄りに全長二百二十粁に亘る大炭田にして、二十億噸を埋藏し炭質は頗る良好、ア レクサンドロフスクに近く、一部は國營として稼行してゐる。尚北樺太には日本が日・蘇修好條約により採掘權を有する炭田があるが事業は概ね不振である。その他カムチヤッカ及び黒龍州に良質炭があるが、埋藏量は不明である。

褐炭＝(A)南部ウスリー地方褐炭産地　ウラヂオストック北方のアルチモーア炭田に一億二千萬―一億七千萬噸あり、國營として稼行中。(B)ハバロフスク南方褐炭産地　未稼行にして埋藏量不明なるもハバロフスク市に近接してゐるので重要視される。(C)レーヤ、ザヴイタヤ褐炭産地　黒龍江及び鐵道に近接し埋藏量數億噸、キヴタ及びライチーハの兩坑は稼行中にして炭質良。(D)ブラゴウエシチエンスク市附近　最近の發見にかゝり、ブ市より八十粁。詳細不明。(E)カムチヤッカの石炭。(F)ザバイカル褐炭産地至る處に産し大小の炭田數十を算する。主なるものはチタ市に近きチエルノツ炭田にして埋藏量十億噸、國營として稼行中である。

尙一九三二―三三年の極東地方石炭輸出額は一九三二年一、七九五、一八四噸、一九三三年一、八一七、五三四噸で、この中、兩年に亘り三十萬噸が日本に輸出せられてゐる。

石油　極東地方に於て石油の産地として知られてゐるのは、北樺太東海岸及びカムチヤツカのボカチョフカであるが、最近バイカル湖畔に於て新たに油田が發見せられたと傳へられてゐる。

北樺太の石油埋藏量は一億―五億噸で、一九二五年に締結した日・蘇修好條約に基き、一部は日本側で採取してゐるが、ソヴェート聯邦政府は、北樺太油田は日本のために全く吸收せられる危險があると稱して採取を開始し、一九三三年の第二次五ヶ年計畫第一年度に三十萬噸、第五年度には百五十萬噸を計上した。カムチヤッカ油田の鑛床狀態は明瞭でないが、露出面は廣大である。樺太の石油が日本の液體燃料界に重大意義を有することは謂ふまでもないところである。

其他の鑛物　ハバロフスク、ブラゴウエシチエンスク、ピロ・ビヂヤン及び小興安嶺山脈西部に於ける泥炭、ザバイカル南部に於けるタングステン及び蒼鉛、水鉛鑛、錫鑛、カムチヤツカに於ける硫黄、その他黒龍江上流及びゼヤ

河沿岸に於ては石灰、大理石及び水晶、トパース、綠柱石、紫英石、電氣石等を産出する。

第二節　森林資源

森林資源は極東地方に於ける最大の資源と稱せられ、その總面積は九十萬平方粁にして、經營可能面積及び森林の繁殖より算定せる木材の年可能生産量は左表の如くである。

極東地方の森林資源

地方別	經營可能面積（千平方粁）	年生産可能材積（百萬立方米）
ザバイカル	一一六	一七・六
黒龍州	一二三	一八・七
沿海州	二一四	三二・二
樺太	一七	二・六
カムチヤツカ	三九	四・五

樹種はザバイカル地方に樺、落葉松、黒龍州及び沿海州南部にモミ、タウヒ、朝鮮松、クルミ、楢、楓、オホツク海沿岸地方及びカムチヤツカにタウヒ、センプラ松、樺、朝鮮ヤマナラシ、ハンノキ、ヤマナラシ等で材質は概ね良好である。しかして、右の表に示された年可能生産量は、將來に於ても極東地方豫想需要量の數倍に達するものにして、必然的に木材輸出及びパルプ、製紙工業の勃興を促すことゝなる。現在伐採せられつゝあるのはザバイカル、沿海州の一部のみで、他は運輸、製材、伐木等の設備及び勞働力不足のために、殆んど千古の處女林のまゝに放置せられてゐる。製材業は流筏に便利なウスリー鐵道沿線が最も盛んで、オホツク海、日本海沿岸の諸港は木材輸出で繁榮する。

日本の「露領林業組合」は韃靼海峽沿岸地方に林區權を有するが、ソヴエート聯邦政府は森林開發のために二千五百萬ヘクターを開放して、外國資本を導くことを企てた。又ソヴエート聯邦政府自らも、第二次五ヶ年計畫に於て木材生産を一九三三年に一千萬立方米、一九三七年に二千五百萬立方米に增大せしむべく計上した。

第三節　水産資源

極東地方―オホツク海、ベーリング海―の水産資源は、極東地方經濟を特色付けるものであるが、ソヴエート聯邦政府は之れに大なる注意を向けて、漁船及び加工業設備を改善し、漸次生産力を增加しつゝある。即ち一九三二年度は前年度に比し七〇%を增加して、約三百萬セントネル（一セントネルは一〇〇瓩）を生産し、第二次五ヶ年計畫最終年度の一九三七年には、八百萬セントネルを生産する豫定である。ソヴエート聯邦技術者は北洋漁場に對して「技術の完成によつて年産二千五百萬セントネルに達し得る」と稱してゐる。

ソヴエート聯邦政府の斯る生産增加計畫は、必然的に日本の北洋に於ける既得權益に牴觸するに至るもので、日本の北洋漁業權を縮少するために、あらゆる術策を廻らして壓迫を加へつゝあり、過去數年來日・蘇兩國間の重大懸案となつてゐる北洋漁業權問題は、斯くてソヴエート聯邦の漁業發展に伴つて生起したのである。

第四節　毛皮資源

毛皮資源は、かつてロシア國民をして、シベリア及び極東地方を侵略せしめた最大の誘因であつたが、數十年に亘る毛皮獸の濫獲の結果、近年の生産額は漸減の傾向を辿つてゐるやうである。しかし狩獵及び毛皮業は、依然として北部地方シベリア族の主要産業であると共に、各地方ロシア人の大なる副業である。

現在、狩獵及び毛皮業が盛んに行はれてゐるのはカムチヤツカで、それに次いではザバイカルであろう。カムチヤツカでは白狐、黒狐、青狐、白熊、オットセイ、ラツコ等の最も高價な毛皮を産し、ザバイカルでは栗鼠、タルバカン、狐、獺、狼等が多く、森林地帯では黒貂、麝香猫、大鹿、鹿、野猪、虎、獾等を獲る。又從來之れ等毛皮の大部分は、密輸出によつて國外に運搬せられてゐたので、正確な生産額は判然しないが、一九一三年に極東地方で買付けられた毛皮に就いては次の如く計算せられてゐる。

栗鼠三千枚、狐五萬枚、黒貂九千五百枚、シベリア鼬十四萬枚、青狐二千枚、白狐一萬五千枚、羆四千五百枚、黄鼬十二萬五千枚、麝香猫十二萬枚＝この價格四百七十六萬一千留。但し、この外に約三割の密輸品を計上すれば總額六百八十萬留である。

革命後は國營シンヂケートによつて毛皮を買付けてゐるが、その金額は一ケ年平均二百萬留で、密輸出品を最少限三五％として約三百萬留を生産しつゝあるものと見られる。又ソヴエート聯邦政府は、この莫大なる毛皮資源の保存及び輸出の合理化のために、狩獵民を組合化し、既に全狩獵民の八〇％を統一したと稱してゐる。

第五章　極東地方の産業

第一節　農業

極東地方の大部分の面積は、森林及び無毛の凍土帶によつて占められ、且つ尠からぬ濕地があるために、その總面積が廣大なるに比較して可耕地は少い。又氣候的並に地理的條件によつて、從來の農業植民も盛んではなかつたので極東地方の農業は概して不振の狀態であつた。しかしこれは獨り農業のみの狀態ではなくして、工業に於ては更に甚しかつたのである。

可耕地はウスリー江、黒龍江、ゼーヤ河、ブレーヤ河、アルハル河及びそれ等の支流の沿岸にあり、就中黒龍州は極東地方の穀倉と稱せられてゐる。將來は森林の伐採及び濕地の整理等によつて、耕地面積を增加する計畫がある。

一九二七―三三年までの主要農産物は次の如くであつた。

主要農産物收穫高（單位一千セントネル）

作物名	一九二七年	一九三一年	一九三二年	一九三三年
裸麥	二、二〇八・七	一、九四一・九	三五八・〇	一七四・〇
小麥	二、五九八・八	一、七九八・二	五〇・〇	二、七七八・〇
燕麥	二、〇七二・五	三〇二・五		二、三二七・〇
大麥	一八二・四			一一三・〇
米	三〇四・九			
蕎麥	一五九・三	三五八・〇		
黍	四一五・一	四二五・三		
粟	六〇五・七	一一六・八		
	三四五・〇	五〇・〇		
	二五四・六			

玉蜀黍	一〇七・一	七二・五
大豆	〃	〃
日向葵	〃	〃
〃	〃	五三三・九
〃	〃	七三・五

ソヴエート聯邦政府は、極東地方の農業に對しても他の地方に於けると同じく、生産の增加と自然環境の弊害克服のために農業の機械化＝トラクター使用、飛行機播種＝及び農民集團化＝ソフホーズ、コルホーズの組織＝政策を實施しつゝあり、ハバロフスクに大規模の極東農具工場を建設し、各地にマシン・トラクター・ステーション及び附屬修理工場、電氣脫穀所を設け、播種面積も一九三二年の百三十萬ヘクターを、一九三七年には二百三十萬ヘクターに增加して、農業生産を一躍倍增する計畫であるが、實際には、農業の機械化と農民の集團化のために、却つて平均收穫量は減少し、極東地方に於ては食料不足の狀態に陷つてゐるものゝ如くである。極東地方に於ける食料要求の暴動及び兵士の「給與食料の量の增加」が叫れてゐることは、屢々傳へられてゐるところである。

牧畜は、養鹿が先住シベリア族の基本的產業であり、ロシヤ人農民も多く勞役用の牧畜を行つてゐる。その家畜數は馬、牛、緬羊、山羊、豚が八十五萬頭、鹿が百五十萬頭に達する。養鹿業に對しては共營化＝馴鹿コルホーズ＝運動が行はれてゐるが、いまだその組織率は極めて低いやうである。

極東地方の農業に對する投資は、工業及び運輸機關に比しては對蹠的には少く、全ソヴエート聯邦歲出豫算の約一〇%が農業の豫算であるにも拘らず、極東地方に於ては投資額の二・二%に過ぎない。之れは、ソヴエート聯邦政府が、極東地方の經濟建設に就いては、工業及び運輸に重點を置き、農業は極東地方に於ては重視せられてゐない結果である。

しかし、一九三四年の全收穫量は前年に比して一六%の增收であつたと謂はれ、人口增加を一年間五%とすれば、

一〇%以上づゝの增收を見る譯で、現在の食料不足は遠からず克服し得られるであろうと謂はれてゐる。

第二節　工　業

極東地方の工業は、革命前に於ては著しく未發達の狀態にあつた。ソヴエート聯邦政府は、極東地方の工業未發達の原因が、帝政ロシアの重農政策に存したとして、極東地方がソヴエート聯邦に併合して以來、工業の建設には重大なる意義を附して異常の努力を傾注してゐる。

茲に之れを投下資本に就いて見るに、一九三四年度の全投資額十八億留の中四億七千萬留（二六・五%）、三五年度は六億六千萬留（三七・五%）を工業建設に向けてゐる。即ち、極東地方に對する全投下資本の三分の一は工業資本である。そして、一九三四年度に於ける工業生產成績は、前年度に比して次の如く增加した。

種別	三三年度對比
總額	一三四・六%
石炭產額	一三三・〇
採金	一四〇・〇
石油	一二三・四
雜金屬	一四〇・九

種別	三三年度對比
機械製造	一三六・六%
流材	一五八・〇
製材	一七一・四
加工食料品	一三九・〇
漁獲	一二〇・〇

政府は當初、前年の實績に比して六〇%の增產を目論んだのであるが、その結果は計畫に伴はなかつたとは謂へ、三四・六%の增產を得た。

又一九三五年度は一九三四年度の實績に比して、更に左の如き增產計畫が豫定されてゐる。

蘇領極東地方

種別	前年比
國營工業總生產額	一五七・八%
內譯	
重工業	一五〇・〇%
林業	
食料品工業	
地方工業	一七三・一%
鐵道關係炭山	
買附委員會	

金額
四・五八八億留
一・六二二
・八二九
・九八一
・二一五
・二六七
・六七七

尙一九三六年度の主要なる建設對照物は左の如くであるから、一九三六年度に於ては更に大なる增産が計畫せられるであろう。

○一九三五年に完成して操業を開始すべきもの

(1)蘇鉄、アルテム、タウリチヤンカ、キウダ各炭田の採炭設備擴張。(2)製粉コンビナート(ハバロフスク、ポチカレオ、ソヴエート)。(3)ロンドコ石灰工場。(4)ウスリー製材工場(製材能力年六萬立方米)。(5)タリム製鹽工場(製鹽能力年一萬噸)。(6)ブラゴウエシチエンスク・ビスケット工場。(7)ピロ・ビヂヤン裁縫工場。(8)製パン工場(ウラヂオストツク一日百二十噸、スパスク三十噸、ハバロフスク六十噸)。

○一九三五年に工場を整備して全能力を發揮すべきもの

(1)スターリン・セメント工場(スパスク、十五萬噸生産)。(2)カガノウイツチ自動車修理工場(ハバロフスク)。(3)ミコヤ製油工場(ニコリスク、ウスリスキ、年產五、六千噸)。(4)オルジョニキツゼ石油精製工場(ハバロフスク、三五年度三萬九千噸生產、石油、ベンヂン、鹽)。(5)シホタ・アリン工場內鑛石撰鑛工場(加工能力年十萬噸)。(6)カリニン製糖工場(ニコリスク、ウスリキス、年產八萬噸)。

○一九三五年に內部配備を進展せしむべきもの

モロトフ工場(三月までに壓延鋼年產六萬噸の施設完了)

○前年來投資の對照たりしもの

(1)ウマリチンスキ製鍊工場。(2)極東農業機械製作工場(ハバロフスク)。(3)冷凍工場(ウラヂオストツク)。(4)スラヂエフスキ造船所。(5)發電所(ハバロフスク、ニコリスク、アルテム)。

○コムソモリスクに建設中の軍事工業

(1)造船所、(2)自動車工場、(3)飛行機工場、(4)兵器廠。

更に、ブレーヤ河岸に藏する一千四百億噸の石炭と小興安嶺に藏する六十億噸の鐵鑛、スヴーボウドヌイ地方の熔鑛爐建造用良質粘土を以つて建設せんとするブレーヤ・マロヒンガン聯合企業は、一九三五年に鐵及び石炭の埋藏量その他の研究、研究用坑道の開設、坑道及び冶金工場建設に關する諸條件を決定し、三六年度より冶金工場及びこれを繞る機械工場、化學工場等の一大工業地帶建設に著手すべく、既に十數萬人の勞働者が動員せられつゝあると謂はれてゐる。

しかして、ブレーヤ・マロヒンガン聯合企業の建設と共に、工業建設資本は益々增大するであろうが、革命後に强行せられた工業共營化又は國營化のために、個人經營工業に彈壓を加へた結果、從來の輕工業は著しく衰微し、住民の生活上には農業に於けるが如く極度の不便を招來した。而して極東地方に於ける物質の缺乏は、この間の事情を說明するに足るものである。しかも一九三四年以降の工業投下資本も、上に述べたる如く重工業建設に重點を置いてゐるので、工業全體としては著しく生產力を增大したけれ共、他面重工業の建設は住民の生活とは些か懸隔せる關係にあつて、全般的な住民の生活上の不便は直ちに改善せられず、從つて重工業とその他の生產業とは、極東地方經濟の

內部に於て、著しく跛行的現象を呈してゐることに一大特徴を發見するのである。

第六章　極東地方の交通運輸

第一節　交　通

ロシア人侵略以前の極東地方の交通は、謂ふまでもなく極めて未發達にして、僅かに黒龍江、ウスリー江の一部に幼稚な舟運があり、太平洋及びシベリア地方の交通は頗る少なかつた。

帝政ロシアは、極東地方を掌中に收めると共に、チタ、ネルチンスク、スレーチンスクを結ぶシベリア街道を黒龍江に沿ふてハバロフスクに延長し、更にウスリー江岸を傳つてウラヂオストツクに達せしめ、北方に於てはオホツク海岸の重要港オホツクよりヤクート共和國に通ずる道路を發見し、茲に歐・亞連絡の二條の通路を得た。又一八七二年には黒龍江に定期航路を拓き、一八九五年には黒龍艦隊を設けて貨客（主として移民、軍隊、徒刑囚）の運輸を行つた。一九〇〇年にはハバロフスク＝ウラヂオストツク間及びザバイカル鐵道が滿洲を挾んで東西に建設せられ、一九〇三年には兩鐵道を連結する東支鐵道が完成して、ヨーロツパと太平洋の交通は最短距離に於て連絡し、太平洋よりする極東地方への通路開設と相俟つて、茲に極東地方は一躍して世界交通の要衝となつた。

次いで、ロシアは日露戰爭の敗戰によつて滿洲に於ける地位に不安を感じ、一九〇八年よりウスリー鐵道の終點ハバロフスクとザバイカル鐵道の終點スレーチンスクの間に、黒龍江に沿ふて黒龍鐵道を建設し、革命勃發直前の一九一六年に之れを完成した。黒龍鐵道は二條の支線を以つて江岸の都市ブラゴウエシチエンスク及びレイノウオに連絡した。けだしウラル山脈以東の大曠野を横斷して太平洋に至る大鐵道の完成は、世界交通史の異彩であると共に、大ロシア帝國の偉大なる記念品である。しかし、一九一七年以降に於ける極東地方混亂時代に、之れ等の鐵道は甚だしく損傷し、極東地方の交通運輸は完全なる中風狀態に陷つたが、一九二二年よりソヴエート聯邦政府によつて逐次改修せられ、黒龍鐵道はスコウオローデイク驛を以つて二分し、以東をウスリー鐵道、以西をザバイカル鐵道に所屬せしめ、一九二四年には略々舊態に復した。

しかして、交通運輸網の完成はソヴエート聯邦政府の極東建設に於て最も重要なる意義を附せられてゐる。之れを鐵道建設計畫に就いて見るに、一九二七年に於て既に左の如くであつた。

一、ウスリー鐵道より興凱湖に至る植民鐵道
二、ザバイカル鐵道よりブカチンスキーに至る炭礦鐵道
三、キジ湖―カストリ間の運河又は鐵道
四、ゴレンキよりコンスタンチノフスキーに至る炭礦鐵道
五、樺太の石油、石炭開發及び植民用鐵道
六、ハバロフスクよりソヴエート間を經てアヤン港に至る鐵道
七、アヤン港よりカムチヤツカの東端に至る鐵道
八、チタより外蒙古庫倫に至る鐵道

以上の如き尨大なる鐵道建設計畫は、もとよりその悉くが急速に實施せられるものではないであろうが、一九三一年末に於ける極東地方の鐵道は延長三千粁に達し、目下左記の諸線が完成又は建設の途上にある。

一、ウスリー鐵道複線工事……一九三五年末までに大シベリア鐵道幹線の中、單線であつたハバロフスク＝チタ間を複線とするものにして大體完成の模樣である。

二、バム鐵道新設……バイカル湖西方のタイシエット驛より北東に向つてスタノウオイ山脈を突破し、ブレーヤ・マロヒンガン聯合企業軍工業地帶及び產金地帶を通過して、太平洋に近いアムール河畔のコムソモリスクに達するものにして、沿道のトモツトよりルフロヴオに、エキムザンよりブラゴウエシチエンスクに近いスヴオードヌイに各支線を設けてウスリー鐵道と連結し、コムソモリスクに於てハバロフスク＝ソヴエート間の鐵道に連絡して南北に至ることが出來る。その總延長は三千六百粁に及び、ウスリー鐵道とは概ね四百粁の距離を以つて北部シベリアを横斷することゝなる。一九三五年に著工し十數萬人の勞働者と囚人によつて工事を急ぎつゝあるが、工事の詳細は極秘に附せられてゐる。この鐵道の軍事的價値の絶大なることは謂ふまでもない。

三、ハバロフスク＝コムソモリスク線新設……一九三五年起工、バム鐵道に連絡し又コムソモリスク軍事工業地帶の建設に重大なる意義を有する。

四、蘇城線の完成……從來の蘇城炭礦支線を延長して、海軍根據地と謂はれるアメリカ灣に連絡する。

五、ウランウデ鐵道工場……バイカル湖東岸に新設中にして機關車一千八十、客車二千、貨車一萬二千の修理能力を備へ、一九三六年に完成の豫定である。

道路は、革命前のものは概ね植民の經過に於て自然的方法によつて建設せられたものであるが、革命後は各主要都市、產金地帶に自動車交通に適する幹線道路を建設しつゝあり、一九三一年の總延長十四萬五千粁に達した。そしてそれは產金、林業その他の資源開發計畫に伴つて延長してゐるであろう。最近竣工又は工事中の道路はハバロフスク＝コムソモリスク間（一九三五年起工）。ウラヂオストツク＝ハバロフスク間（一九三五年竣工）。スパスク＝ヤコレフ間及びアレキサンドロフスク＝デレビンスク間（近く起工）等があり、自動車による交通は益々繁忙となるであろう。

黑龍江、ウスリー江の水上交通は航路延長七千粁に及び、太平洋岸の諸港灣＝オホツク海デ・カストリ灣、ソヴエート灣、日本海テチュヘ灣、オリガ灣、ウラヂオストツク港、ポセツト灣、アメリカ灣、カムチヤツカのペテロパウロスク港その他＝よりは太平洋各地に通ずる。

航空路は最も迅速に最近年に至つて開拓せられ、大陸部各都市とシベリア及びロシア本土との連絡は素より、北樺太、カムチヤツカにも廣大なる飛行場を設けて、東はベーリング海峽より、西はヨーロツパに至る一大航空網を完成した。

第二節　運　輸

鐵道、道路、航空、水路の擴張に伴つて運輸能力は增大し、之れを一九二七年以降の比率に就いて見れば次の如くである。（パーセンテーヂは對前年比率）

一、鐵道運輸			
一九二七—二八年		四二〇萬噸	
一九三三年		六七〇萬噸	
一九三四年		九一〇萬噸（一三五%）	
一九三五年（計畫）		一〇四〇萬噸（一一三%）	
二、河川運輸			
一九二七—二八年		一九四萬噸	
一九三三年		五二・七萬噸	
一九三四年		九五・七萬噸（一八一%）	
一九三五年（計畫）		一一七・六萬噸（一二二%）	
三、海洋運輸			
一九二七—二八年		二三・九萬噸	
一九三三年		四八・五萬噸	

極東地方の交通運輸

蘇領極東地方	
一九三四年	七三・二萬噸（一五一・四%）
一九三五年（計畫）	八〇・一萬噸（一一九%）

しかして、ソヴエート聯邦政府は極東地方の交通運輸の建設に就いては、一九三四年度に六億九千五百萬留（極東地方全投資額の三九・〇%—豫定）即ち總投下資本の約四割を消費し、更にバム鐵道の建設によつて投資額を增加せんとしてゐることに依つて、如何に之れが重大なる意義を有するかを說明するに充分であろう。

第七章　極東地方の政治的地位

極東地方は、建國の國是に於て世界赤色革命を理想とするソヴエート聯邦の全領域に於て、唯一の太平洋岸領域であることに特殊の意義を有する。ソヴエート聯邦政府は、極東地方を通じてのみ太平洋に於ける幾多の政治的、經濟的事件に參加することが可能である。そして亦、太平洋よりシベリアに進む勢力を阻止する障壁ともなるのである。

曾つて、哈薩克（カザック）軍の慘忍なる殺戮と掠奪によつて極東地方を併呑した帝政ロシアは、この地に據つて東洋全土の征略と太平洋上の覇權獲得に著目し、滿洲を武裝して支那、朝鮮及び日本に迫つたが、ソヴエート聯邦政府も亦、この地を根據として滿洲、朝鮮より日本に至る所謂コミンテルン・ルートの東路を樹てたのである。その赤化東路は、滿洲帝國の成立及び北鐵の讓渡によつて表面的には斷絶したと見られるのであるが、實際には、コミンテルンは北滿地方の匪賊及び不逞鮮人を使嗾して、ソヴエート地區建設その他の赤化工作を行はしめ、掠奪、殺戮によつて滿洲帝國の治安を攪亂せしめつゝある。

北滿一帶の匪賊が使用する精銳なる武器が、極東地方から供給せられたものであることは、既に幾度びか日滿官憲によつて暴露したところであり、ソヴエート聯邦極東軍が、滿洲國領に不法侵入して滿洲國人及び日滿官憲に損害を與へた事件も、滿洲帝國成立以來既に二百件を越えてゐる。又日本とソヴエート聯邦との間に懸案となつてゐる諸問題……北洋漁業權問題、北樺太石油石炭採掘權問題、北樺太及び沿海州森林權問題等……及び日滿兩國を一體不可分とする關係に於ては滿蘇國境問題、黑龍江航行權問題、滿蘇國境軍備問題等々の重大問題が悉く極東地方に於て發生してゐるのであるから、日本及び滿洲國にとつても、極東地方は極めて重大なる關係を有する。

しかして、極東地方に對するソヴエート聯邦政府の軍事及び經濟建設の現況を見るならば、極東地方と日滿兩國との關係は眞に戒心を要すべきものがある。即ち、ソヴエート聯邦政府の極東地方經濟開發は、一九二八—三二年までの第一次五ケ年計畫を準備期間として、第二次五ケ年計畫の第二年度たる一九三四年より本格化したのであるが、それは前記の如く住民の生活を犧牲にする重工業及び交通運輸に重點を置いてゐる。しかも、一九三二年までの二億留の年平均投資額を、一九三四年に至つて一躍十八億留に激增してゐる。之れを全ソヴエート聯邦の第一次五ケ年計畫に比すれば、その年平均額は百二十四億留であつたから、極東地方に對する一ケ年十八億留の投資はその約七分の一に相當し、之れが今後三ケ年繼續すれば、極東地方のみで全ソヴエート聯邦の第一次五ケ年計畫總量の七分の一の事業が遂行せられると見なければならぬ。又之れを人口比に就いて見るならば、全ソヴエート聯邦の人口一億六千萬人に對し、極東地方の人口約二百萬人であるから、その比率は八〇對一であり、この小人口を以つて七對一の資本を消費することゝなる。

一九三五年度のソヴエート聯邦歲出總豫算は六百五十四億留（うち軍事費八十一億留）であるから、同年度の極東

地方投資十八億留は比率に於て遙かに變化するが、それを以つても尙極東地方はソヴエート聯邦の他の地方に比して人口比的には異常なる投資を得るのである。かゝる極東地方に對する巨大なる投資の約七〇%以上が、軍隊を發送する交通運輸機關及び多分に軍需工業の性質を有する工業並に純粹の軍需工業の建設に消費せられつゝあるのが、即ち極東地方經濟開發の現況である。

又極東地方に於けるソヴエート聯邦の兵力は、赤軍、ゲ・ペ・ウ軍隊、コルホーズ軍隊、鮮支人軍隊を合して二十五萬人と稱せられ、飛行機、戰車、裝甲自動車、潛水艦等の新鋭優秀なる近代兵器と數ケ所の要塞、トーチカ陣を有し就中、アムール兵團の如きは兵員の八〇%は强烈なる戰鬪的能力を有するのみならず自動車、大砲の修理を爲し、一ケ年に二萬人の飛行士を養成し、五萬臺の飛行機を生産すると謂ふ一大航空兵力を背景として、世界一の大陸軍と謂稱してゐると謂はれてゐる。しかも、ソヴエート聯邦政府は、之れ等の極東軍に對して從來の西部地方軍隊との交替駐屯制を廢して定住的制度を施行し、尨大なる軍備によつて極東地方の戰略的獨立性を强固にせんとしてゐるが、既にその配置は明かに侵略的展開を示してゐると見られてゐる。

一九三五年七—八月の國際共產黨世界大會に於て、イタリー共產黨代表エーコリは、「極東に於ては固有の軍事經濟根據と高度の軍需工業を有する赤軍がソヴエート聯邦の國境を守備しつゝある」と叫んで喝采を博したが、このエーコリの「帝國主義者の新世界大戰準備と國際共產黨の使命」なる報告の一節は、明かにソヴエート聯邦政府の極東地方に對する方針と自信を物語つてゐるものであろう。然るに、滿洲帝國の全北境を覆ふ極東地方の如上の軍備に對して日、滿兩國の之れに對する軍備は行軍狀態を出でないと謂はれる。

又ソヴエート聯邦政府が統一せる旺盛な宣傳力を以つて「日・蘇戰の不可避」を全民衆に宣傳し、ひたすらにソヴエート聯邦民衆をして日滿兩國に對する敵愾心を挑發しつゝあるに對し、日滿兩國に於ては往々にして「極東地方の妖雲去れり」との論が行はれてゐる。

しかし、滿蘇國境上の妖雲は、原則的、本質的にはロシア人の傳統的東方政策と、ソヴエート聯邦の思想的國策によつて釀成せられたものにして、それは極東地方の經濟開發の發展に伴つて濃厚になりこそせよ、決して雲散霧消する性質のものではないであろう。即ち、極東地方は全ソヴエート聯邦の太平洋岸に於ける不撓不屈の前衞として强化せらるゝ限り、全東洋にとつての重壓である。

第二篇　外蒙古

第一章　外蒙古の自然と人文

第一節　地域・地勢・面積・氣候

廣汎なる意味の蒙古は、支那の西北に位して東は大興安嶺山脈を越えて滿洲平原に連なり、西はアルタイ山脈より西南の新疆、甘肅に續き、南は萬里の長城を以つて北支那に相對し、北は西興安嶺及びサヤン山脈を負ふてソヴエート聯邦シベリアに接する。即ち、東經八五度二〇分より一二四度、北緯三七度三〇分より五三度四五分に亘り、その總面積は約三百三十三萬八千平方粁に達する。その廣大なる蒙古の全域は、東西に延長するゴビ大沙漠によつて南北に二分せられ、漠南を內蒙古と謂ひ漠北を即ち外蒙古と呼ぶのである。

しかして、外蒙古の地域は、一九一五年の露支蒙三國協定即ち恰克圖條約によつて「自治外蒙古の領域は東は呼倫貝爾、南は內蒙古、西南は新疆及び西は阿爾泰地方を以つて境とする。喀爾喀四盟の諸蒙族及び科布多地方の限界を以つて支那國境と接す」と定められ、內蒙古の察哈爾省錫林郭勒盟より外蒙古喀爾喀地方に突出する達里崗崖地方は之れに依つて明かに內蒙古領とせられたのであるが、その後實際には、外蒙古側のために占據せられて喀爾喀地方に包含せられてゐる。斯くて、現今に於ける外蒙古の面積は、一九三一年に設定せられた行政經濟區劃によれば百五十五萬三千五百平方粁にして、全蒙古のおよそ半を占め、滿洲帝國よりも稍々大きい。

地勢は概ね海拔一千米に及ぶ高臺にして、西北部より東南部に向つて山岳地帶、草原地帶、砂草地帶に大別せられる。山岳地帶は阿爾泰、薩彥、西興安嶺等の諸山脈地帶にして河川、小盆地、湖沼、森林等の複雜地帶である。又草原地帶及び砂草地帶は緩漫なる丘陵や、坦々たる平原が連續する樹木に乏しい草原と沙漠から成る。山岳地帶には鬱蒼たる綠林と清澄なる湖水によつて、明眉な風光を有するところも多く、砂草地帶と謂へ共、砂礫のみが際涯なく連續するものではなく、多くは草原によつて點綴せられた沙漠である。山脈は北部より西南部に西興安嶺、薩彥山脈、阿爾泰山脈が連亘し、エニセイ河、セレンガ河、オノン河等の大河はソヴエート聯邦領に入り、ケルレン河は滿洲帝國領呼倫貝爾地方に流れる。

氣候は、大陸性にして寒暑共に酷烈、空氣は著しく乾燥する。これは主として南方及び東方の山脈によつて海洋の影響をうけることが尠く、緯度及び高度、周圍の諸山脈の關係に基いて雨雲が外蒙古上空に至らぬためであろう。外蒙自治共和國の首都となつてゐる庫倫（ウランバートル・ホタ）に於ける一九二六年の年平均溫度は二七度で、一月の平均は零下二四・五度、最低零下三五・七度であるが、最高は七月に三四・九度を示した。北部山脈地方に於ては夏季に若干の降雨があるが、ゴビ沙漠地方は一年を通じて殆んど雨を見ず、全般的には降雨、降雪量は極めて尠い。又夏季が短く冬季が永くして、春秋の二季は殆んど覺へず、その永い冬季には濕氣を含まぬ寒冷な西北風が强烈に高原を吹き荒れ、所謂朔風胡砂を捲くのである。

第二節　住民及び人口

外蒙古の現住民は、大多數の蒙古族と少數のトルコ族であつて、その何れもツラン系（又はウラル・アルタイ系）民

族である。

しかして、外蒙古の蒙古族は種族的には喀爾喀族、杜爾伯特族、オレト族、ジヤハチン族、ミングイト族、アルタイ・ウリヤンハイ族に分れ、トルコ族はユトン族、タンヌ・ウリヤンハイ族に分れる。

喀爾喀族……この種族は成吉思汗の直裔にして、全蒙古族の中心的種族であるとせられ、主として外蒙古の中央部より以東の地域に居住し、原始的な游牧を生業とする。人口約五十萬人にして外蒙古全人口の大半を占める。

杜爾伯特族……喀爾喀族以外の外蒙古の蒙古族は何れも所謂西蒙古族にして、杜爾伯特族はオイラート族の支族である。主として科布多地方に游牧し、人口約四萬人である。

オレート族……科布多附近に一族を成し人口は約三千人と見られる。

ジヤハチン族……蒙古アルタイの山岳地帯に二族を成して居住し、その人口は約五千人と見られる。

ミングイド族……オレート族居住地域の北方に住み、人口はオレート族と略々同數である。

アルタイ・ウリヤンハイ族……オレート族と關係を有し、アルタイ地方に七族を成して游牧する。

ユトン族……トルコ・タタール族に屬する種族にして、古老は今尚トルコ語を用ひ、回教を信奉し、農業を主産業とする等、大いに一般の蒙古族と異るところを有するが、逐次蒙古化しつゝある。杜爾伯特族と雜居し、人口は約千五百人である。

タンヌ・ウリヤンハイ族……矢張りトルコ・タタール族に屬し、トルコ・タタール語を用ひ、薩彥山脈の西南部地方に游牧してゐる。

これ等外蒙古住民の人口に就いては種々の異說があり、多きは百四十萬人と謂ひ少きは四十萬人と稱するのであるが、一九一九年より二〇年に亘つて行はれたソヴエート聯邦政府の調査に依れば、一九一八年初頭の總人口は五十四萬二千五百人、同じくソヴエート聯邦政府の一九三〇年の調査では七十六萬人と算してゐる。しかし、かゝる差は人口の增加に基くものではなくして調査の不完全に因るものと見られ、その何れが眞に近いかを斷定することは出來ないが、普通には、外蒙古の總人口を七十萬人と稱するやうである。

第三節　言語及び宗教

外蒙古に於て普通に用ひられる言語は蒙古語であるが、部分的にはトルコ族の間にトルコ語が用ひられ、又近年に至つてはソヴエート聯邦が外蒙古の政治的、經濟的支配權を掌握した關係上、ロシア語が漸次廣汎に用ひられるやうになつた。

蒙古人の宗教は、その昔はシヤマン教であつたが、元朝以降に於て喇嘛教が壓倒的勢力を占め、喇嘛の絶對權威たる西藏の達賴喇嘛、班禪喇嘛に次ぐ高僧哲布尊丹巴・呼圖克圖が庫倫にあつて熱烈な信仰を得、一九二四年にソヴエート聯邦政府の陰謀によつて第十二代哲布尊丹巴が暗殺せられるまで强力なる喇嘛政權が行はれてゐた。尙蒙古族中の小種族の間にはシヤマン教が殘存し、トルコ族は回教を信奉してゐるが、それ等は人口的にも外蒙古に於ては微々たる勢力を有するに過ぎない。又蒙古人の生活の重要なる部分を占めてゐた喇嘛教も、ソヴエート聯邦政府及びその別動隊たる外蒙古共產黨によつて彈壓せられ、最近年に至つては僧侶の數を減じつゝあるやうである。

第二章　外蒙古略史

第一節　蒙古の興隆

太古より蒙古の高原を中心として興亡した民族は、古シベリア族に次いでは新シベリア族たるツラン系（又はウラル・アルタイ系）の蒙古族、トルコ族、ツングース族及びその混血種族にして、その主たるものを種族別に示せば概ね

次の如くであろう。

蒙古族……羌、室韋
トルコ族……匈奴、突厥（チュルク）、回紇（ウイグール）
ツングース族……女眞（ニュルチン）（滿洲族）
蒙古族とトルコ族の混血族……蠕々（ジェンジェンエンエラン）、柔然、東胡
ツングース族とトルコ族の混血族……鮮卑（シベ）、契丹（キタイ）

室韋は支那の五代の頃＝西紀九一六―九六〇年＝滿洲の西北部より東部外蒙古一帶に蟠居した民族で、普通には之れを蒙古族の祖族とし、成吉思汗一族の蒙古族をその子孫と見做すのであるが、彼等は次第に西方に移動して、オノン、ケルレン兩河の間に至つて游牧してゐた。

宋代＝西紀九七六年―一一二七年＝には外蒙古の地は契丹（キタイ）族の遼＝西紀九三七年建國＝に領有せられたが、遼は滿洲族女眞（ニュルチン）の金＝西紀一一一五年建國＝に滅されて政治的統一を失ひ、塔々兒（タタル）部、泰赤烏（タイチウ）部、汪古（オンギト）部、克烈（ケライト）部、蔑里乞（メリキト）部、斡亦剌（オイラート）部、乃蠻（ナイマン）部及び室韋の裔たる蒙古部等の各異種部族が各々酋長に率ひられて對立抗爭した。南宋の高宗時代＝西紀一一二七年―六二年＝に蒙古部に族長哈不勒（ハブル）が出でゝ稍々勢力を得、始めて蒙古輔國公と號し、その孫也速該（エスゲ）は金の附庸となつてオノン、ケルレン兩河の畔に游牧しつゝ益々勢力を增大した。蒙古なる名稱が洽く知られたのは實に也速該の領土擴張時代であつた。

也速該の孫鐵木眞（テムヂン）は一一五五年に生れ、幼少にして族長となつたが、生來頗る智謀に長けてゐたので、泰赤烏部、塔々兒部、蔑里乞部等を破つて之れを服し、一二〇二年には外蒙古の中部に蟠居せるトルコ族の雄族乃蠻部を降して內外蒙古に割據せる諸部族を悉く服屬せしめ、一二〇六年オノン河畔に忽里勒台（クリルタイ）（會盟）を催して大汗（皇帝）の位に即き、成吉思汗と號して世界統一の擘をたてた。

爾後、成吉思汗は、內外蒙古を統一して國礎を安定すると共に、滿漢より遠く南方ロシア、中央アジア、支那の北半を併呑し印度、ペルシヤに出兵して歐・亞に跨る元大帝國を成し、西紀一二二七年に金を討滅せんとして甘肅省六盤山に至つて陣中に病沒した。成吉思汗の沒後も蒙古の勢力は益々揮ひ、鐵蹄遠くヨーロツパの天地を蹂躙して大ローマ帝國に迫らんとし、全歐洲を大黃禍來に震撼せしめたが、一二八一年日本九州に寇して慘敗するに及び遠征の念を斷つた。

斯くて、蒙古族は卓越せる族長の出現によつて歐亞を掩有する大帝國を築いたが、征戰のみを維れ事として獨自の文化と產業の發展を有しなかつたがために、當時既に相當高度の文化を有した漢民族を統治しつゝ却つて漢民族の文化に同化せられて軟弱となり、同時に、少數の蒙古民族による廣汎なる全領域の異民族統治は、指導的階級の軟弱化と共に漸く困難となり、內部的には相續法の不備に基く帝位の簒奪が行はれ、財政亦紊亂して、さしもの元朝も日ならずして衰亡の兆を現はすに至つた。

折柄、支那南方の漢民族の間に猛烈なる民族運動が擡頭して明朝が興るや、蒙古民族は忽ち支那本部を逐はれて長城以北の故地に還り、忽必烈（フビライ）即位後九帝百七年にして元朝の正統亡び、元裔三代にして遂ひに蒙古民族の輝かしき朝廷は崩壞したのであつた。

天朝の崩壞後、蒙古諸部族は內外蒙古に割據して抗爭したが、後年に至つて清朝に歸順して支那の統治に服するまで、嚴として長城以北に漢民族の侵入するを許さず、依然として支那の脅威たるを失はなかつた。

第二節　清朝と外蒙古

滿洲に興つた滿洲族の清朝は、西紀一六一九年頃より支那中原の覇權を目指して攻明戰を開始したが、一六三四年に先づ察哈爾の酋長林丹汗を討つて內蒙古諸部を降し攻明戰に參加せしめた。

當時外蒙古に於ては、喀爾喀の車臣汗、土謝圖汗、札薩克圖汗の三部があつて、名義上察哈爾汗に服したが、實際には三部獨立してゐた。そして、喇嘛教が既に盛んとなつて哲布尊丹巴・呼圖克圖と稱する高僧が蒙古人の信仰を一身に集め、汗王を凌ぐ勢力を有した。內蒙古が清朝に歸順した後、外蒙古の汗王は清朝に貢物を獻じたが、いまだ臣服するには至らなかつた。又シベリア及び極東地方を侵略しつゝあつたロシヤ人は、外蒙古北境に達して一六七五年頃庫倫に商隊を送つた。庫倫は哲布尊丹巴の居地にして、蒙古に於ける宗教の中心地であつた。

しかして、この頃土謝圖汗と扎薩克圖汗は不和を生じて相爭つてゐたのであるが、折柄西域地方に勢力を得て居た準噶爾王噶爾丹が喀爾喀の內爭に乘じ、一六八八年に西方より侵入し來つたので、抵抗する力無き喀爾喀諸王公は大いに狼狽し、王公會議を開いて露支の何れに援助を乞ふべきかを協議したが決せず、遂ひに「ロシア人は佛教を信ぜず言語風俗亦同じからず。支那人は佛教を奉じて人情に篤し、支那に賴ることこそ蒙古萬代の福なり」との哲布尊丹巴の主張に從つて清の康熙帝に救援を乞ふた。

茲に於て康熙帝は、大軍を發して準噶爾兵を討ち、喀爾喀の急を救ふたのであるが、この亂に喀爾喀の住民は天幕、家財、牲畜を捨て內蒙古に避難し、準噶爾部が平定せられるまで八年間境界地方に居住したので、康熙帝は歸化城、張家口の倉廩を開いて米、粟、金、茶、布及び牲畜を與へて恩養し、一六九一年には親ら多倫諾爾に行幸し、內外蒙古の王公を引見して酒を賜ひ、汗以下親王、郡王、貝勒、貝子、公、台吉等の封爵を授けた。故に喀爾喀の王公は大いに康熙帝を德とし、帝を喀爾喀諸部の可汗（皇帝）に奉じて清朝に歸順するに至つた。これ內蒙古が清朝に歸順してより五十年の後のことであるが、若しこの時喀爾喀がロシアの援助をうけてゐたならば、外蒙古はシベリアと共に既にロシアに併呑せられてゐたであろう。

清朝に歸順した喀爾喀は、後ちに土謝圖汗より三音諾顏汗が分立して四部となり、之れに額魯特、輝特の二部が附牧して六部となつた。そしに旗制施行によつて八十六旗に分かれ、四盟に分屬して烏里雅蘇台に駐在する定邊左副將軍の支配下に立つたのであるが、後ち更に庫倫に辦事大臣が置かれることになつて東部の二盟はその管下に移された。又西部外蒙古の科布多、阿爾泰地方の部族も清朝に屬し、初め十部三十旗に編成せられ科布多に駐在する參贊大臣の支配を受けたが、後ちに科布多辦事大臣が新設せられて二管區に分治せられた。しかして、庫倫の活佛哲布鱒丹巴（喇嘛教の教義によつて轉生して代々相續す）は、多數の沙畢那爾（哲布尊丹巴のために牧業に携る僧徒）を擁し、全蒙古人の絕對的信仰を一身に集めて實際上の外蒙古の主權者となり、支那政府の威令も哲布尊丹巴の同意なくしては容易に行はれなかつた。從つて、支那政府と哲布尊丹巴の間には往々にして摩擦を生じ、一七六一年頃に至り、支那政府は始めて庫倫に滿洲族の官吏に護衞兵を附して駐在せしめることゝした。

ところで、滿洲族の政權たる清朝は、支那本部の統治上北方民族が一大脅威であることに鑑みて、蒙古の牧畜保護、喇嘛教奬勵、蒙漢分離、婚姻政策等々、表面的には蒙古人を大いに優遇するかの如くにして、實際にはその發展を抑制して衰亡に導く巧妙周到なる愚民政策を用ひて、完全に蒙古人の心理を把握したのであつたが、後年に至り、漢人の勢力が政府內に浸潤し强化せられるに伴つて、支那政府の對蒙政策は漸く蒙古に對して强壓的となつた。

特に、ロシアの東方侵略が積極的となつた清朝末期に至つては、支那政府は完全に漢人政權化し、ロシア政府の侵略を防遏するために清朝多年の滿蒙封禁、蒙漢分離の政策を一擲し、國權擴張と殖産興業の名の下に滿蒙の地に漢人の移住開墾を奬勵して蒙古人の生活を脅威したので、支那政府に對する蒙古人の不滿は急速に昂揚した。就中、外蒙古に對しては從來の薄弱なる支配權を强化すべく政治的自主權の確立を企て、喇嘛教政權に干渉したので、外蒙古の王公喇嘛は極度に憤慨し、全蒙古を擧げて反支獨立の氣運が漲つた。

第三節　外蒙古の獨立

支那政府に大なる不滿を抱いた外蒙古の王公喇嘛は、支那武昌の革命に先き立つて一九一一年七月に獨立を企て、ロシア政府に援助を乞ふた。虎視耽々として蒙古經略を策してゐたロシア政府は、直ちに兵を庫倫に派して支那駐屯兵の行動を監視すると共に、北京政府に對して外蒙古駐屯支那兵の即時撤退を勸告した。

しかし、この時既に支那は革命勃發の前夜にあつて、北京政府はロシア及び外蒙古と折衝するの暇なく、ロシアの勸告に從つて撤兵したので、外蒙古は同年十一月に國號を「大蒙古」と號し、哲布尊丹巴（ジョブツンダンバ）を皇帝に推戴して獨立を宣言した。これ實に外蒙古が康熙帝に服して支那の支配下に入つてより二百年目であつた。そして、外蒙古の獨立は直ちに内蒙古に反映して、各地に熾烈なる反支鬪爭を惹起したが、内蒙古の獨立運動は悉く失敗に歸した。

然るに、外蒙古の獨立を援助したロシア政府は、外蒙古の獨立後は獨自の立場を以つて蒙支の間を斡旋し、一九一六年六月に露蒙支三國協定即ち恰克圖（キャフタ）條約の名によつて、外蒙古の獨立宣言を取消さしめて支那に外蒙古の宗主權を與へ、外蒙古には獨立に等しい自治權を許すことゝし、ロシア政府は之れが斡旋の代償として張家口以北の貿易及び交通の特權を獲得した。從つて、數年に亘つた蒙支の紛爭は、蒙支の何れにも益せずして、獨りロシアのみ益する狡猾なるロシア外交の成功によつて一先づ終つたのである。

一九一七年ロシアに革命が勃發して帝政が崩壞し、外蒙古に於けるロシアの勢力が失墜するや、北京の段祺瑞政府は急遽徐樹錚を庫倫（クーロン）に派し、武力を以つて王公喇嘛を壓迫して遂ひに恰克圖（キャフタ）條約に基く自治を取消さしめ、外蒙古は再び支那の勢力下に引戻された。しかし、庫倫に駐屯した支那兵は掠奪、暴行を演じて益々蒙古王公、喇嘛及び民衆の反支熱を煽つたので、スウヘ・バトル等の一派は蒙古國民黨を組織し、ソヴエート聯邦政府の援助をうけて入露した。外蒙古の民族的獨立國家建設運動は、一九一一年の獨立運動にも增して熾烈化した。一九二〇年にシベリア獨立運動に敗れた白系露將バロン・ウンゲルが、滿洲里方面より外蒙古に遁入し、蒙古王チベン・テレ等と共に「蒙古自治恢復」を叫んで庫倫に攻め入り、支那兵三千を虐殺して庫倫の支那勢力を驅逐して兵馬の權を掌握し、哲布尊丹巴（ジョブツンダンバ）は翌二一年一月十五日再び即位した。

この頃、スウヘ・バトル等はソヴエート聯邦政府及び第三インターナショナルの援助を受けてロシアより歸り、同年二月二十二日に蒙古の北境賣買城に於て第一回國民黨大會を開催し、三月十三日に臨時政府を組織してウンゲル軍の討伐を宣言した。折柄ウンゲル軍は庫倫に於て支那兵よりも寧ろ甚だしい暴虐を演じて民心を失つてゐた。ウスヘ・バトルが指揮する蒙古國民革命軍は、先づ賣買城駐屯の支那兵を破り、ソヴエート聯邦赤衛軍の援助をうけて、同年七月ウンゲル軍を擊破して庫倫に入城し、國民政府を庫倫に移して外蒙古の國權を繼承し、哲布尊丹巴（ジョブツンダンバ）を元首、國民黨首領ホドを總理兼外務大臣とした。

しかし、この政府は喇嘛、王公、國民黨の聯立であつたがために、ソヴエート聯邦政府の意圖をうけて外蒙古の急

進的改革を斷行せんとする革命青年黨との間に確執を生じ、一九二二年十二月に至つて政府と青年黨は武力衝突し、政府は瓦解した。その後、兩派は妥協して

一、活佛の君主を認めること
二、宗教を保護すること

を條件として新政府を樹立したが、革命青年黨は國民黨右派を反革命の名の下に虐殺して一大恐怖時代を現出し、一九二四年五月には、哲布尊丹巴（ジェブツンダンバ）を暗殺し、同年七月外蒙古の共和自治を宣言し、國號を「外蒙古國民共和國」と改めた。

「蒙古勤勞民の權利宣言」として大要左の如き外蒙古の改革事項を掲げた。

一、外蒙古の立憲君主政體を民主的共和國とせること
一、土地、森林その他の國利を國有とせること
一、一九二一年以前に締結せる國際條約及び公債の破棄
一、外國人に對する個人及び造營物の債務破棄及び連帶責任制度の撤廢
一、經營の國營並びに外國貿易の專賣制
一、徵兵制の實施
一、政・教の分離
一、言論の自由
一、集會及び結社の自由
一、教育の普及
一、平民職工に對する保護
一、男女、民族の平等
一、王公貴族の稱號並びに特權の廢止

ソヴエート聯邦政府は、蒙古國民革命軍が政權を掌握した一九二一年十一月に「兩國政府は相互に一箇の正當政府たることを承認し、且つ相互に其の版圖内に於て他の一方に對する抗敵其の他敵意ある行爲をなすことを禁ず」等の條文よりなる蘇蒙新協約を締結し、一九二四年十月には電信連絡協定を爲したが、その裏面に於ては、コミンテルンの別働隊たる革命青年黨を指導して、反蘇的分子を彈壓し、赤化分子の勢力伸張を援助したのである。又賣買城、烏里雅蘇台（ウリヤスタイ）或は科布多（コブト）等に領事館を設置し、庫倫（クーロン）には全權代表を駐在せしめて、外蒙古の自治、經濟に自國の勢力を扶植した。

特に滿洲事變後は外蒙古の赤化に積極的となり、外蒙古政府に十分の三の軍事費割當を負擔せしめて、外蒙古一帶に大規模の軍事施設をなしつゝある。外蒙古の右翼政黨たる國民黨は、斯るソヴエート聯邦政府の態度に猛烈に反對し、遂ひに各地軍隊及び民衆の暴動、ソヴエート聯邦官吏の殺害事件を頻發せしめて痛烈に抗議し、他方革命青年同盟はソヴエート聯邦政府を擁護して、外蒙古の軍事及び赤化政策遂行に狂奔し、一九三四年七月にソヴエート聯邦大使カラハンを迎へて外蒙古共和國共產黨の改組を斷行し、外蒙古共和國を改めて「外蒙古ソヴエート共和國」となし、國民黨右派に對して大彈壓を加へた。

そこで、國民黨の重要分子は二萬五千の國民黨軍を西庫倫、霍達森一帶に集中し、巴冷布達を總司令に推して、外蒙古國民政府を樹立し、「共產黨討伐、ソヴエート聯邦の侵略反對」を聲明し、ソヴエート聯邦の外蒙古赤化政策に反對の一部の民衆は國境外に逃亡した。

斯くて、今や外蒙古はソヴエート聯邦政府及び外蒙古赤化分子の强壓の下に、赤化か民族自立かの最後の段階に到達したと見られるのである。

第三章　外蒙古の政治組織

第一節　政治組織

外蒙古ソヴエート共和國の最高權力機關は大フルルダン（大國民會議）にして、之れはアイマク民、市民、軍隊の代表を以つて構成し、通常年一回招集せられ、政府員の選擧、根本法律の認可及び變更を專管し、小フルルダン議員を選出する。小フルルダンは大フルルダン閉會中の國家最高機會にして、ソヴエート聯邦の中央執行委員會に類似し、その業務に關しては大フルルダンに對して責任を有してゐる。通常大會を年二回以上開會する規定となつて居り、春と夏に招集せられる。その實際上の業務は五人より成る幹部會が掌握處理する。政府は國家の一般行政を執行し、左の十三名の政府員を以つて組織せられる。

總理	副總理
經濟會議長	軍總司令官
內務大臣	外務大臣
財務大臣	經濟大臣
文部大臣	

この中軍事會議は軍務省の上級にあり、軍の行動及び國家の任務と軍務との關係を監督する事實上の最高機關である。又政府直屬機關として國事犯搜査及び內外の敵に對する警戒に當るゲ・オ・ウエ（內防處）が絕大の權力を有する。地方に對しては自治制を施行してゐる。その行政上の單位はアイマク、ホシュン、ソモン、バグ、十戶及び市で、

軍事會議長	
國務檢查員	
軍務大臣	
司法大臣	

これ等は何れも自治制の規定に從つてフルルダンを設け、又フルルダンは各々その執行機關を有する。

しかして、アイマク（部）は元來一親族關係にあるホシュンの聯合體にして、蒙古の部族單位と見られ、その長は汗と號した。しかし現在では單に一定區域內にあるホシュンの聯合體である。アイマクの行政は、年一回各ホシュン、シヤビの長又は代理者が會合して行ひ、租稅賦役の賦課を決定する。兵事は政府より任命せられるアイマク將軍が管轄することゝなつてゐる。

ホシュン（旗）は地方行政の單位にして、旗長は一般の秩序維持、法律の實施、司法、徵稅、賦役の監督權、旗役員の任免、徵兵、旗民出家の許可等廣汎な權限を有し、旗內行政に關しては殆んど專制である。

ソモンは元來軍制上ホシュンを分割した單位であつて一中隊に相當し、戶數は一〇〇―一五〇戶で、一ソモンは二又は三のバグを含むことがある。

バグは行政上の便宜のためにホシュンを分つたもので、一定の游牧地を有し、戶數は普通五、六十戶である。

十戶は元來バグを十戶に分つて軍制上兵十名を出したものであるが、その戶數は二〇―二五戶となり、自治行政上の最小單位である。

市は現在庫倫（ウランバートル・ホタ）のみである。

又、元活佛哲布尊丹巴に直屬した沙畢那爾（牧業に携る僧徒）は八萬五千人に達するが、之れは共和制と共に特權を剝奪せられ、一九二四年よりシヤビ管區なる一行政單位に置かれた。

以上の外蒙古ソヴエート共和國政治組織は、ソヴエート聯邦の制度に則つて制定せられたものにして、各機關には蒙古人が形式的に置かれ、實際上の政務はモスコーより派遣せられたロシア人又は赤化ブリヤート蒙古人が裏面にあ

つて之れを監視操縦し、一切の重要政務は、正式の會議に諮られる前に既にそれ等赤化分子によつて審議せられ、會議に於ては單に提示せられるに過ぎないと謂はれる。

第二節　行政經濟區劃

一九三一年一月に、外蒙古共和國政府は國内の經濟開發指導上の便宜のため、全土を左の如く十三區に分つた。

行政經濟區劃一覽

名稱	面積(平方粁)	名稱	面積(平方粁)
東部	二〇二、九〇〇	ザブヒン部	九五、二〇〇
ゲンテイ部	七五、三〇〇	トルベート部	八四、一〇〇
中央部	一四九、三〇〇	コブト部	七七、九〇〇
農業部	六九、一〇〇	アルタイ部	二〇七、一〇〇
コソゴル部	一〇七、二〇〇	南ゴビ部	一五五、四〇〇
後ハンガイ部	五七、四〇〇	東ゴビ部	一六四、九〇〇
前ハンガイ部	一〇七、七〇〇		

第四章　外蒙古の産業と貿易

第一節　牧畜

古來、蒙古人の唯一の基本的産業は牧畜である。内蒙古に於ては、清朝以降に漢民の蒙地開墾が盛んになると共に蒙古人の牧地が狹められ、一部の蒙古人は半牧半農の生活に移行したが、外蒙古に於ては、未だその住民の九〇%以上が牧畜に從事する牧夫である。從つて、外蒙古の經濟に於ては牧畜が最主要なる意義を有する。住民は家畜によつて住居、衣服、食料、燃料を得、又之れを交通運輸の原動力となし、税金その他の支拂代金にも充當するので、外蒙古國民の全收入の約六〇%は牧畜に依つて得られてゐるのである。

現在、外蒙古に飼育せられてゐる家畜は馬・牛・羊・山羊・駱駝の五種で、馬は交通運輸の外に商品として支那及びソヴエート聯邦に多量に輸出せられ、乳はクムイスと稱する營養に富んだ飲料が作られる。牛は荷駄用として使役せられ、肉は多量にソヴエート聯邦に輸出せられ、その糞は唯一の燃料となる。羊は、肉が蒙古人の食用に供せられ、毛皮は衣服となり、毛はフエルト様に織つて蒙古包（パオ）（移動自在なる家屋）に用ひる等、蒙古人の實生活にとつて最も重要なる家畜として頭數も最も多い。山羊は放牧羊群の道案内役を果すもので、羊と共に飼育せられるが、乳は羊乳と共に蒙古人の生活に缺くことの出來ぬものである。駱駝は運輸及び乘用に供せられ、沙漠の船として重要であるのみでなく、毛は種々に加工利用せられる。之等の家畜より得られる收入の比率は左の如くで、羊が第一位を占める。

馬	四%	山羊	一五%
牛	二四%	駱駝	三二%
羊	二五%		

牧畜の方法は極めて原始的で、廣大なる地域に成育する野草を自由に喰はせ、出來得る限り人間の勞働力を少くして、自然が容易に供給するものを利用するといふ簡單な游牧である。家畜の改良、牧草の改良及び刈取り、獸疫の豫

防及び手當て等は殆んど行はれず、狼による被害のみでも一ケ年に家畜の一〇%を失はしめる。人間は春夏秋冬の季節に從つて、水草の豐富な牧地を選んで家畜を導くのであるが、冬季は畜へられた草もなく、水にも乏しいので、往々にして多數の家畜が斃死する。しかし、數百年來この困難なる條件に馴らされて來た家畜は、寒氣及び飢渴に對しては强い耐久力を有する。

最近に至り、政府は斯る原始的游牧の缺陷を是正するために、牧業の共營化＝コルホーズ、ソフホーズ＝を圖り、牧草の刈取りを奬勵してゐるが、その成績は良好で、外蒙古國民革命黨は「黨の計畫は完全に遂行せられた」と稱してゐる。尙一九二四―三二年に至る外蒙古の家畜の動態は左の如くで、僅々九年間に於て八九%の增加を來たしてゐる。

外蒙古に於ける家畜の增加

年度	全家畜類數	增加比率
一九二四	二三、七七六、一一九	一〇〇
一九二五	一六、四五〇、八九七	一一九
一九二六	一九、二二一、七二四	一三九
一九二七	二〇、一四一、八六五	一四六
一九二八	二一、四三五、四二九	一五五
一九二九	二一、九五〇、〇五一	一五九
一九三〇	二四、五五二、七五〇	一七八
一九三一	二五、二〇五、一三〇	一八二
一九三二	二六、〇六六、九四〇	一八九

第二節　農　業

蒙古人は古來より游牧生活を最上のものとして他の職業を賤視したが、近年に至つては外蒙古に於て支那人が農業を行ひ、更にロシア人及びブリヤート人農民が移住して農業を營みつゝある。政府は、蒙古人の農業を奬勵するために左の方針を採つてゐる。

一、蒙古人に對しては地方官憲の許可によりて無料で耕地を貸與する。

二、蒙古人の農業を營む者は一切の租稅を免除する。

三、農具及び種子を貸與する。

又漢人の農業は蒙古人を壓迫するとの理由により、漢人の借地契約滿了後はその耕地を蒙古人に貸し下げてゐる。外蒙古の可耕地調査は未だ充分に行はれてゐない。現在では賣買城（アルタンブラック）及ビ科布多（コブト）地方の諸河川の沿岸で農耕が行はれ、主として小麥、大麥、燕麥、黍等が栽培せられてゐる。しかして、農業の發達は今後の產業上重要なるのみならず、過去の植民的壓迫を排除し、且つ將來の外國植民を防止する政治的意義を有するので、外蒙古政府は農業發達に就いては特に意を用ひてゐる。

第三節　鑛　業

外蒙古の鑛物資源は、從來の探險及び地質學上の調査によれば大略次の如くである。

石　炭　中央アイマクに於ける庫倫（クーロン）の東南方三十三粁のナライハ炭田（推定埋藏量三億ブード＝一ブードは約四貫餘＝）技術的分析：水分八・三三、揮發物三五・五六、無灰コークス四八・七二、灰分七・三九、發熱量五、九四五乃至五、六六八カロリー。一九二八年の探掘量五五七、六一三ブードで原探掘地の價格七八、〇五六銀弗であつたが、一九三五年には總生產高を三十萬銀弗に達せしめる豫定である。第二の石炭產地は東部アイマクの桑貝子（サンベーズ）（バイントウメンハン）南方千二粁、滿蒙國境の西方百粁のケルトンの河

岸にあり、褐炭で埋藏量は豐富らしい。詳細は判明しないが活潑に採掘せられてゐるもの丶如くである。第三は西部蒙古の科布多山より東南方百粁餘のバトウイルハイルハン山、ハラウス湖南方、蒙古アルタイの西支脈内の三個所に散在するが詳細は發表せられてゐない。

金鑛　土謝圖汗部の巴圖爾貝勒族にモンゴル金鑛、三音諾顏汗部の南部拜達里河附近に埋藏量二萬一二萬五千ブードの金鑛、蒙古アルタイ山麓には未着手の豐富な砂金床がある。コソゴル湖東方のウリ河及びその支流一帶の砂金床よりはソヴエート聯邦全產金量の約六〇%を產出すると謂はれてゐるが、作業狀態は秘密に附せられてゐる。この外、ソヴエート聯邦科學探檢隊はバイドリ河、エデル河、ツコンギリン河、ウリ河の各流域及び恰克圖東方等の地域に於て探鑛中である。

銀、鉛、亞鉛、石墨　銀の埋藏量は不明であるが既に發見せられたものは土謝圖汗部に二ヶ處である。鉛は多量に埋藏すると見られ、土謝圖汗部に二ヶ處、車臣汗部に大鑛脈一ヶ處、コソゴル湖南方に一ヶ處の四ヶ處を發見し、亞鉛は車臣汗部に一ヶ處產する。又コソゴル湖附近には全山良質の石墨より成るものが二ヶ處にある。

之れ等鑛物資源の開發狀況は近年秘密に附せられ、發表を禁じてゐるので詳細は判然しないが、相當活潑に開發せられつゝあると見られる。產金は全部ソヴエート聯邦に送られ、國外への密輸者は死刑に處せられると謂はれてゐる。

第四節　狩獵

從來、蒙古人は宗教上の觀念から營業的に狩獵を行ふ者が少く、且つその生活上にも餘り之れを必要としない傾向があつた。從つて、外蒙古の狩獵は大部分は外國人によつて行はれたのであるが、近年に於ても毛皮其の他の獵獲物は、家畜及び畜產品に次ぐ輸出貨物で、外蒙古全輸出額の約半額を占めてゐる。

獵獲物は主として草原のタルバカンであるが、シベリア國境に近い山地には貴重毛皮獸が棲息する。政府は貴重毛皮獸の保護とタルバカン捕獲による蒙古人の所得を保障し、又一般鳥獸の狩獵を正確にするために狩獵法を制定し、

一九二五年以降は外國人は特許を受けざる限り狩獵をなす事を禁じられた。尙タルバカン毛皮の輸出高は、最近年に於ては一ヶ年三百萬枚に達し、價格は二百萬元以上である。仕向地は米國、英國、日本、ソヴエート聯邦及び中歐諸國である。

第五節　工業

工業は全く外國人によつて興つたもので、外蒙古の固有の工業は存在しなかつた。又十年以前頃までの工業は、漢人による製革、釀造等の手工業が行はれてゐたに過ぎなかつたが、一九二七—九年頃より政府は鑄造機械工業、煉瓦工業、酒類蒸餾工業、製革工業等を建設した。

煉瓦工業　一九二八年モンゴルストロイ會社によつて經營を開始し一九三〇年度には十七萬五千銀弗を生產し、一九三一年より三五年に亘る五ヶ年計畫に於て總生產高を四十萬銀弗に達せしめようとしてゐる。

機械鑄造工業　一九二九年工場を庫倫に設けた。一九三〇年の工場固定資本は三十七萬八千銀弗で同年の生產原價は二十五萬二千八百八十五銀弗に達したが、熟練工の不足のために操業は圓滑を缺いでゐる。五ヶ年計畫に於て尙二十萬銀弗を增資し、生產原價を九十五萬銀弗に達せしめんとしてゐる。

酒類蒸餾工業　庫倫と恰克圖の中間にある農業地帶ハラ河畔に一九三〇年に工場を落成したが、經營は一九二九年に開始せられた。一九二九年の工場資本金は六十七萬銀弗で、一九三〇年に八十三萬九千銀弗に增額し、同年十七萬八千六百三十ガロンの酒精を生產する豫定であつた。

製菓工業　一九三〇年に於ける工場固定資本は二十五萬五千銀弗であつたが、五ヶ年計畫に於て十萬銀弗を增資し、總生產原價を百萬銀弗に達せしめる豫定である。

外蒙古政府の一九三一—三五年に亘る五ヶ年計畫に於ける工業建設計畫によれば、主要工業は次の如く發展せしめ

られる豫定である。

外蒙古主要工業の發展計畫

工場名	一九三〇年度 固定資本（千銀弗）	一九三五年度 固定資本（千銀弗）
ナライハ炭礦	一一三	六〇八
製材工場	六五	八〇
煉瓦工場	二四四	二一五
鑄造機機工場	三七八	三七五
製革工場	二五五	二二五
酒類工場	八八	九〇
合計	一、一四三	一、五九三

（備考）一銀弗は外蒙古本位貨一ツゲリックに相當する。又一ツゲリックは純銀含有量一八グラムでメキシコ銀弗と同價である。

しかして、同計畫に於ては羊毛及び製革に關する一大綜合工場を建設することになつてゐるが、その大要を示せば左記の如くである。

羊毛及製革綜合工場建設計畫

工場名	資本金（千銀弗）	生產總高（千銀弗）	勞働者數
羅紗工場	八四八	三八〇	九〇
絨氈毛氈靴工場	三〇二	六八五	一三〇
蒸氣洗毛工場	九九五	二、三四六	一一〇
皮革工場	一、三二三	一、八七〇	二〇〇
製靴工場	一一六	一、一五〇	一七〇
羊皮シューズ工場	四九二	一四〇	
合計	三、九二〇	六、九二三	八四〇

（備考）尙この他に庫倫（クーロン）には一九二五年に建設せられた發電所があり、五百キロワットの發電力を有したが、一九三一年に第二發電所を增設した。

上記の如き外蒙古の工業建設は、交通運輸の便宜極めて尠き曠野に於ては至難事に屬し、且つ外蒙古住民の需要を滿たすには規模が大に過ぎるものがあることは注目を惹く。即ち、鑄造機械工業の如きはそれで、實際には庫倫（クーロン）及び各地の外蒙古赤軍及びソヴエート軍隊の造兵廠となつてゐるもの、如く、酒類蒸餾工業、羊毛製革工業及び煉瓦工業等も悉く外蒙古軍事と密接な關係を有すると見られるのである。

第六節　商業及び貿易

外蒙古の商業は、蒙古人によつては全く行はれずして、支那人及びロシア人が掌握してゐた。そして、支那人は清朝以降に於て商人獨自の力で自然的發展によつて外蒙古の全域に一大勢力を扶植し、ロシア人は政府の東方政策によつて終始一貫政府の掩護下に活躍したのであつた。然るに、外蒙古が共和制となつて以來、外蒙古に於ける支那商人は蒙古人の民族的反感及び共和政府の政策としての個人企業に對する壓迫のために、外蒙古から殆んど撤退した。

之れに代つて外蒙古政府は一九二一年外蒙古中央コオペラチーフ（外蒙古中央消費組合同盟、略稱モン・ツエン・コオプ）を設立して內外商業及び工業を營む國家的經濟機關とした。コオペラチーフは本店を庫倫（クーロン）に置き、ツアインシヤビ、烏里雅蘇台（ウリヤスタイ）、科布多（コブト）その他の全國主要地に支部、支店を設け、ノウオシビルスク、ウエルフネウヂンスク、モスコー、天津、張家口、海拉爾等國外に事務所を有し、廉價なる良貨を輸入し原料品を直接輸出し、國內に工業を

興して從來の外國資本家と戰ふて外蒙古國民經濟を向上せんとするもので、ソヴエート聯邦政府の計畫に係り終局に於て、外蒙古の外國勢力を驅逐してソヴエート聯邦の經濟的支配を確實にするものである。コオペラチーフが顯著な活動を開始したのは一九二三年頃からであるが、その國内に於ける私人商業との比較は左の如くである。

コオペラチーフと私人商業との比較（單位千ツゲリック）

年度	コーペラチーフ	私人商業
一九二七年	六一〇〇	二五五〇〇
一九二八年	一〇五〇〇	二二〇〇〇
一九二九年	九九〇〇	九一〇〇
一九三〇年	二〇四〇〇	一六〇〇

即ち、外蒙古の私人商業は一九二八年以降に於て急激に凋落し、コオペラチーフが壓倒的となり來つたのであるが、私人商業に對する極度の壓迫は支那商人の絶望的反抗を招來し、やがては國内の反革命、反ソ暴動勃發の機運を醸成したので、一九三二年頃より若干の自由が許され、逐次復活しつゝあるもの、如くである。

外蒙古の貿易に就いては一九二九年までは正確な數字がないが、コオペラチーフが勢力を得ると共にソヴエート聯邦との貿易が飛躍的に發展し、反對に對支貿易が凋落してゐる。即ち、その年次統計は左の如くである。

對外貿易總額（單位千ツゲリック）

年度	輸入	輸出	合計
一九二七年	三一六〇〇	二九七〇〇	六一三〇〇
一九二八年	三二五〇〇	三一七八〇	六四二八〇
一九二九年	一九〇〇〇	二七三〇〇	四六三〇〇
一九三〇年	二二〇〇〇	三三三〇〇	五四三〇〇

相手國別貿易額（單位千ツゲリック）

年度	ソ聯	支那
一九二七年	四〇〇〇	二七六〇〇
一九二八年	七一〇〇	二五四〇〇
一九二九年	八六〇〇	一〇四〇〇
一九三〇年	一七五〇〇	四五〇〇

ソヴエート聯邦の對蒙輸出は穀物及び石油を大宗とし、織物、砂糖、セメント、電氣器具、金屬及びその製品、食料品、煙草、化學藥品、砂糖及び菓子、生及び乾燥果實、蓄音器、フイルム、手工細工品、香水、石鹸、鷄卵、硝子及び陶器等にして、ソヴエート聯邦の對外貿易に於ては、品目の多種なることは外蒙古が第一であると謂はれる。しかして、ソヴエート聯邦が斯くの如く對蒙貿易を獨占して、外蒙古の經濟を支配するに至つた理由は、外蒙古の政變に介在して憲法及び經濟機關を自國の意の儘に作り、商業上の强敵たる支那人及びその背後の英米人等の個人企業を非合法的なものとして貿易に從事するを得ざらしめ、自國の貿易機關に對する敵手を一掃した政治的侵略に基くもので、斯かる政治、經濟兩面の侵略こそ、ソヴエート聯邦の弱小民族支配の原則的術策であると見られる。尚、最近の外蒙古經濟狀態に就いて、ソ聯の重壓に堪へ兼ねて滿洲里に逃亡し來つた庫倫消費組合書記某は左の如く語つた。

「一九三三年に於ける外蒙古の經濟狀態は窮乏のドン底にあつたが、三四年に至つて漸く緩和せられて來た。以前は商取引は消費組合の手によつてのみ行はれて來たが、支那商人の不滿が暴動勃發の機運を醸成したので私人商業の取締りは稍々緩和せられ、現在では個人の自由商業が行はれて居り、市場はソ聯製品で埋つてゐる。之れ等ソ聯の商品は一九三三年末に庫倫に設立せられたソヴエート・モンゴル貿易商會の手に依つて各地に配給せられる。ソヴエート聯邦の商品は全商品の八〇%を占め、殘りの二〇%が支那商品である」。

第五章　外蒙古の都市と交通

第一節　都　市

外蒙古ソヴエート共和國が市政を施行してゐる都市は首都庫倫（クーロン）（ウランバートル・ホタ）のみであるが、その他にも幾つかの都市がある。

庫倫　ロシア人はこれを「ウルガ」と呼び、一九二四年十一月に共和政府によつて「ウラバートル・ホタ」（赤色英雄の都の意）と改稱せられ、外蒙古赤化の根源地として名實を兼ね具へた。ドラ河とセリバ河の合流點に位し、活佛哲布尊丹巴（ギョブツンタンバ）の所在寺が建立せられて發達した宗教都市である。人口は一九二六年の初め五萬人（蒙古人三萬一千—喇嘛一萬二千、女一萬—漢人一萬五千、露人三千、ブリヤート人七百、西藏人三百）と算せられ、その後大いに增加してゐるものと見られる。又最近年は外蒙古に於ける軍事上の中心地として裝備せられつゝある。

烏里雅蘇台（ウリヤスタイ）　共和政府によつて「ジブハランツ」と改稱せられた。一七三三年に清朝が此處に築城して軍鎖として以來、庫倫の宗教中心地たるに對して政治中心地となつた。外蒙古獨立以來庫倫が首都となつたので衰微し、一九一九年頃の人口は三千人と謂はれた。現在サイト驅軍司令部、蒙古銀行支店、コオペラチーフ支部、ソ聯領事館等があり、又烏梁海（ウリヤンハイ）、新疆、アルタイ地方と連絡し西蒙古の商業上の要地である。

科布多（コブト）　科布多區の中心地にして、現在コブト、サイト部、コブト軍管區司令部及び蒙古銀行支店、コオペラチーフ經濟部、ソ聯領事館、ロシア小學校等がある。

賣買城　アルタンブラックと改稱せられた。北部國境にあり古來より露蒙貿易が盛んである。現在ソ聯領事館、蒙古銀行支店、コオペラチーフ支店、製革工場、蒙・蘇經濟機關の各支店があり、庫倫—ウエルフネウヂンスク間航空路の中繼地となつてゐる。

桑貝子（サンベーズ）　滿洲國境に近く、ケルレン河岸にあり、東部外蒙古の中心地である。最近年は東部國境に對するソヴエート聯邦の軍事的根據地となつてゐるものの如く重視せられてゐる。附近よりは多量のタルバカン毛皮を産し、蒙古銀行支店、コオペラチーフ出張所があり庫倫より來る道路は海拉爾（ハイラル）、滿洲里及びソヴエート聯邦領ザバイカル鐵道ボルジヤ驛に向ふて分岐する。

第二節　交　通

外蒙古の道路は庫倫（クーロン）を中心として各方面に通じてゐる。その主要なるものは次の如くであらう。

一、庫倫—張家口。庫倫—平地泉。庫倫—歸化城。庫倫—五原。以上何れも南方內蒙古に向ふもので各々一千二百粁
二、庫倫—恰克圖間　三百二十粁
三、庫倫—滿洲里間　九百粁
四、庫倫—烏里雅蘇台間　一千粁
五、烏里雅蘇台—古城（新疆）間　八百粁
六、烏里雅蘇台—科布多間　四百粁
七、科布多—セミパラチンスク（ソ聯領）間一千粁

鐵道は一九二四年に締結せられた蘇・蒙條約（恰克圖—庫倫—滂江鐵道條約）によつて外蒙古政府がソヴエート聯邦政府より一億元の借款を得て建設することゝなり、庫倫—恰克圖—ウエルフネウヂンスク間を始めとして、左記の計畫が進行中と傳へられる。

一、蘇領ミヌシンスク—ヒメンベチル間
二、蘇領ビイスク—科布多間
三、ヒメンベチル—烏里雅蘇台間
四、科布多—烏里雅蘇台間
五、チタ又はダウリヤ—庫倫間

六、庫倫—桑貝子間

しかして、ソヴエート聯邦政府は庫倫—張家口間の鐵道建設に就いては、それが北支赤化工作即ちコミンテルン・ルート中路に當るを以つて最も重大なる意義を附し、屢々支那政府と折衝しつゝあり、その經過は常に世界の注目を惹いてゐる。

自動車は張家口—庫倫間の定期路線（所要日數三—四日）。庫倫—賣買城間、庫倫—桑貝子間等に運轉せられ、現在各都市間に自動車道路を建設しつゝあるのでその將來は多忙であろう。

從來の交通及び運輸は牛馬車、駱駝によつて行はれ、その不便と困難は甚だしかつたのであるが、沙漠の秘境外蒙古にも、斯くて近代的交通運輸の利便が齎されつゝある。しかし、ソヴエート聯邦政府による外蒙古の交通運輸の建設は、東亞赤化の政策的意義及び日滿兩國に對する軍事的意義を有することを見逃すことは出來ないであろう。特に支那共產軍に對する兵器、資金及び被服の供給が、外蒙古の交通運輸機關を利用して行はれることは、自動車交通の發達と共に大いに注目せられる。

通信は近年電信電話、無電が相當に整備して國外との連絡が自由になり、庫倫—ウエルウネウヂンスク間には郵便飛行の便もある。その他普通郵便も行はれるが、國外に對してはシベリアを經由することゝなつて居り、且つ檢閱は頗る嚴重である。

第六章　外蒙古の政治的地位

外蒙古ソヴエート共和國は、今や政治的、經濟的將又思想的に、ソヴエート聯邦の純然たる屬領化したかの觀がある。しかしそれは、外蒙古の全住民が悉くソヴエート聯邦の赤化政策を謳歌してゐることの意味ではない。即ち、外蒙古の住民の大部分は、今日尙原始的な游牧生活を營み、その智識、思想の水準は著しく低位にあり、從つて未開民族に共通的に見るが如く保守的であるから、一躍して高度の共產政治を受けることはその悉くが傳統に背き、舊習に反する結果となり、そこに著しき束縛感を生じ、共和政府成立以來、その束縛感に堪へ得ずして國外に逃亡した者は全住民の一〇%に達すると推測せられ、國內に於ては反蘇・反革命の暴動が不斷に繰返されてゐるのである。

又、外蒙古ソヴエート共和國は、獨立國家と稱しつゝも、血緣的に最も重大なる關係を有する隣邦滿洲帝國及び內蒙古に對して嚴重に國境を閉鎖し「世界に例なき秘密境として內部に何事の行はれてゐるや不明なる暗黑世界」として滿洲國成立以來滿洲國境方面に急速に軍備を充實して「時々その暗黑裡より魔手を伸ばして日滿人を拉去若くは射擊するが如き不氣味なる事態」を發生せしめつゝある。

茲に於て滿洲帝國政府は、一九三五年一月に興安北省ハルハ廟附近に於て發生した外蒙古兵の不法行爲を端緒として、滿蒙兩國の根本的親善關係設定の提議を爲した。之れ所謂滿蒙滿洲里會商にして、外蒙古ソヴエート共和國が建國以來始めてソヴエート聯邦以外の國家と具體的國際交涉を開いたのであるが、外蒙古政府の裏面にソヴエート聯邦政府が介在して、終始之れを操縱してゐることは勿論である。

しかして、ソヴエート聯邦政府が斯くの如く强固に外蒙古を支配する理由は、外蒙古がソヴエート聯邦の原料供給源及び自國製品の販賣市場であると謂ふ經濟的諸問題より以上に、外蒙古より內蒙古を經て北支那に至る所謂コミンテルン・ルート中路の根據地としての政策的意義に一層の重要性を附してゐるものである。從つて、赤化外蒙古の政治的地位は、ソヴエート聯邦が國是とする世界赤色革命政策の一據點たるところに存すると謂はねばならない。故に

亦、ソヴエート聯邦が外蒙古を支配し、強化する限り、外蒙古は東亞の平和と幸福を脅威する爆彈的存在である。支那邊境研究の權威者オーエン・ラテイモアは、日滿・蘇の對立關係下の外蒙古の地位に就いて次の如く述べてゐる。

「ロシアと日本との間に戰端が開かれた場合に於けるシベリア、滿洲國間國境の戰略的價値は、當然兩國民に熟知されてゐる。鐵道哩數も知られて居れば、又兩國が動員し得べき兵力も、その行動を開始せしむるに要する時間も、大なる誤差なく計算することが出來る。ロシアがウラヂオストックの根據地から、大阪や東京を空襲することあるべき可能性を日本が考慮の內に加へ、かゝる攻擊の效果を減殺せんが爲めに何等かの方策に出づることも明白である。他方、日本がウラヂオストック及び沿海州を占領すれば、ロジアを屠り得るであろうと考へることは皮相である。事實、國境に於ける敗戰は兩國にとつて單なる後退にすぎず、兩者の基礎的關係を根本的に變化するものではない。つまりこれ一九〇四―五年の日露戰爭が決定的な結果に終らなかつた所以であつて、結局同戰爭は第一回戰たるにすぎなかつたのである。

兩國が全面的な、決定的な行動に出で得る唯一の地域は、シベリアの外蒙方面及び滿洲國の內蒙方面である。ウラヂオストック並にウスリー、黑龍江國境の作戰は局部的且つ戰術的であるが、蒙古の問題こそ戰略的考慮の餘地を殘すものである。地域は廣大であり、シベリア橫斷鐵道は之れに沿つて走り、滿洲の諸鐵道は何れも行く手に此の地域を目指し、且つ行動の範圍數百哩に達する。此の故にこそ蒙古は、支那、シベリア若くは滿洲國に比し、一般に如らるゝ處が少いにも拘らず、全極東の運命の關鍵となつてゐるのである」。

第三編　新　疆

第一章　新疆の自然と人文

第一節　地域・地勢・面積・氣候

新疆は支那の西北に位し、東經七〇度より九二度、北緯三二度より四八度に亘り、東は外蒙自治共和國及び支那甘肅、青海、西はソヴエート聯邦カザクスタン自治共和國、南は西藏及び印度カシミール地方、北はソヴエート聯邦西部シベリア地方に接する。その總面積に就いては種々の異說があるが、普通には一九〇二年の前淸政府發表に從つて五十五萬五百七十九平方哩と稱せられ、實に支那本土の三分の一弱、日本全土の約二倍に達する廣大なる地域を占める。

新疆は、その西境パミール高原より東走して東境ゴビ沙漠に終る天山々脈によつて南北に二分せられ、北部を天山北路、南部を天山南路と稱する。天山北路は東に阿爾泰山脈、西に塔爾巴哈台山脈、南に天山々脈を繞らして一大盆地を成してゐるが、概ね海拔一千メートル以上の高臺で、隨所に小盆地、沙漠、沼澤、草原が散在する複雜地帶である。大なる河川には烏倫古河、庫伊爾齊斯河、伊犂河、設爾達河等があり、何れも西又は北に流れて蘇聯邦領に入る。

天山南路は西に葱嶺山脈、南に昆倫山脈及びカラコロム山脈、北に天山々脈が連亘して、中央に廣漠たる塔里木盆地を抱擁する。塔里木盆地の大部分の面積は、ゴビ沙漠に續くタクラマカン沙漠に占められ、西部地方は海拔一千メートル以上の高臺であるが、地勢が東方に向つて傾斜してゐるので、天山北路とは全く反對に喀什噶爾河、和闐河、葉爾羌

河、阿克蘇河等の諸河は何れも東南に流れ、沙漠地帶を通つて蒸發若くは土中に滲透して消失しつゝ東部の羅布淖湖（ロプノール）に注ぐ。

羅布淖湖はタクラマカン沙漠とハシュン・ゴビ沙漠の間にあるが、常にその位置が變化するのみならず、或る時は鹹水となり亦或る時は淡水となる神秘不可思議の湖として知られ、天山々脈東南麓の吐魯蕃（トルファン）窪地は附近一帶の高地から海面下千五百メートルの深さに陷沒してゐるので、アジア大陸の臍と呼ばれてゐる。

氣候は大陸性で、夏季は沙漠に熱風を生じ、冬季は諸山脈の雪風が吹きすさぶ。雨雪に乏しいので空氣は著しく乾燥するが、西南部の喀什噶爾（カシガル）地方に於ては一月の平均溫度零下五・八度、七月の平均溫度二七・五度であるから、蒙古及び北滿地方に比すれば頗る溫和であると謂へる。

第二節　住民及び人口

新疆に棲住する住民は、之れを民族學的に分類すれば驚くべき多種に亘るであろうが、大別してツラン系（又はウラル・アルタイ系）のトルコ族、蒙古族、滿洲族及びコンロン系の漢族の四種とせられる。人口に就いては面積と同じく種々の異說があり、最少と最多の差は實に二百萬人に達するが、普通には民國二十一年の民政部發表に從つて次の如く見られてゐる。

民族別に見た新疆省の人口

トルコ族	一、九五〇、〇〇〇人
漢　族	四〇〇、〇〇〇人
蒙古族	一三〇、〇〇〇人
滿洲族	三〇、〇〇〇人
計	二、五六〇、〇〇〇人

最多數の人口を有するトルコ族はキルギス族、東干（ドンガン）族、サルト族、タランチ族、タタール族に分れ、各々言語、傳統、慣習を異にするが、その居住する地域及び政治的關係に基いて纏頭回、東干、布魯特（ブルト）、哈薩克（カザック）に分ち、その各々の人口は纏頭回一、二五〇、〇〇〇人、東干族四〇〇、〇〇〇人、哈薩克及び布魯特三〇〇、〇〇〇人とされてゐる。

纏頭回は新疆全人口の約半數を占め、頸部にターバンを捲くので此の名がある。多くは天山南路に居住して農、商工業に從事し、トルコ語を用ひ、支那語を解する者は極めて尠い。纏頭回は新疆に於ける回教徒の中では文化の程度が最も高い。

東干人は言語、風俗等を漢人に做つてゐるので別名を漢回と呼ぶ。主として天山北路に住んで農業を營む。都市に住む者は小商工業に從事し、又隊商の宿場經營者として各隊商路に沿ふて散在する。從來、漢人の壓迫と搾取に反抗して屢々流血の慘事を惹起したので、獰猛にして好戰的な民族として恐れられてゐる。

布魯特族及び哈薩克族は主として天山北路の山間地帶に住み、布魯特族は狩獵、哈薩克族は牧畜及び狩獵に從事してゐる。

蒙古族は所謂西蒙古部族に屬する額魯特（エルート）族及び烏梁海（ウリヤンハイ）族の外に喀爾喀（ハルハ）族も交り、清朝時代に軍人として駐屯せしめられて土着した者の子孫が多い。主として天山北路の阿爾泰（アルタイ）山脈地方に住み、原始的な游牧生活を營み、概ね低い文化、經濟段階にある。

滿洲族も清朝時代に軍人として駐屯せしめられた者の子孫で、一部は官吏となつてゐるが、多くは游牧と狩獵の生

活を營んでゐる。滿洲族がその故地滿洲に於ては疾くに漢化して固有の族語を失ひ、民族の存在すらも顯著でない今日、新疆の滿洲族は尙往昔の姿を保持してゐるのである。

漢族は比較的近年に至つて新疆省に移住したのであるが、出身地及び職業別にすれば、概ね甘肅、陝西人は軍人、湖南、湖北人は官吏、河北、山西人には商人が多く、一部分は天山南路に於て農業を營んでゐる。

右の外に、新疆にはロシア革命後流入したロシア人の一群があり、相當な勢力を示してゐる。これは敗軍の白系露將アンネンコフの新疆遁入に從つて避難し來つたものである。

しかして、日本人、朝鮮人と同じ地に發祥して共同の祖先より享けた同じ體質上の遺傳を保ち、共通の民族性と同系の言語を有するツラン系のトルコ族、蒙古族及び滿洲族は新疆全人口の約八割を占めてゐるので、民族的には新疆は日本にとつても重大なる關係を有すると謂はねばならぬ。

第三節　言語及び宗教

新疆に棲住する諸民族は、概ね固有の族語を有する。從つて、新疆に於て用ひられる言語は、その民族が複雜多種であとる等しく複雜である。

トルコ族の中でトルコ語を解せぬ民族は少いが、しかも、キルギス族は蒙古語と甚だ多く共通するキルギス語を用ひ、サルト族はサルト語を、タランチ族はサルト語とキルギス語を混淆したタランチ語を有し、タタール族は亦獨特のタタール語を用ひる。

蒙古族は蒙古語、滿洲族は滿洲語、漢族は支那語を語り、之れにロシア語及び西藏語、アラビヤ語が錯綜してゐるので、その煩雜なることは想像に難くないであろう。故に喀什噶爾（カシガル）の官廳には、九種の言語に通ずる通譯が居ると謂はれる。

しかし、最も普通に用ひられる言語はトルコ語、支那語及びロシア語の三種で、就中、トルコ語は最も廣汎に用ひられ、官廳の佈告の如きはトルコ語と支那語とが併用せられてゐる。新疆に於て使用するトルコ語はオスマン・トルコ語の系統に屬し、文字はアラビックである。ロシア語は、近年ロシア人の居住者が增加したことゝ、新疆の經濟がロシアに依倚することゝによつて、トルコ語に次いで廣汎に用ひられるに至つた。又最近では各民族の青少年にして蘇聯邦の教育を受くる者が激增しつゝある傾向よりして、今後ロシア語は新疆の普通語になるであろうと見られてゐる狀態である。

新疆に於ける宗教はイスラム教（即ち回教）、喇嘛教、佛教が主で、就中、イスラム教は全トルコ族によつて熱烈に信奉せられてゐるので絶對的に優勢である。イスラム教は唐代に早くも新疆に傳はり廣く信仰せられた。元代には蒙古の將領にして之れに歸依する者多く、トルキスタン察哈台汗國（チャガタイハン）のタリク汗は最も熱烈にイスラム教の布教を支持した。イスラム教はそれが新疆に傳へられた當初に回紇（ホイヂ）族（當時西域に居住したトルコ族を漢人は回紇族と稱した）が多く信仰したので、爾來之れを回教と稱するのであるが、回教徒は世界何れの地に於ても特殊の團結と宗教的熱情を有するので、新疆に於ても回教徒が演じた役割りは頗る重大であつたと謂へる。又、蒙古人は彼等の故地に於けると同じく喇嘛教を狂信し、漢人も亦支那內地の宗教を各々信奉してゐる。

しかして新疆に於ては常にあわたゞしい種族的鬪爭が行はれて、血緣的な融合が果されなかつた爲めか、今日尙新疆の諸民族は、概ね獨自の民族社會を形成して居り、强烈なる保守性を有する。

第二章 新疆略史

第一節 清朝以前

現今の新疆の地は古代には西戎或ひは西域と稱し、天山南路には塞種、天山北路には東部に匈奴、西部に烏孫がゐたが、西紀前一五〇年頃、東方の初連（天山）と郭煌（甘肅）の間にゐたトルコ族の月氏が塞種を追ふて天山南路を奪ひ、更に月氏は烏孫に破られて西方に走り、西紀前一二八年に大夏を滅してアフガニスタンの地に大月氏國を建設した。その後、天山南路には、于闐、沙車、焉耆、踈勒、樓蘭、鄯善、龜玆等のトルコ族の小國が分立して所謂西域三十六國を成し、北方の匈奴が勢力を得て之れを支配し、又屢々匈奴は東方に武威を張つて漢の邊域を脅威した。

漢の武帝は、西紀前一二〇年頃に西域諸國を降して朝貢せしめたが、西域の地が東洋史上に現はれたのは、この頃を以つて始めとするのである。次いで、漢の宣帝は烏孫を援けて匈奴を追ひ、西域全土を漢に歸屬せしめて始めて烏壘城に都護を置いてこの地を治めた。之れ實に西紀前六〇年のことにして、支那が西域に支配權を設定した最初のものであつた。

然るに、西紀八年孺子嬰の時に王莽が叛いて漢を簒すに及んで漢は國内多端となり、邊疆を省るの遑が無かつたので、西域諸國は漸次に漢より分離して再び匈奴に從つた。爾後、烏孫及び鮮卑、悅般、高車等が交々威を振るひ、後周の代には突厥、鐵勒、高昌等が相次いで此の地に割據し、唐代には回紇が興隆して唐と同盟し突厥を逐ふたが、唐の太宗は西紀六四〇年に高昌、伊吾、庭州、龜玆等の諸國を從へて天山南北西路を統一し、北庭（迪化）及び焉耆に都護府を設けて勢威を振るつた。

唐の滅亡後、西域は太食の侵略を受けて二十餘年に亘つて宗教戰が續いたが、遂ひに回教徒の勝利に歸して回紇族が天山南路に國を建てた。回紇は後ちに邆の耶律大石に討たれて西遼の一部となつたが、西遼は建國後八〇餘年にして倒れ、西域は復亦諸民族の闘爭に明け暮れた。そして、一度は吐蕃に服したが、西紀一二一八年に折柄隆々たる武威を振るつて四隣を征服しつゝあつた蒙古族の元の太祖（成吉思汗）に平定せられた。太祖の第二子察哈台はトルキスタンに封ぜられて察哈台汗國を建て、久しく西域をも併せ治めたが帖木兒に亡ぼされ、帖木兒の沒後は成吉思汗の後裔サルタン・サイドが起つて西域を支配し、間もなくサイドは回教徒の暴民に殺された。

元朝はその後、西蒙古族の中の準噶爾部を伊犁に、杜爾伯特部をイルヂスに、杜爾扈特部を塔爾巴哈台に、和碩特部を烏魯木齊に配備して四衞拉徒と稱し、その部族は廣く天山北西の地域から青海に亘つて游牧した。明末に至つて四衞拉徒は内訌を生じて離散し、和碩特部は青海に移り、準噶爾部は伊犁附近に勢を得て遂ひに和碩特部を滅し、他部を併呑し、西藏を降し、天山南北兩路を統一して頗る強大となり、外蒙古喀爾喀族に迫つた時、明を滅して支那本部に君臨した清の康熙帝の遠征に遭ふて討たれ、族長噶爾丹は毒を仰いで死んだ。

第二節 清朝時代

西紀一七六〇年に、清の高宗は天山南北兩路を平定して清の版圖に收め、一七八五年に明瑞を伊犁將軍に任じて西域を統べしめた。

斯くて、西域は、清の領有後は暫くは平穩であつたが、一八二六年に至るや、先きに清に抗して討たれた布羅尼特の

子張格爾が叛いて兵を起し、喀什噶爾を陷れ、阿克蘇に迫つた時に清兵に討たれた。しかし、張格爾の亂と共に西域の情勢は漸く騷然たるものあり、次いで太平天國の亂が起ると共に西域の回教徒は各地に蜂起し、就中、天山南路の東干人は漢人に對する憤ゆるが如き憎惡に馳られて伊犁の七城を屠り、將軍以下八萬の兵員及び官吏を悉く虐殺したと謂はれる。

然るに、當時帝政ロシア政府は既に中央アジアの小國を併呑して西域と境を接し、この地に侵略の魔手を延べようとしてゐたので、東干人の叛亂に乘じて邊境防備の名目によつて伊犁を占領した。他方、天山南路ではトルコ族の各部族が相抗爭して混亂を極め、喀什噶爾の布蘇爾格斉汗の參謀にして僧侶の子たるヤクブ・ベクは兵を集めて布蘇爾格斉汗を逐ひ、四隣の回教徒を平定して遂ひに天山南路を統一し、西紀一八六七年、畢調勒特汗と號して喀什噶爾の王位に即き、阿克蘇に都を定めてインド及びトルコに使節を派して獨立國たることの承認を求めると共に、インドより武器を購入して軍備を整へた。又當時既に西域の形勢に注目してゐたイギリス及びロシアは、ヤクブ・ベクの許に使節を派遣して修好關係の樹立を企てた。しかし、ヤクブ・ベクは清朝が太平天國の亂を鎭定した左宗棠を派して討伐せしめたゝめに跪くも破れ、自ら服毒して果てたので建國後間も無い畢調勒特汗國は崩壞し、天山南路は再び清朝に服したのであつた。

茲に於て清政府は、ロシア政府に對して伊犁占領中のロシア軍隊の撤退を要求したが、ロシア側は清政府代表たる崇厚を威嚇して、(一)伊犁河南部の豐穰なる地方の割讓、(二)通商上の大なる特權の許與、(三)五百萬金ルーブルの賠償金提供等、著しく清政府に不利な條約に假調印せしめたので、清朝政府は該條約の批准を拒否し、曾紀澤を露都に派して再交涉せしめた結果、一八八一年二月に所謂ペテルブルグ條約が成立し、清國はロシアに對して霍爾果斯河以西の地

を割讓し、九百萬金ルーブルの賠償金を支拂ひ、且つ天山南北兩路に於ける無稅貿易の特權を承認した。斯くてロシアは伊犁占領後十年にして漸く撤兵し、伊犁事件は全く解決したのであるが、之れと共にロシア商人の西域進出は著しくなつた。

しかして、清朝は伊犁事件の解決と共に、ヤクブ・ベクを討伐した左宗棠の建言を容れて一八八二年に天山南北兩路を合して省制を布き、この地域を「新たなる植民地として開拓する」との意を以つて「新疆」と名付け、廸化に省城を設けて巡撫使を駐在せしめ、陝甘總督の隷下に屬せしめた。初代の巡撫使は劉錦棠であつたが、一八九三年に中央政府直轄の省として陝甘總督の隷下から分離した。

第三節　新疆の獨立

一九一一年に支那武漢に革命が勃發して清朝政權が崩壞するや、新疆も亦その影響をうけて各所に暴動が起つた。就中、伊犁に蜂起した廸慶福は新疆の獨立を宣言して自ら都督と稱し、兵を廸化に進めたが、時の鎭廸道兼提法使楊增新のために一擊のもとに討滅せられた。

楊增新はその功に依つて同年新疆都督に任ぜられたが、爾後、楊は支那本部の政爭には全く關與することなく、新疆を事實上獨立せしめて一切の內治、外交を獨裁した。即ち、一九二〇年には支那政府と計るところなくしてタシケント・ソヴエートとの間に伊犁暫定通商條約を締結し、その翌年にはソヴエート聯邦政府と地方的通商條約を締結して領事を交換した。そして、內軍の武裝を解除し、更に一九二四年にソヴエート聯邦政府と地方的通商條約を締結して領事を交換した。そして、內政的には都督署副官長夏鼎を斬つてその陰謀を挫き、巧みに回教徒を懷柔して治安を維持する等頗る治績を擧げたの

で、彼の新疆省政府主席としての獨裁は十八年の久しきに亘つた。

しかして、さきに伊犂を占領して新疆經略の野望を露出したロシアは、一九一七年の革命に依つて帝政崩壊してソヴエート聯邦が出現したけれ共、新疆に對する侵略的政策はいさゝかも革命に依つて變化するものではなかつた。そこで楊はソヴエート聯邦の野望を看破して巧みにその侵略政策を拒否し續けたので、遂ひにソヴエート聯邦政府の謀略に罹つて一命を斷つた。即ちソヴエート聯邦政府は豫ねて省政府主席の地位を覗つてゐた民政廳長金樹仁を使嗾し、一九二七年七月に省政府外交部員樊耀南をして宴席に於て楊を暗殺せしめたのである。

然るに、金樹仁は又、復讐の名目の下に樊を暗殺して自ら省政府首席となり、楊に做つて新疆の獨立を維持したが、この頃から新疆は支那に對するよりも寧ろソヴエート聯邦に對して親善關係を强固にせざるを得なかつた。一九二九年、ソヴエート聯邦の外交代表が北平を引揚げた時にも、新疆とソヴエート聯邦との關係には何等の變化をも示さず、セミパラチンスク駐在の新疆領事は、同地のソヴエート大會に於て「蘇・新間の關係は北平に於ける蘇支兩國の紛爭によつて何等の影響をうけるものに非ず。新疆の對蘇態度は依然親善的にして友誼的なり」と述べて居り、一九三一年には又新たに蘇・新間の通商條約を締結してゐるのである。しかし、金樹仁の愚民政策を基調とする對回教徒政策は全く破綻し、回教徒の間には漸く不穩の空氣が充滿するに至つた。

第四節　回教徒の蜂起と政變

新疆の人口は、その八割を回教徒によつて占められてゐるのであるが、支那がこの地に支配權を設定した理由は、一つに支那本部に對する西北よりの脅威を防止することに存し、その政策は、傳統的に回教徒を壓迫し搾取して反抗するを得ないまでに疲弊せしめんとする徹底的な愚民政策であつたと見られる。

しかして、漢民族のかゝる對回教愚民政策と漢尊回卑觀念は、革命を成就した國民黨が「黨の持するところの民族主義は消極的には民族間の不平等を除去する」にあるとしたにも拘らず（民國十二年一月一日發表國民黨宣言）實際には（蒙古に對しても同樣であるが）いさゝかも修正せられはしなかつたのである。しかも、回教は異教徒との交際をも禁ずるまでに排他的な宗教であるから、新疆に於ける回教徒は漢人を外道として厭忌し、壓迫と搾取を加へる支那政府を仇敵視したのは當然の歸趨であると謂はねばならぬ。彼の張格爾（チャンゴル）、ヤクブ・ベクの大亂、東干人の暴動及び玉素普や七和卓、倭里罕等の叛逆等々不斷の流血は、漢人及び支那政權が設定せられて以後の新疆の歷史は、實に漢回兩族の爭鬪の歷史であると謂ふも過言ではない。

茲に於て、新疆の回教徒の間には、夙に青海及び甘肅に散在する回教徒と呼應して、之れ等の地に回教獨立國を建設せんとする意圖を有する者が尠くなかつたのである。楊增新は斯る回教徒を巧妙に懷柔して、彼の在任中は回教徒の反抗は殆んど見られなかつたが、楊の地位を奪つた金樹仁は遂ひに回教徒の信賴を得るに至らず、一九三一年二月に至るや、天山南路の東干人は青海省主席馬步英の弟馬仲英の援助をうけて「漢人を殺せ」と叫んで政治的暴動を起したのである。この東干人の暴動は頗る慘忍を極め、實狀を視察した南京政府軍事委員會特派員は「屠殺一空に歸し、各村落は荒凉として死屍野に遍く、慘酷不仁の狀言語に絶す。新疆全省の人民は一人として妻子を拋棄し戈を持ちて戰はざるは無かりき……屠殺三日、その刀下に死する者四千餘、婦女子は山中に逃れ飢餓と寒氣に死する者亦二千」と報告してゐる。

次いで一九三四年にはサビト・ドモラを首領とする纏頭回族が、喀什噶爾（カシガル）に東トルキスタン王國を樹立して漢人の

みならず他の在教徒とも「容赦なく相殺害」したが、王國は間もなく崩壊した。

金樹仁は、東干人の叛亂に驚いてソヴエート聯邦政府に救援を乞ひ、その代償として新たなる通商條約に調印を餘儀なくせしめられ、相次ぐ回教徒の暴動のために一九三四年四月遂ひに失脚したので、臨時省政府が組織せられて臨時主席に劉文龍、臨時邊防督辦には盛世才が任命せられた。そして、新政府は

一、民族の平等
二、自由の認容
三、交通及び經濟の開發
四、外交の中央隷屬
五、財政の中央歸屬

等々十大政綱を發表して、多年の新疆獨立を解消しやうとした。然るに、臨時省政府は間もなく内訌を生じて、同年六月末には劉文龍、盛世才はクーデターを敢行して政府内部の南京派勢力を押へ、盛世才が事實上新疆の軍政の權を掌握して第三代の獨裁王となつた。

斯くて、新疆は依然として支那より獨立の型態を保つて今日に及んでゐるが、ソヴエート聯邦の新疆赤化政策は最近年に於て益々進展し、今や新疆の共和制實現説すら傳へられるに至つたのである。

第三章　新疆の都市と交通

第一節　都　市

新疆はその地域廣大なるに比して豐沃なる平原は比較的少く、主要産業たる農業もいまだ全域に亘つては行はれず、住民は多く山脈の溪谷又は沙漠のオアシスに居を營み、都市的な人口密集地域は間斷なき種族的戰爭によつて、屢々兵火の裡に潰滅せしめられながら僅かに復興し來つた。現今の行政區劃は廸化を省城として五十八縣七設治局に分れ、その主要なる縣及び都市は左の如くである。

○主要なる縣名

廸化（ウルムチ）、奇台（チタイ）、伊寧（イニン）、阿克蘇（アクス）、庫車（クーチヤ）、焉耆（ヤンヤ）、疏附（スフ）、疏勒（スル）、莎車（シヤチヤ）、和闐（ホータン）、于闐（ウータン）、葉城（ヤチョン）

○主要なる都市

廸化……人口約七萬一千人、新疆省政府を始めとし、督辦署、外交部特派員公署、高等法院、蘇聯邦總領事館、同通商代表部、郵務管理局、同附屬電政傳習所並に無電學校、歐亞航空公司辦事處、長途汽車公司、電燈公司、省立銀行、俄文法政專門學校、男女中學校、軍官學校、航空學校等があり、新疆唯一の新聞たる天山日報（漢文）も此處より發行してゐる。

奇台……人口一萬餘人であるが支那本部との商取引の要衝にして、綏遠省の歸化城及び包頭との間に隊商の往來が盛んである。

伊寧……人口約五萬人にして蘇聯邦との通商が盛んに行はれ、蘇聯邦領事館が置かれてゐる。

塔城……人口約二萬人、蘇聯邦との交通の要衝にして蘇聯邦領事館がある。

喀什噶爾……人口は漢城（漢人居住地）約一萬、回城（回教徒居住地）約五萬人にして、新疆隨一の商業地である。印度及び中央アジアとの交通、通商の要衝に當り、英國及び蘇聯邦の總領事館がある。

葉爾羌……漢城及び回城を合して人口約六萬人。印度貿易の中心地にしてアンヂジヤン、カシミールより來る商人が多い。

阿克蘇……人口約六萬人。畜産品市場にしてロシア人、印度人の商人が多い。

庫車……人口約一萬人にして天山南路の要站である。風光明眉、果實、畜産品の集散地である。

第二節　交　通

新疆は古代に於ては東西交通の要衝であつた。即ち、漢の張騫が武帝の命を奉じて大月氏國(アフガニスタン)に至り、西域の事情を究めて西紀前一二六年に歸來してより、東西の交通はこの地を經て始めて拓けたのであつた。又、匈奴が中央アジアを攻め、元がヨーロッパに遠征したのも悉く西域を通じて兵を出し、イタリー人の大旅行家マルコポーロは天山南路を經て西紀一二七五年に東洋に達したものであつた。

然るに、不斷の種族的戰爭と、重疊する山岳及び無人の大沙漠は旅行者に甚だしき苦痛を感ぜしめたがために、海洋に依る交通が急速に拓けるに從つて、東西交通上に於ける新疆の地位は全く失はれるに至つた。現在、新疆より東方に對する交通及び運輸は主として馬、馬車及び駱駝によるキャラバンであるが、その通路及び里程、所要日數は大略左の如くである。

一、甘肅省蘭州より玉門、西安を經て哈密に至り七角井にて二路に分れ、一は北行して鎭西、奇台を經、他は南行して鄯善、吐魯番を經て廸化に至る通路。蘭州—哈密間二千九百十五支里。車行三十餘日を要す。

二、綏遠省歸化城より蒙古を經て奇台、廸化に至る通路。歸化城—奇台間約五千九十支里。車行約三ヶ月を要す。

三、甘肅省郭煌より陽關、婼羌を經て干闐、和闐に至る通路。郭煌—婼羌間約二千支里。車行約三十餘日を要す。

一九三四年に綏遠省歸化城より蒙古を經て廸化に到る自動車路が開通して、東方に對する旅程は著しく短縮せられた。その全線は約二千八百六十三キロで所要日數十二日である。しかし、東方との交通及び運輸の便はいまだ著しく不利且つ困難であるとしなければならぬ。之に反し、西方即ち蘇聯邦領に對しては近年著しく交通、運輸機關が完備しつゝある、即ち蘇聯邦のトルクシブ鐵道は新疆の西境に沿ふて敷設せられ

一、セルギオポーリスカヤ驛及びセミパラチンスク驛より塔城、廸化に至る道路。

二、アルマアタより霍爾格斯を經て伊犁に至る道路。

三、アンヂジヤンよりイルケシタムを經て喀什噶爾に至る道路。

等を拓いて何れも自動車を通じ、セミパラチンスクよりは夏期にはイルトウイシュ河を利してサイザン湖に汽船による定期航路があり、サイザン湖—塔城間は自動車を以つて連絡してゐる。故に、歸化城—廸化間の自動車が開通する以前に於ては、北平より蘭州又は歸化城を經て廸化に至るには優に數ケ月を要したに反し、北平より滿洲を經てシベリヤ鐵道、トルクシブ鐵道を利して廸化に行けば僅々十數日を要するのみであつたのである。印度、アフガニスタンとの交通は古代より拓けてゐたが、その通路は何れも山岳を越ゆるもので、利便とは謂ふを得ない。

しかして、斯くの如き新疆の對外交通及び運輸の關係は、又以つて新疆の政治的、經濟的諸關係を決定するものであつて、近年に於けるソヴエート聯邦の新疆經略の飛躍的進展は、實にトルクシブ鐵道の完成に負ふところ頗る大なるものがあるのである。茲に於て、支那側は隴海線を延長して甘肅を經て廸化、伊犁、喀什噶爾に及ぼさんとする故孫文の鐵道計畫及び西安—蘭州—廸化—伊犁間。蘭州—和闐—疏勒間—疏勒間の道路建設計畫の具體化を企てゝゐるが、支那の現狀及び外蒙古、新疆の對支關係、更にソヴエート聯邦の對外蒙・新疆政策より見て、之れが實現は頗る怪しまれてゐる。

次に、新疆の省內交通は一九三四年六月の全國道路建設委員會發表によれば、道路は

一、廸　化—奇　台　線	二四九・五八キロ
二、奇　台—哈　密　線	五四二・〇二キロ
三、哈　密—猩々峽線	二三九・九〇キロ
四、廸　化—塔　城　線	六九一・二〇キロ

等にして、この中哈密—猩々峽線を除いては通車が概ね可能である。現今、來往の比較的多いのは廸化を中心として

塔城、伊犁、哈密、阿克蘇の諸都市間及び喀什噶爾、和闐、于闐の五線にして、之れ等の道路もその途中は人煙稀れにして、飲用水を求め難い處や山岳があつて、交通は頗る困難である。

自動車は民國十七年（一九二七年）に塔城―廸化間に始めて運轉せられ、現在では左記の六路線があり、約二百五十臺の長途用自動車が有ると稱せられる。

一、廸　化―塔城間
二、塔城―伊犁―阿克蘇―哈密間
三、喀什噶爾―イルケシタム間

鐵道は、ソヴエート聯邦政府によつてトルクシブ鐵道のアルマアタ驛より伊犁、セルギオーポリ驛より塔城に至る二支線の建設が計畫せられてゐるので、之れが完成は遠くないであろうと見られてゐる。又航空路は、歐亞航空公司（ドイツ資本）のベルリン上海間航空路の一部として、甘肅省蘭州と塔城の間を一九三二年十二月に試驗飛行を行ひ成功したが、新疆の動亂及び盛世才と支那中央政府との對立により、未だ定期飛行が實現するに至らない。之れに反しソヴエート聯邦は哈密、廸化、塔城、伊犁の四ケ所に飛行場を設置し、自國領との航空路を建設してゐるので、航空路に於ても西方に比して遙かに優位にあることが窺はれる。

通信は、一九一八年の國民政府と英國マルコニー無線電信會社との契約によつて、廸化及び喀什噶爾に電力各二萬五千ワット、波長三〇〇の無線電臺が設けられ、兩無電臺相互間及び天津、北平、上海、ソヴエート聯邦、印度等と通信を交換し、又、廸化を中心として省内主要都市間、支那本部、ソヴエート聯邦領に有線電信が架設せられてゐる。

第四章　新疆の資源・産業・貿易

第一節　資源及び産業

曾つて新疆を旅行したヨーロツパ人は、その豐富なる自然資源に驚嘆して「新疆は支那帝王の王冠に鏤められた眞珠である」と稱した如く、新疆の自然資源、特に地下埋藏物は無盡藏であると謂はれてゐる。素よりその實相は明瞭ではないが、既に判明せるものゝみでも左の如くである。

白　金　奇台西北地帶に産する。

金　鑛　塔城哈圖山の埋藏量二千五百萬兩以上と推定せられ、于闐の克里雅山及び喀喇什山、焉耆の額布崑鎖、叶魯番の喀喇崑崙遜山等にある。

砂　金　阿爾泰山の埋藏量三千二百萬兩以上と推定せられ、烏蘇の奎屯河、綏來の瑪納斯河、奇台西北の蘇吉及び塔克拜克山、鎭西の無度溝、焉耆、尉犂大西溝、和闐の玉龍哈什河及び且末河、哈他克山及び卡邊山、于闐の蘇克拉瓦山及び宰列克山、昌吉縣南部等殆んど全土に産する。

鐵　鑛　阿爾泰山附近烏什克南の銀墩子を始めとして且末縣羊廠山、葉城、烏蘇、吐魯番西部の庫木什、和闐の塔瓦克山、焉耆、塔城の塔爾巴哈台山、哈密等にある。

銅　疏附西南の蘇渾山、烏蘭烏蘇河、庫車、拜城の雅哈阿里克爾曦山（年産十二萬斤）、焉耆の庫爾台山、阿克蘇、溫宿、且末附近の諸山、葉城、和闐、伊犁、吐魯番、廸化、伊寧等にある。

鐵　鑛　烏蘇、疏勒、拜城、溫宿、阿克蘇、英吉沙、塔城、伊犁、哈密、廸化、烏蘇、庫車、拜承、溫宿、孚遠、奇台、塔城、阿爾泰、伊犁、疏附、鄯善、阜康、葉城等に産する。

石　炭　新疆の資源・産業・貿易

石　油　烏蘇の獨山子に油泉三十餘あり、緩來に於ても四區の油田にて採油を行つてゐる外、庫車、喀什噶爾、溫宿、廸化西方の四盆溝、塔城、阿爾泰にも產する。

鹽　七角井、廸化の紫俄堡、拜城の圖格哈納鎭、溫宿、焉耆、阿爾泰、庫車、阿克蘇、葉城、于闐の克里雅山等に產する。

その他、玉石、鉛、硫黃、礪砂、石臘、明礬、雲母、硝石、水晶、黑玉等があり、之れ等地下埋藏物の實相が判明すれば恐らく世界の驚異であろうと謂はれてゐる。しかして、この中稍々組織的に採取しつゝあるのは石油のみで、他は交通運輸機關、資本及び技術を有せざるために、土民が極めて原始的方法によつて僅かに採取してゐるに過ぎぬ狀態である。

石油は現在、庫車の哈喇亞倫（一日湧出量百二十斤）、廸化の蘇達里、四賀溝、緩來（油區四、油井二十）、沙灣、塔城（油井九）、烏蘇（油井十九）等に於て採取しつゝある。金は現在主として阿爾泰地方及び于闐地方に於て砂金を產する。其の他銅、鉛、石炭、岩鹽、玉等も少量に產してゐるが石油及び金は多くは蘇聯邦に搬出せられてゐる。

工業は固有のものは殆んど無く、一九〇五年以降に於て始めて近代的企業が建設せられたが、それとても未だ幼稚の域を脫してはゐない。イギリス及びソヴエート聯邦は、夙に無盡藏の自然資源を利用して工業を建設すべく注目してゐたが、最近年に至つて漸くソヴエート聯邦の資本と技術が輸入せられ、ソヴエート聯邦一流の大計畫が樹立せられつゝあるので、逐次工業の隆盛を見るであろう。

しかして、新疆に於ける現在までの主要產業は原始的な農、牧、狩獵である。特に牧畜は新疆の基本的產業として塔城、阿爾泰、伊犂、烏蘇、烏什、古城、焉耆等の諸地方に最も盛んに行はれ、その畜類概數は一九三三年度「中報年

鑑」に依れば左の如くである。

種類	頭數	種類	頭數
馬	一六六、二〇〇頭	羊	四、三二四、八〇〇頭
牛	五〇八、七〇〇頭	豚	二三、五〇〇頭
騾・驢	三〇五、一〇〇頭	合計	五、三二八、三〇〇頭

畜產品は新疆の主要輸出品の一で、その年產額は左の如くである。

種類	數量	種類	數量
羊毛	一〇〇、〇〇〇擔	小羊皮	五〇〇、〇〇〇枚
駝毛	一五、〇〇〇擔	牝羊皮	三〇〇、〇〇〇枚
馬鬃	八、〇〇〇擔	山羊皮	六〇〇、〇〇〇枚
牛皮	六〇、〇〇〇枚	羊腸	一〇〇、〇〇〇元
馬皮	四〇、〇〇〇枚	獸骨	不詳

農業作物としては小麥、高粱、玉蜀黍、蕎麥、米、棉花、或はケシ等があり、穀物の作付反別及び收穫量の概數は左の如くである。

種類	作付面積（千畝）	收穫量（千斤）	種類	作付面積（千畝）	收穫量（千斤）
粳稻	一、四六八	三二四、八八三	高粱	七四七	一五八、三一六
糯稻	二〇八	四三、八三四	粟	三三四	四五、四八四
小麥	四、七一〇	七六二、〇六六	玉蜀黍	二、六三八	五九二、七八九
大麥	六二六	一〇〇、一四九	豆類	五九七	八四、〇八三

棉花は年產約二千萬斤に達し、重要輸出貨物である。ケシは支那本部に於ける栽培取締りによつて近年急激に產出

を増加しつゝある。その他葡萄、梨、西瓜、杏、桃、無花果、梅、柿、瓜等の果實は頗る良質にして往昔より支那本部に知られ、西南部地方に於ては養蠶も行はれてゐる。

第二節　對外貿易

新疆の對外貿易は、大別して支那本部、蘇聯邦及び印度、アフガニスタンの三方面に向つて行はれ、世界大戰前にはロシアが壓倒的勢力を占めてゐたが、大戰勃發と共にイギリス（印度、アフガニスタンより）が之れに替つて一九二五年頃まで新疆の對外貿易を殆んど獨占した。然るに、その後ソヴエート聯邦は新疆の内爭に乘じて商業上の特權を相次いで獲得すると共に、一九三〇年にはトルクシブ鐵道を完成して交通、運輸、軍事の覇權を握つたので、イギリスの經濟的勢力は殆んど驅逐せられて蘇―新間の貿易は急激に增加し、爾後、ソヴエート聯邦は新疆に於ける經濟的支配權を確立した。こゝに蘇・新貿易の年次統計を示せば左の如くである。

蘇新貿易年度別統計（單位千ルーブル）

年度	蘇聯より輸入	蘇聯への輸出	總額
一九一三年	八、四二七	九、八四六	一八、二七三
一九二三年	四一八	三、〇一五	三、四三三
一九二四年	二、六一一	四、五三五	七、一四六
一九二五年	六、〇九二	一〇、三三一	一六、四二三
一九二六年	一〇、二三二	一一、七五四	二一、九八六
一九二七年	一〇、六四七	一三、五二八	二四、一七五
一九二八年	一六、〇五一	一三、七七八	二九、八二九
一九二九年	一五、二一六	一六、七三一	三一、九四七
一九三一年	一三、九五四	一〇、二一二	二四、一六六
一九三二年	一五、六九八	一二、三〇五	二八、〇〇三

蘇新貿易の内容（單位千ルーブル）

○蘇聯へ輸出品

	一九三一年	一九三二年（一月―四月）
牛	一、一四五	八〇六
小家畜	五三七	二、〇八五
絨毛	五、二九四	四、八九六
羊皮及び山羊皮	一、九一四	一、五七五

○蘇聯より輸入品

纖維物	九、七六九	二、七三二
砂糖	八九七	六一九
金屬電氣製品	七八一	一九一

蘇・新貿易の增加に反して支那本部、印度及びアフガニスタンとの貿易は、地理的條件のために逐年減少しつゝあり、斯くて新疆の經濟は、支那本部に依存せずして、全然ソヴエート聯邦に依存し、しかも、益々その傾向を强めつゝあることを顯著なる特徵とするのである。

第五章　新疆の政治的地位

英・露兩國の中央アジアに於ける角逐は、十九世紀の中葉に帝政ロシアの中央アジア征略が始まると共に惹起したが、新疆に對するロシアの積極的行動は、一八七一年の伊犁（イリ）占領に始まり、イギリスの具體的行動は一八七三年にア

クブ・ベクの王位を承認して、之れを懐柔せんとしたことを以つて始めとすると見ることが出來るであろう。勿論、その以前に於ても、兩國の暗闘は新疆に於ても開始せられてゐたことは事實であるが、それは未だ裏面的なゼスチュアに過ぎなかつたのである。

しかして、ロシアは新疆が中央アジア地方の接壌地帯であること、豊富なる原料供給源及び商品市場として夙に重要視してゐたが、ロシアの帝政崩壊後、世界赤色革命を國是として建國したソヴエート聯邦は、新疆より陝西、四川を經て湖南、湖北、江西、福建等に至る所謂コミンテルン・ルートの南路を樹てたので、ソヴエート聯邦にとつての新疆は、單なる經濟的價値のみでなくして、重大なる政治的價値を有するに至つた。又イギリスは、新疆がイギリスの寶庫印度の接壌地帯であることによつて、この地に一切の外國勢力が侵入することを極度に厭忌してゐた。殊にイギリスは印度を防衛するために、西藏を勢力圏に收めてゐたのみならず、更に勢力を擴大して西藏、新疆、青海及び支那の他の部分を含む大西藏帝國を中央アジアに建設する目的を有した。

英・蘇兩國は、斯くに大陸中樞地帯に於て尖鋭に對立し、最近年の新疆の內爭に對しては、常に辛辣なる術策を用ひたことは頗る顯著である。即ち、ソヴエート聯邦は一九三一年の回教徒暴動に際して、省政府主席金樹仁に新通商條約に調印せしめて、之れと交換的に武器彈藥を供給したが、一方では秘かに叛將馬仲英に對しても同樣の援助を與へて內爭を激化し、その機に乘じて回教徒の革命的解放を成就せんとしたのであつた。然るに、イギリスは馬仲英に武器彈藥を供給して所謂「回教徒の新疆建設」を呼號せしめ、以つてソヴエート聯邦の裏を掻かんとした。茲に於て、ソヴエート聯邦は盛世才に多量の武器及びトラック、飛行機、機關銃等の新鋭武器を與へて、馬仲英の東トルキスタン王國を倒壞せしめ、遂ひに南部新疆に於ける英勢力を紛碎したのである。

イギリスは一九二九年には既に喀什噶爾（カシガル）地方に於てすら治外法權を事實上喪失してゐたのであるが、斯くて馬仲英の敗戰によつて殆んど新疆より退却せしめられた。そして、イギリス勢力の落潮に反比例してソヴエート聯邦の勢力は壓倒的となり、今や新疆の政治、經濟、軍事、交通等の一切の支配權は實質的にソヴエート聯邦政府の手に歸したと見られる。しかして、ソヴエート聯邦が斯くも急速に新疆を席捲し得た理由は、所謂「被壓迫民族のボリシエヴイキ的解放」なるスローガンが新疆の民衆に歡迎せられたがためでもなくして、外交手腕が卓越してゐたがためでもなくして、實に新疆の西域に沿ふトルクシブ鐵道の完成が齎らしたところの軍事、經濟上の優越に基くものである。

英勢力敗退後の新疆には、いまだ公然たる共產黨の組織は無いやうであるが、所詮、第二の外蒙古として急速なる赤化工作が遂行せられつゝあるであろうことは疑ひの餘地が無いところであろう。しかして、新疆の赤化は、支那本部に至る赤化南路の强化を意味し、中國共產軍との連絡は既に目捷に迫つてゐると謂はねばならない。新疆にあるソヴエート聯邦の軍用飛行機は、一九三四年十二月には、早くも甘肅省東部にまで飛來してゐるのである。

支那の有識者は、斯る西北邊境の情勢に狼狽して「滿洲の獨立も西北邊境の情勢に比すれば物の數ではない」と叫んで、次に來るべき東亞全局の動亂に戰慄してゐる。更に、中國共產軍をソヴエート聯邦赤軍の總豫備隊と見るならば極東地方及び外蒙古の情勢と共に、新疆の赤化は恐怖的なる重壓を全東洋に感ぜしめるものである。

之れを要するにソヴエート聯邦の新疆支配は、單なる侵略的行爲に非らずして、その眞の意義は世界赤色革命の一段階たる點にあることに注意しなければならぬであろう。

〔附　錄　一〕

寧夏・甘肅・青海事情

第一章　地域・住民・人口

寧夏・甘肅・青海は所謂支那西北邊境の一部にして三省相連り、東は北支那及び西部內蒙古、西は新疆及び西藏、南は西康及び四川、北は外蒙古に接する。その各省面積、住民及び人口は左の如くである。

寧夏……面積九十萬平方支里。住民は蒙古族、回教族多くして漢人少く、總人口約七十萬人である。

甘肅……面積百十萬平方支里。住民は回教族と漢人略々同數にして蒙古族少く、總人口約七百萬人に達する。

青海……面積二百四十九萬平方支里。住民は回教族、蒙古族、漢人及び西藏人等雜居し、總人口約百五十萬人である。

第二章　資源及び産業

第一節　資　　源

交通不便なるこの地方に於ては、未だ自然資源の調査は充分でなく、從つて之れが開發も遲々たるものであるが、特に鑛物資源は頗る豐富に埋藏すると見られ、現在判明せるものは左の如くである。

一、寧　　夏

金鑛……阿拉善（アラシャン）、額濟納（エチナ）にあるが埋藏量及び産額は不明。

銀鑛……阿拉善、平羅にあるが詳細不明。

鐵鑛……寧夏地方にあるが埋藏量不明、現在産出なし。

銅鑛……中衛にあるが埋藏量不明、現在産出なし。

鉛鑛……阿拉善にあるが埋藏量不明、現在産出なし。

石油……平羅、靈武にあるが埋藏量不明、現在探油せず。

石炭……寧夏、平羅、中衛、寧朔、磴口に豐富にあり、その推定埋藏量四百兆噸と稱する。中衛炭は良質にして豐富であつて、現在年産約六千噸。

鹽……鹽地、阿拉善、蒙王池、中衛、磴口に産し豐富であるが産出額は不明。

曹達……磴口、寧夏にて廣く産するが産狀は不明。

石灰……賀蘭山にあるが埋藏量不明、現在産出なし。

硼砂……阿拉善にあるが埋藏量不明、現在産出なし。

二、甘　　肅

金鑛……新疆、青海、四川、西康との境界地方は總て砂金を産し、就中、永登縣の鎖羌灘及び酒泉、敦煌南縣南方の初連山は最も著名である。全省の一ヶ年産金額は約二萬兩（一兩は三一・二五瓦）に達する。

石炭……甘肅に於ける石炭は頗る廣汎豐富に分布し、埋藏量總計五百兆噸と稱せられるが、有煙炭に屬するものが多く無煙炭は極めて少い。現在探掘してゐるものは皋蘭阿干鎭炭礦（炭層の厚さ二尺乃至三丈、埋藏量約三百七十萬噸、一ヶ年實却高約一萬噸）。玉門縣紅溝、北窰、昌馬の三炭礦（一日の採炭量合計七千五百斤）。酒泉縣炭礦（埋藏量頗る豐富、一日採炭量約二千斤）。張掖、臨澤二縣の炭礦（年産三百六十萬斤）等にして、何れも幼稚なる土法採掘である。

石油……玉門縣赤金堡、白楊河一帶に豐富な鑛床があり、附近住民の幼稚なる採油にて年産約十萬斤を産しつゝある。

鐵鑛……隴南、徽成兩縣に豐富に埋藏し、民國十七年小資本の製鐵工場を設け附近の需要に充てゝゐる。

銅鑛……西和縣南方の樊家山に産し、小規模の製煉所がある。含有量二四%。

三、青　海

金鑛……大通、貴德、都蘭、玉樹、同仁の諸縣及び黃河支流湟水流域と通天河附近にて農閑期に農民が砂金を採取し、その年產七千兩。

石炭……平羅縣汝箕溝炭礦（炭質良好年產約三千噸）。靈武縣磁窰堡炭礦（年產三千餘噸）。中衛縣炭礦（三ヶ處にあり年產合計約四千噸）。寧朔縣、磴口縣にもあるが產出殆んどなし。

硝石……全省に產するが產出額は少し。

鹽……最も著名なる鹽湖に花馬池あり。

鉛鐵……寧朔縣にあり光緒年間に採掘したが現在休止してゐる。

銀鐵……中衛縣光武手頭山に產するが採掘者なし。

硫黃、明礬……中衛縣の各處に產す。

鐵鑛……平羅縣有呪山にあるが採掘者なく詳細不明。

第二節　農　業

沙漠を除く外概ね農耕に適する地質であるが、地方民は農業上の技術を有せず原始的農法に終始してゐる。概要は左の如くである。

一、寧　夏

農田……五十五萬二千餘畝。牧草、馬鈴薯を產するも產額は不詳。中衛には狗杞、髮菜、甘草等の藥草を產し、その年產十萬元である。その他米、粟を栽培する。

二、甘　肅

農田……千四百九十四萬畝。米、粟、小麥、玉蜀黍、棉、煙草を栽培し、就中棉は陝西、新疆に次いで產出が多い。

三、青　海

農田……百三十一萬畝。全省土地肥沃にして到る處農耕が可能であるが、開墾面積は比較的少い。小麥、粟、米、蕎麥等を栽培する。

第三節　牧　畜

寧夏、甘肅、青海に於ける牧畜は、回教族及び蒙古族の基本的產業にして最も盛んである。その產額は三省合して左の如くである。

牧畜年產額

種類	頭數	單價
馬	一六六、二一八頭	七〇元
牛	四五五、八四一頭	四〇元
羊	五、二三五、〇六五頭	八元
豚	五二九、四一〇頭	一一元
驢馬	三八三、一一六頭	三〇元

獸毛年產額

種類	數量	價格
羊毛	一〇〇、〇〇〇擔	一、五〇〇、〇〇〇元
駝毛	一〇、〇〇〇擔	九〇〇、〇〇〇元
馬毛	六、〇〇〇擔	四八、〇〇〇元

資源及び產業

獸皮年産額

種類	數量	單價
羔羊皮	一〇〇、〇〇〇枚	二元
牛皮	二一〇、〇〇〇枚	七元
馬皮	三〇、〇〇〇枚	三元
毛皮(狐狼豹等)	約一〇〇萬元	

第四節　工業

寧夏——織物業は家內工業的に廣く行はれ、摸樣絨緞、毛氈類を產する。製品は褐色のものが多く、粗工、細工の二種があつて、粗工品は防寒用、細工品は生地細く微孔多く防暑用に使用する。又賀蘭山より產する硯石にて硯又は器具裝飾品を製する。

甘肅——織物、蠟燭、漆、藍染料、紙類、皮革、陶磁器製造業が比較的盛んである。織物は麻、毛の二種で年產約七萬五千元、蠟燭四萬三千元、藍六萬八千元、紙類四萬八千元、皮革二十萬元、陶磁器九萬二千元、釀酒年產三百萬斤。

青海——游牧民が多くを占めてゐる爲め、工業として見るべきものはない。

〔附錄(二)〕

ウラル・アルタイ民族分類表

一、ツングース族
- (一)滿洲ツングース
  - 北部ツングース
  - 南部ツングース
- (二)日韓ツングース
  - 古朝鮮人
  - 有史時代朝鮮人
  - 日韓ツングース
- (三)蒙古ツングース
  - 古蒙古人
  - 有史時代蒙古人
  - 蒙古ツングース

二、蒙古族
- (一)西部蒙古人
  - カルムク、ジョンガル、トルグート、ホショート、チベット、オイラート、ハルハ人
- (二)固有蒙古人
  - ブリヤート、カルカ人
- (三)ハルハ蒙古人
  - 固有蒙古人
  - 滿洲ダフール人

三、土耳其族
- (一)西部土耳其人
  - 土耳其人
  - 韃靼人
  - 土耳其斯坦人
- (二)北部土耳其人
  - 固有土耳其人
  - ヤクート、ハルタイ人
  - 土耳其斯坦人

四、芬蘭族
- (一)固有芬蘭人
  - ヴォグール
  - オスチャク
  - ヴォチャク
  - チュヴァシ
- (二)ウゴール人
  - ハンガリー人
- (三)ペルム人
  - ジリエン人
  - ペルミヤク人
- (四)ヴォルガ人
  - マリ人
  - モルドヴィン人
- (五)バルト人
  - エストニア人
  - リヴォニア人
  - リトアニア人
  - レット人
- (六)ラップ人
  - ラップ人
- (七)フィン人
  - フィン人
  - カレリア人
  - ヴォツチャク人

三、トルコ族

- 南部トルコ人
  - コーカサス・タタール
    - ソ連邦イラン・トルコ
    - クリミア・トルコ
    - オスマン・トルコ
    - トルコマン（トルクメン）
  - 西部トルコ人
    - シベリヤ・タタール
      - キルギス
      - スカラ・カルパーク
      - カザーク・キルギス
      - カラ・カルパーク
  - 東部トルコ人
    - タシ
    - タベ
    - リ
    - ルア・
      - キルギス
      - カラウール
      - ジルス
    - タタール
    - タタール
    - タラ
    - バ
    - ルト・
      - メレツキー
      - ルトルコ
    - ア
    - バ
    - カ
    - ンバ
      - カサ
      - チガ
      - ソイ
    - 北ヤ
      - アク
      - ルー
      - タト
      - シクドヤ
      - バヨメルク
      - カイーノガー
      - ソイノルダノト

- 中亜トルコ人
  - ウタサ
  - ズベク
  - 東干及回紇
  - チ及
    - タサカ
    - ラルシ
    - ソトユガ
    - チル人
    - 人人

- 西部トルコ人
  - タボ
    - ルー
    - ガ・
    - ルタ
    - アカザン・タタール
    - ストラハン・タタール
  - エニセバ
  - リワシキ
  - ヤシキ
  - 及ー
  - クメル、
  - シ、チチ
    - バシキ
    - チュワシ
    - 及メシチエリヤ
    - ークタタール

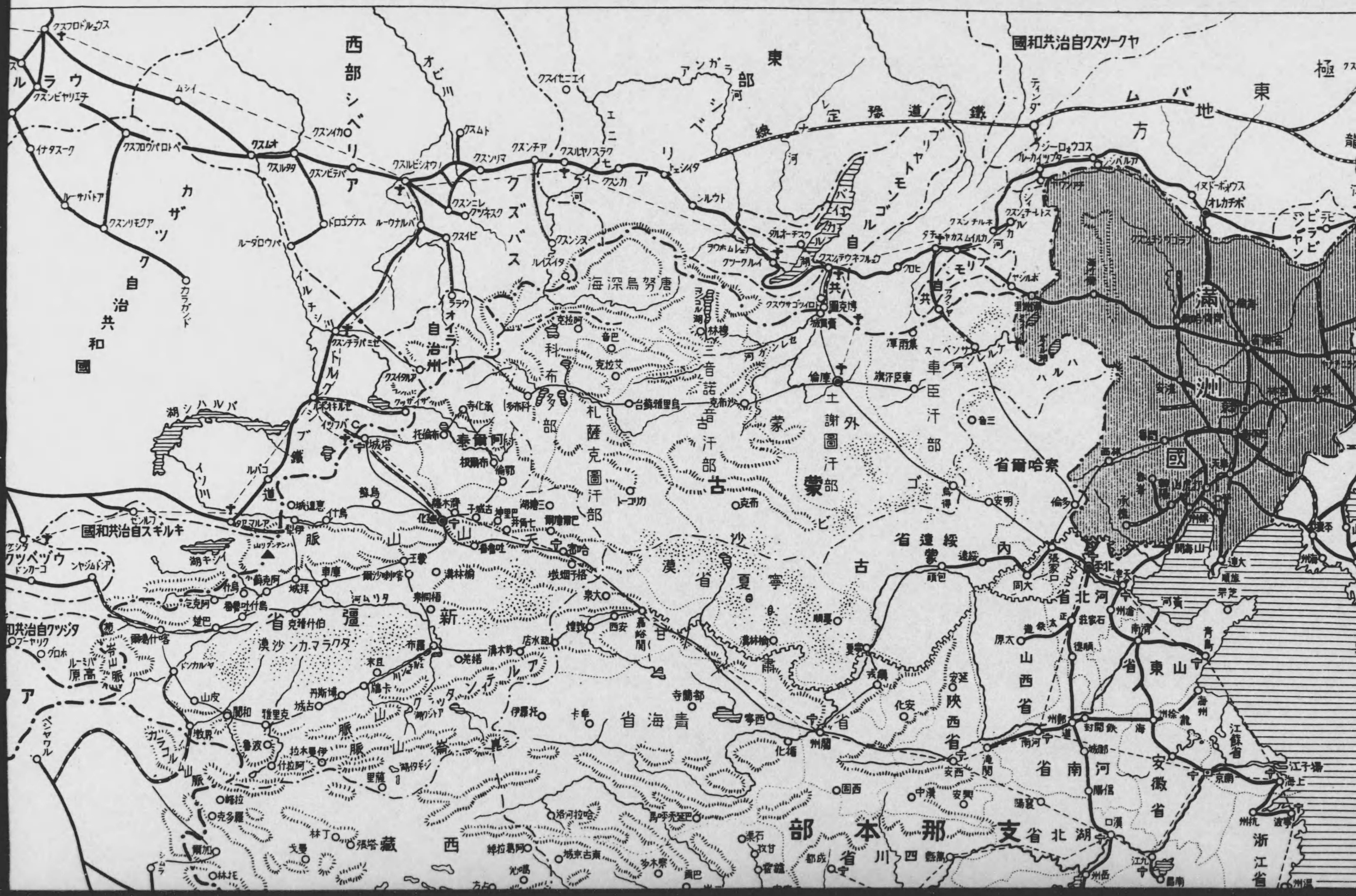
四、フィン・ウグリア族

- ウグリア族
  - 東ウグリア族
    - オスチヤーク
    - ウオグール
  - 西ウグリア族（マジヤール）
- フ
- イ
- ン
- 族
  - ベ
  - ルムバルト・ライン族
    - ズキリアンウオチヤーク族
      - ベルミヤークブ
      - ラエカフ
      - ーリレ
      - ッスア
      - チ人ン

五、サモエード

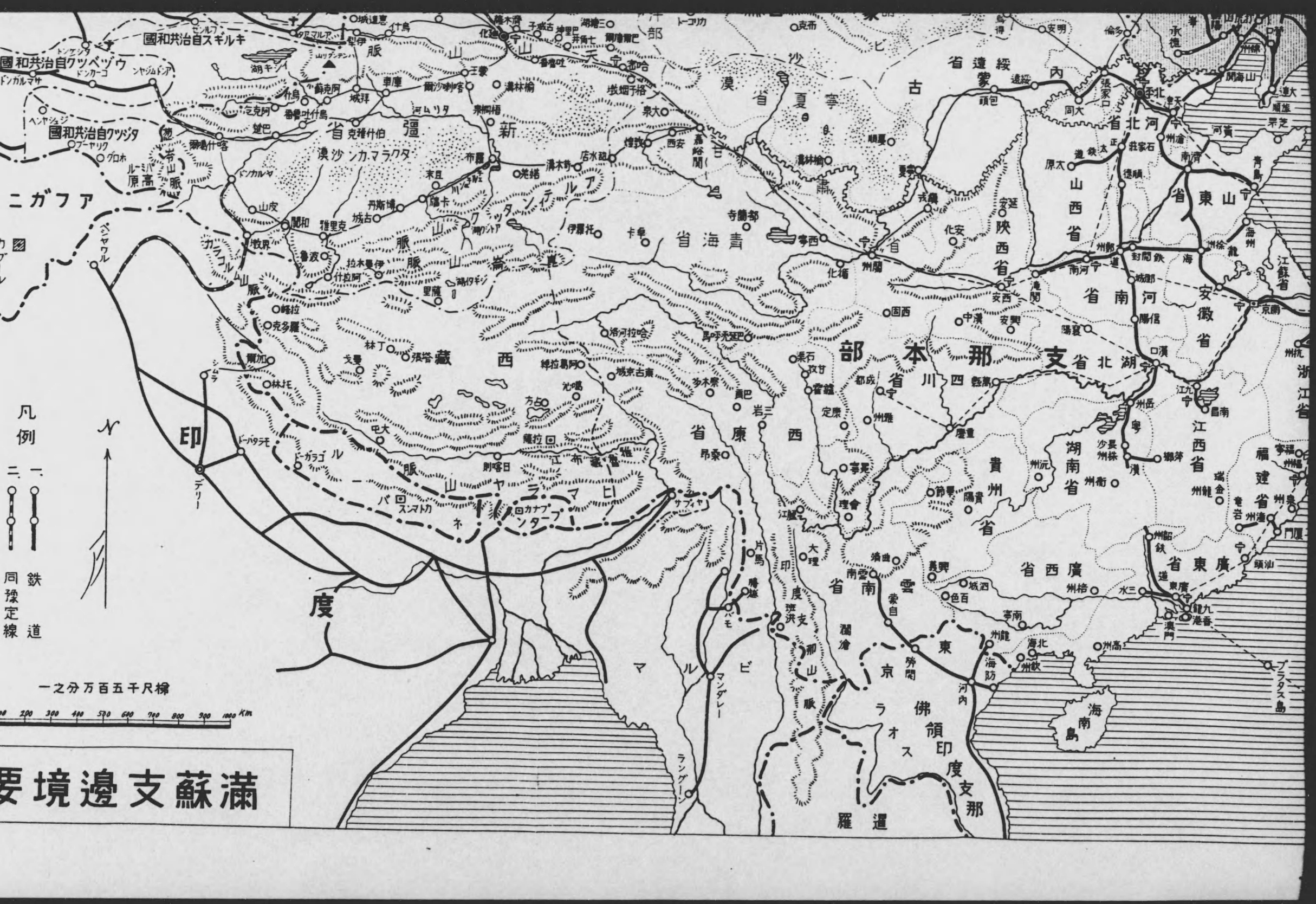
- ヤンハイ等）
- テル、メレツ、トルコ、キジル、ソイオート、ウリ
- その他の雑種（コイバル、カラカース、サガイ、ベリ
- エニセイ、キモエード
- オスチヤコ、サモエード
- タグ
- ウラ

滿蘇支邊境事情　終



西部シベリア
東部シベリア
クズバス
カザツク自治共和國
ルラウ
國和共治自クズツークヤ
ムバ地方
極東
定豫道鐵
ブリヤト・モンゴル自治共和國
オイラート自治州
唐努烏深海
三音諾音汗部
外蒙古
土謝圖汗部
車臣汗部
ゴビ
ハルハ
滿洲國
索哈爾省
內蒙古
綏遠省
寧夏省
甘肅省
新疆省
青海省
西藏
山西省
陝西省
河南省
安徽省
江蘇省
浙江省
湖北省
四川省
支那本部

西部シベリア
東部シベリア
ヤクーツク自治共和國
バム地方
鐵道豫定線
ウラル州
カザック自治共和國
クズバス
アンガラ河
オビ川
バルハシ湖
キルギス自治共和國
ウズベック自治共和國
タジック自治共和國
トルクメン共和國
アフガニスタン
カブール
ペシャワル
外蒙古
内蒙古
滿洲國
新疆省
タクラマカン沙漠
青海省
寧夏省
綏遠省
察哈爾省
山西省
陝西省
河北省
山東省
河南省
安徽省
湖北省
支那本部
西藏
庫倫
張家口
北平
天津
青島
蘭州
西安
漢口
迪化
哈密
塔城
和闐



滿蘇支邊境要

滿蘇支邊境要圖

凡例

一 鉄道
二 同豫定線
三 航空路
四 道路

縮尺千五百万分之一

0 100 200 300 400 500 600 700 800 900 1000 Km

附　　錄

滿·蘇·支邊境地方資料一覽

茲に掲げる項目別資料索引は當所が一般の利用に充つるため蒐集分類整理せる各種資料（圖書・研究報告・雜誌類等）中より本書本文に記載せる地方に關する記事內容を項目別に集錄せるものである。尙この一覽中には察哈爾、綏遠に關する資料名を入れた。これは本書の內容には直接關係はないが、邊境事情研究上の參考として附加したものである。之等の資料は秘扱書類以外總て一般の閱覽を歡迎する。

滿洲事情案內所資料係　瀧　田　　正

資料一覽目次

○極東・外蒙・新疆・察哈爾・綏遠關係……1頁より

項目	(極東) 頁	(新疆) 頁	(外蒙) 頁	(察・綏) 頁
○歷　　史	1	11	16	20
○地　　理	2	12	16	20
○法　　制	3	12	17	21
○政治・外交	4	13	17	21
○交　　通	5	14	18	21
○財政・金融	6	14	18	22
○商業・貿易	7	14	18	22
○工・鑛業	8	15	19	22
○農・畜・林・水產業	9	15	19	23
○教育・宗教	11	15	19	23
○社會・勞働	11	—	—	—
○民　　俗	—	16	19	23

○寧夏・甘肅・青海關係……24頁

極東地方

○歷　　史

題　　名（著者）	書　　名	發行年月
シベリア征服略史（サヴイン著川田秀雄譯）	近世露滿蒙關係史（福田書房）	昭 10. 4
極東の植民略史	近世露滿蒙關係史（福田書房）	昭 10. 4
露支外交の發端	同　　上	昭 10. 4

題　　名（著者）	書　　名		發行年月
尼布楚條約	同	上	昭 10. 4
布拉條約	同	上	昭 10. 4
恰克圖條約	同	上	昭 10. 4
1727年より1851年までの斷續的露支關係	同	上	昭 10. 4
帝政ロシアと支那との恒常的關係	同	上	昭 10. 4
露西亞帝國滿洲侵略史（ロマノフ）	同	表題	昭 9. 7
ロシア極東政策の根本的契機	同	上	昭 9. 7
滿洲問題の發生	同	上	昭 9. 7
露西亞歷史の概觀	新露西亞風土記（大竹博吉）		昭 9.11

○ 地　　理

新露西亞風土記（大竹博吉）	同	表題	昭 9.11
ソヴエート聯邦經濟地理（平竹傳三）	同	表題	昭 9. 8
最新ソヴエート聯邦地圖（滿鐵調査課編）	同	表題	昭 3. 7
東洋とソヴエート聯邦（滿鐵調査課編）	同	表題	昭 7. 2
露西亞諸民族の研究（滿鐵調査課編）	同	表題	昭 5. 3
亞細亞露西亞の住民（滿鐵調査課編）	同	表題	昭 3. 1
極東露領に於ける黃色人種問題（滿鐵調査課編）	同	表題	昭 4. 4
ソ聯に於ける東洋民族の地位（布施勇治）	邊疆支那（2の1）		昭 10. 1
東部西伯利地方人口問題	極東蘇領事情（3）		康 2. 5
極東地方都市の人口	ソヴエート聯邦事情（4の6）		昭 8. 6
極東地方區別人口	サヴエート聯邦極東地方事情（1の1）		大同 2. 9
極東地方の住民	ソ聯極東地方要覽（滿鐵經濟調査會）		昭 9.10
極東地方民族別表	サヴエート聯邦極東地方事情（1の1）		大同 2. 9
極東ソ領及び間島に於ける鮮人（蒲地侃）	邊疆支那（2の2）		昭 10. 2
東部西比利亞地方住民に對する特典の附與	ソヴエート聯邦事情（5の4）		昭 9. 4
極東露領諸統計	露亞時報（147）		昭 7. 1
極東露領諸統計	露滿蒙時報（159）		昭 8. 1
極東地方事情	ソヴエート聯邦總覽　第五卷（滿鐵調査課編）		昭 2.11
露領極東地誌（上・下）（滿鐵調査課編）	同	表題	昭 2. 6
極東露領事情	日蘇年鑑1935年版（日蘇通信社）		昭 10. 4
極東露領の現狀を見る	日本と蘇聯邦（茂森唯士）		昭 9. 7
ソヴエート東方邊疆の現勢（布施勇治）	邊疆支那　創刊號		昭 9. 8
初めてソ聯に入る一露人の極東見聞記	北滿研究		昭 10. 1
極東露領の猶太人王國ビロビジヤン…ソヴエート現勢資料1934年版（露西亞通信社）			昭 9. 5

題　　名（著者）	書　　名		發行年月
東部シベリヤ地方最近事情	東亞政情（3）（外交部）		康 2.12
西比利亞地方事情	ソヴエート聯邦總覽（4）（滿鐵調査課編）		昭 2.11
西伯利亞（石川六郎）	同表題（民友社）		大正 8. 9
沿海州	西伯利亞（石川六郎）		大正 8. 9
後貝加爾州	同	上	大正 8. 9
黑龍州	同	上	大正 8. 9
ツンドラとタイガ	同	上	大正 8. 9
西伯利亞族	同	上	大正 8. 9
黑龍州の氣候・土壤・植物研究誌（上・下）（滿鐵調査課編）	同	表題	昭 2.12
勘察加調査書　自第1編至第6編（滿鐵調査課編）	同	表題	昭 2. 2
カムチヤツカの現狀	露紙抄譯（200）		昭 10. 2
カムチヤツカの鵬繪イエロヴカ越え（中垣虎兒郎）	改　造（17の6）		昭 10. 6
沿海州の各種統計數字	サヴエート聯邦極東地方事情（2の1）		大同 3. 1
ッウワ共和國	國際事情（457）		昭 10.10
北樺太開發の鍵鑰	ソヴエート聯邦事情（3の2）		昭 7. 2
ブラゴエスチエンスクの全貌	滿鮮經濟（68）		昭 9. 4
露支國境考（滿鐵・哈・事）	同	表題	大正14.12
鮮滿國境の地理的考察（神山史邑）	新　京		昭 8.12
國境アムール事情（關東軍參謀部）	愛　國（8の3）		昭 9. 3
吉林省東北部滿ソ國境地方事情	ソヴエート聯邦事情（5の2）		昭 9. 2
東寧國境事情（今元久）	滿　蒙（16の12）		昭 10.12
滿ソ國境巡遊記	日滿時代		昭 10. 7
アルグン地帶（倉重政雄）	月刊ロシヤ（1の1）		昭 10. 7
露滿國境を觀る（田中香苗）	邊疆支那（1の2）		昭 9. 9

○ 法　　制

極東地方中央黨機關の組織	北滿研究（3の4—5）		昭 10. 5
極東に於ける黨及政府組織と其の主腦部	北滿研究（3—2）		昭 10. 2
東部シベリヤ地方內にチタ州の組織	北滿研究（2の4）		昭 9. 4
ソ聯極東の新行政區劃變更	ソヴエート聯邦事情（4の2）		昭 8. 2
行政區劃變更後の新沿海州展望	ソヴエート聯邦事情（4の2）		昭 8. 2
西比利の行政經濟事情（上・下）（滿鐵調査課編）	同	表題	昭 4. 5
極東地方新行政區劃	極東蘇領事情（3）		康 2. 5
ソ聯極東の新行政區劃變更	ソヴエート聯邦事情（4の2）		昭 8. 2
極東地方區劃	ソ聯極東地方要覽（滿鐵經濟調査會）		昭 9.10

題名(著者)	書名	發行年月
極東に於ける區及其の中心地	ソヴエート聯邦極東地方事情(1の1)	大同 2. 9
ヤクウト共和國 自第1卷至第3卷(滿鐵調査課編)	同表題	昭 5. 2
ヤクート自治社會主義「ソヴエート」共和國事情	極東蘇領事情(1)	康 2. 1
ブリヤート蒙古自治社會主義「ソヴエート」共和國事情	極東蘇領事情(2)	康 2. 4
東部シベリヤ地方に於ける清黨作業總決算	サヴエート聯邦極東地方事情(2の4)	康 1. 4
第11回全聯邦共產黨極東地方黨會議(成田精雄)	北滿研究(2の2)	昭 9. 2
赤衛軍に就いて	ソ聯邦と支那滿洲の共產運動(新光社)	昭 9. 9
ソヴエート憲法	ソヴエート現勢資料 1934年版(露西亞通信社)	昭 9. 4
ソヴエート刑法	同上	昭 9. 4
ソヴエート憲法の民主化(山之內一郎)	改造	昭 10. 6
憲法改正の準備工作	露紙抄譯(217)	昭 10. 8
最新ソヴエート刑事訴訟法(胡麻本葛一譯)	同表題	昭 9. 9
ソヴエート政府の民族政策に關する法規集成第1卷第3卷(滿鐵調査課編)	同表題	昭 5. 3

○ 政治・外交

近世露滿蒙關係史(サヴイン著川田秀雄譯)	同表題	昭 10. 4
ソ聯極東政策の急轉	北滿研究(2の1)	昭 9. 1
蘇聯の黨及政府監査機關の大改革と新任極東監査代表(成田精雄)	北滿研究(2の5)	昭 9. 5
蘇聯邦東方政策の眞相(藤塚止才夫)	ソヴエート批判(2の1)	昭 9. 1
ソヴエート聯邦の極東政策現況(神田正種)	同表題	昭 9.10
國境紛爭處理委員會とソ聯の極東政策(加藤正一)	滿洲國通信	昭 10.1025
蘇露の極東政策	關東軍弘報資料(27)	昭 9. 8
世界の平和と蘇聯アジア政策の轉換(長岡克曉)	東亞(6の7)	昭 8. 7
注目すべきソ聯極東に對する政策の轉換	ソヴエート聯邦事情(5の2)	昭 9. 2
コミンテルンの指導方針と最近の蘇聯對極東政策の推移	蘇聯情報(滿洲國協和會)	康 1.12
蘇聯邦當局の亞細亞邊境に對する關心	東亞政情(1)(外交部)	昭 10. 9
蘇聯外交の轉向と極東の政局(町田梓樓)	改造(16の11)	昭 9.10
ソヴエート聯邦の東方進展	東亞政情(3)(外交部)	康 2.12
ソ聯の對日滿方針	ソヴエート聯邦事情	昭 10. 1
極東兵備の情勢(岩崎民雄)	創造(4の1)	昭 9. 1
極東に備へよ(陸軍省調査班稿)	大陸(22の1)	昭 9. 1
極東軍備	日蘇年鑑1935年版(日蘇通信社)	昭 10. 4
ソ聯極東防備其後の經緯	日露年鑑(日露通信社)	昭 8. 8
極東赤軍論(平田晋策)	改造(16の11)	昭 9.10
空前の極東の軍備擴充	蘇聯邦事情(273)(日蘇通信社)	昭 9.12

題名(著者)	書名	發行年月
ソ聯極東に於ける軍備の現狀	ソヴエート聯邦事情(4の7)	昭 8. 7
近代國防から見たソヴエート・ロシア(清水盛明)	國際評論	昭 9. 9
滿蘇國境に於ける蘇聯軍狀(岩佐忠哉)	同表題	昭 9.11
滿蘇國境の海軍(南條享)	月刊ロシア(1の2)	昭 10. 8
極東ロカルノ問題	日露年鑑1936年版(日露通信社)	昭 10.12
極東問題	ソヴエート現勢資料1934年版(露西亞通信社)	昭 9. 4
日露關係	日露年鑑昭和八年版(日露通信社)	昭 8. 8
日蘇滿關係	ソヴエート現勢資料1934年版(露西亞通信社)	昭 9. 4
日滿ソ關係	日露年鑑1936年版(日露通信社)	昭 10.12
日滿蘇安全保障協約の提唱(岸田英治)	滿洲評論(9の15)	昭 10.10
代表的アジアブロック論	ツラン民族運動と日本の新使命(野副重次)	昭 9.12
沿海露領買收論(秋山斧助)	改造(16の12)	昭 9.11
沿海州中立化の提唱に就いて(貴志)	滿洲評論(9の16)	昭 10.10
沿海州中立化の提唱(蘆田均)	日本評論(10の10)	昭 10.10
露領北樺太とその必然的歸趨(神宮司詳)	邊疆支那(2の5)	昭 10. 5
越境事件に關するソヴエート紙	露紙抄譯(215)	昭 10. 7
來るべき日蘇戰爭の戰略(テイ・ゼーベツツ)	邊疆支那(1の3)	昭 9.10
シベリアに對する米國の宿望	西伯利亞(民友社)	大正 8. 9
滿ソ國境問題考	ソヴエート聯邦事情(3の12)	昭 7.12
國境方面に於ける狀勢	東亞政情(3)(外交部)	康 2.12
滿蘇國境問題の展望(本多弘一)	滿蒙	昭 10.10
滿ソ國境紛爭處理試案	滿洲評論(9の9)	昭 10. 8
滿洲國境問題の將來(吉村忠三)	外交時報	昭 10. 8

○ 交通

亞細亞露西亞の交通(滿鐵調査課編)	同表題	昭 2. 7
蘇聯鐵道の現狀と1934年度計畫(軍司義男)	北滿研究	昭 9. 2
露領極東の運輸5年計畫	ソヴエート聯邦事情(3の2)	昭 7. 2
ソ聯極東の運輸交通問題(滿鐵經濟調査會)	同表題	昭 9.10
極東に於ける蘇聯の鐵道政策に就て(秋葉義通)	滿蒙評論(225)	昭 9. 9
極東地方交通	ソ聯極東地方要覽(滿鐵經濟調査會)	昭 9.10
極東露領交通通信	蘇聯邦事情(281)(日蘇通信社)	昭 10. 3
北鐵に代るソ聯極東の鐵道網(吉村忠三)	邊疆支那(2の3)	昭 10. 3
東部シベリア地方第二回黨總會決議より觀たる東部シベリア並ザバイカル鐵道の近情	北滿研究(2の8)	昭 9. 8
歐亞連絡及地方旅客列車時刻變更	北滿研究(2の5)	昭 9. 5

題名(著者)	書名	發行年月
ザバイカル及ウスリー鐵道運輸統計	北滿研究(2の5)	昭 9. 5
ブレーヤ炭田新鐵道の踏査及建設	北滿研究(2の9)	昭 9. 9
最近に於けるウスリー鐵道從業員大會	北滿研究(2の12)	昭 9.12
極東三鐵道に於ける新機關庫の新設及增設計畫	北滿研究(2の12)	昭 9.12
シベリヤ横斷急行列車「光」新造さる	北滿研究(2の4)	昭 9. 4
東部シベリヤ地方に於けるトラクター修理の現況	サヴエート聯邦極東地方事情(2の2)	大同 3. 2
哈府浦鹽間に新道路完成	露紙抄譯(227)	昭 10.12
歐亞聯絡運輸協定	日露年鑑1936年版(日露通信社)	昭 10.12
極東海運現勢	日蘇年鑑1935年版(日蘇通信社)	昭 10. 4
極東海運の現狀	ソ聯極東の運輸交通問題(滿鐵經調)	昭 9.10
極東沿岸航路發著日程	北滿研究(2の5)	昭 9. 5
アムール河水系並に日本海	北滿研究	昭 10. 1
浦鹽港の諸統計	露亞時報(147)	昭 7. 1
西比利亞東岸水路誌(1•2)(水路部)	同表題	昭 5. 7
ソ聯邦の北氷洋經營(外務省)	同表題	昭 10. 5
黑龍江系水路誌(滿鐵調查課編)	同表題	昭 4. 5
黑龍江及其支流の航運(滿鐵調查課編)	同表題	昭 3. 9
滿蘇國境河川航行問題	國際評論(3の9)	昭 9. 9
勘察加航路	日蘇年鑑1935年版(日蘇通信社)	昭 10. 4
滿ソ國境水路交涉	ソヴエート聯邦事情(5の5)	昭 9. 8
鹽浦港の諸統計	露滿蒙時報(159)	昭 8. 1
浦潮斯德商港(滿鐵調查課)	同表題	大正10. 9
ソ聯北海岸及東海岸の航空路	ソ聯極東の運輸交通問題(滿鐵經調)	昭 9.10
極東に於ける新航空路	北滿研究(2の5)	昭 9. 5
極東民間航空	日蘇年鑑1935年版(日蘇通信社)	昭 10. 4
極東通信事業	日蘇年鑑1935年版(日蘇通信社)	昭 10. 4
日ソ郵電關係	日露年鑑(日露通信社)	昭 8. 8
極東に於ける通信及び運輸事業への機械動力應用問題	ソ聯極東の運輸交通問題(滿鐵經調)	昭 9.10
極東地方放送局概況	日露年鑑1936年版(日露通信社)	昭 10.12

○ 財政・金融

ソヴエート聯邦の財政金融	日露年鑑1936年版(日露通信社)	昭 10.12
1935年度極東地方豫算	北滿研究	昭 10. 5
1934年度の極東地方の地方豫算	北滿研究(2の4)	昭 9. 4
極東地方昭和八年度豫算	ソヴエート聯邦事情(4の6)	昭 8. 6

題名(著者)	書名	發行年月
東部シベリヤ地方1934年度獸肉徵集規定	サヴエート聯邦極東地方事情(2の4)	康 1. 4
東部シベリヤ地方に於ける免稅及增俸	サヴエート聯邦極東地方事情(2の4)	康 1. 4
東部シベリヤ地方穀物稅納入の景況	サヴエート聯邦極東地方事情(2の4)	康 1. 4
ソヴエート聯邦貨幣史(滿鐵調查課編)	同表題	昭 3.12
勞農ロシアの通貨制度に就いて(堀井實)	經濟俱樂部講演(15)	昭 7.10
ソヴエート經濟の貨幣問題	ソヴエート聯邦事情(4の6)	昭 8. 6
ソ聯邦の金融經濟	ソヴエート聯邦事情(4の9)	昭 8. 9

○ 商業・貿易

露西亞經濟史(滿鐵調查課編)	同表題	昭 5. 9
最近露西亞の經濟事情(川谷幸左衛門)	同表題	昭 10. 6
露領極東の資源と產業(滿鐵調查課編)	同表題	昭 3. 1
蘇領極東地方の經濟的躍進(神田正雄)	改造(17の11)	昭 10.11
極東露領の躍進(香取桂一)	外交時報(75の4)	昭 10. 8
極東露領產業建設の全貌	日蘇年鑑1935年版(日蘇通信社)	昭 10. 4
1935年度極東地方經濟建設計畫(成田精雄)	北滿研究	昭 10. 5
蘇聯極東開發政策の急展開と1934年度極東地方國民經濟計畫	北滿研究(2の4)	昭 9. 4
ソ聯極東地方開發策の基調と其の重要鑛產資源(古澤敏太郎)	ソヴエート聯邦事情(4の7)	昭 8. 7
極東地方企業一覽(露西亞係)	北滿研究(2の3)	昭 9. 3
昭和十年度の極東地方產業計畫	露紙抄譯(267)	昭 10. 5
極東地方の商事檢查	北滿研究(2の4)	昭 9. 4
內國商業機關網の改革と極東地方の商事狀況	北滿研究(2の10)	昭 9.10
極東地方商業	ソ聯極東地方要覽(滿鐵經濟調查會)	昭 9.10
極東地方五箇年計畫の成績	ソヴエート聯邦事情(4の3)	昭 8. 3
極東第二次五年計畫の展望	日露年鑑1936年版(日露通信社)	昭 10.12
極東蘇領に於ける物資の缺乏狀態	關東軍弘報資料(52)	昭 8. 6
1935年極東ソ領經濟計畫	滿鮮經濟(82)	昭 10. 7
蘇聯極東地方コルホーズ商業の一展望	極東地方事情(1の3)	大同 2.12
露領極東に於ける職業組合の組成(滿鐵調查課編)	同表題	昭 2. 5
北樺太建設の十ケ年	露紙抄譯(211)	昭 10. 6
露領沿海地方の自然と經濟(上・下)(滿鐵調查課編)	同表題	昭 2. 2
勘察加州經濟調查資料(滿鐵調查課)	同表題	大正 4. 5
カムチヤツカに於ける自然資源の開拓	露紙抄譯(217)	昭 10. 8
古代極東民衆の交換(西村眞次)	日本古代經濟交換編第一册(東京堂)	昭 9.11
共產主義と經濟政策(矶博生)	サ聯邦と支那滿洲の共產運動(新光社)	昭 9. 9

題　　名（著者）	書　　名	發行年月
第一次五ヶ年計畫	ソ聯邦と支那滿洲の共產運動（新光社）	昭 9. 9
第二次五ヶ年計畫	同　上	昭 9. 9
日ソ利權關係概說	日露年鑑（日露通信社）	昭 8. 8
北鐵代價物資買附成約經過解說	日露年鑑1936年版（日露通信社）	昭 10.12
北鐵物資取引決約書	同　上	昭 10.12
對露取引の金融狀態	日露年鑑（日露通信社）	昭 8. 8
ソヴエート聯邦の輸出入貿易（滿鐵調查課編）	同　表　題	昭 4. 9
ソヴエート聯邦の國營貿易論（上・下）（滿鐵調查課編）	同　表　題	昭 4.11
露西亞貿易史　哈爾濱商品陳列館	同　表　題	昭 2. 4
1933年ソヴエート聯邦外國貿易統計（日露通信社譯）	同　表　題	昭 9. 5
極東貿易通路	露滿蒙時報（159）	昭 8. 1
極東露領對外貿易	同　上	昭 8. 1
ソ聯の對新疆省貿易	日蘇年鑑1935年版	昭 10. 5
ソ　蒙　貿　易	同　上	昭 10. 5
ロシヤの對蒙古輸出躍進	日露年鑑昭和八年度	昭 8. 8
日ソ貿易に就いて（佐々木靜吾）	露滿蒙時報（174）（175）	昭 9. 4 昭 9. 5
日露貿易の沿革	日露年鑑（日露通信社）	昭 8. 8
日ソ貿易有望品	同　上	昭 8. 8
蘇聯邦外國貿易と日蘇貿易狀況	海外經濟事情（10の10）	昭 10. 5
1934年日ソ貿易主要品別輸出入額	露紙抄譯（206）	昭 10. 4
轉換期の日ソ貿易	蘇聯邦事情（286）	昭 10. 5
革命後の日ソ貿易觀	日露年鑑1936年版（日露通信社）	昭 10.12

○ エ・鑛業

極東工業の發展動態	日蘇年鑑1935年版（日蘇通信社）	昭 10. 4
極東地方工業	ソ聯極東地方要覽（滿鐵經濟調查會）	昭 9.10
極東露領工業の發展	蘇聯邦事情（281）（日蘇通信社）	昭 10. 3
極東地方の工業化に就いて	露紙抄譯（197）	昭 10. 1
極東地方に於ける重工業の立遲れ	露紙抄譯（217）	昭 10. 8
極東露領の重工業とヒンガン・ブレーヤ冶金企業合同（丸山直光）	露滿蒙時報	昭 10. 4
極東のガラス市場と其の將來	北滿研究（2の12）	昭 9.12
スパスク市外セメント工場の建設狀況	北滿研究（2の5）	昭 9. 5
極東地方の住宅＝公營建設狀況	北滿研究（2の4）	昭 9. 4
極東地方鑛業	ソ聯極東地方要覽（滿鐵經濟調查會）	昭 9.10
露領極東の鑛產（上・下）（滿鐵調查課編）	同　表　題	昭 2. 1

題　　名（著者）	書　　名	發行年月
露領極東の鑛業利權（滿鐵調查課編）	同　表　題	昭 3.11
東部シベリア地方鑛產概要	極東地方事情（1の3）	大同 2.12
ソ聯極東地方開發策の基調と其の重要鑛產資源	ソヴエート聯邦事情（4の8）	昭 8. 8
シベリア地理學協會と五ヶ年計畫における其役割（平竹傳三）	東　洋（37の12）	昭 9.12
東部西比利亞地方の鑛產及び運輸（西敏夫）	露滿蒙時報	昭 10. 9
ソヴエート極東石炭鑛業の不振	新　東　洋	昭 9. 8
極東で發見された褐炭層	露紙抄譯（225）	昭 10.11
ソ聯極東地方石炭產業の現狀（茂野清治）	露滿蒙時報（171）	昭 9. 1
ソ聯極東の採炭冶金ベース（內山）	北滿研究（2の3）	昭 9. 3
ブレヤ炭田の調查進捗	北滿研究（2の4）	昭 9. 4
第1.4半期に於ける極東地方の採金業	露紙抄譯（259）	昭 10. 5
蘇聯黑龍州採金工業計劃の破綻	サウエート聯邦極東地方事情（2の3）	康 1. 3
北東西比利の採金	愛　國（8の12）	昭 9.12
黃金の西伯利亞	西伯利亞（民友社）	大正 4. 9
ビロビジヤンの鑛物富源	北滿研究（2の4）	昭 9. 4
鑛產地としてのアンガロイリムスキー地方	北滿研究（2の11）	昭 9.11
貝加爾湖畔の石油調查	北滿研究（2の4）	昭 9. 4
樺太の石油（金原泰）	邊疆支那（2の5）	昭 10. 5
シベリヤの石油	支那鑛業時報（83）	昭 10. 9
北樺太石油業發展計畫	支那鑛業時報（83）	昭 10. 9
北樺太石油九年度計畫	ソヴエート聯邦事情（5の5）	昭 9. 8
燃料問題北樺太石油	蘇聯邦事情（276）	昭 10. 1
極東露油の躍進と我が燃料政策	日露年鑑（日露通信社）	昭 8. 8

○ 農・畜・林・水產業

極東地方農業	ソ聯極東地方要覽（滿鐵經濟調查會）	昭 9.10
極東露領農業	蘇聯邦事情（281）（日蘇通信社）	昭 10. 3
極東の農業	日蘇年鑑1935年版（日蘇通信社）	昭 10. 4
露領極東の農業と植民問題（滿鐵調查課編）	同　表　題	大正15.11
露領極東の農地と移植民の概況	北滿研究（2の1）（2の2）	昭 9. 1 昭 9. 2
ソ聯內に於ける東方移住史（カスリン・バーネース）	邊疆支那（2の4）	昭 10. 4
ソヴエート聯邦の農業恐慌（滿鐵經調）	同　表　題	昭 9.10
蘇聯極東地方農業稅實施規則	極東地方事情（1の3）	大同 2.12
沿黑龍地方の農業（滿鐵調查課編）	同　表　題	昭 2. 5
西比利の農牧林業（滿鐵調查課編）	同　表　題	大正11. 8

題名(著者)	書名	發行年月
西伯利亞の農業	西伯利亞(民友社)	大正 8. 9
沿海州及黑龍州產の小麥並ライ麥の穀粒研究(滿鐵調査課編)	同表題	昭 2. 7
沿海州の水田(哈爾濱商品陳列館)	同表題	昭 3. 3
1935年極東地方春蒔計畫	北滿研究	昭 10. 5
1934年度極東地方春蒔計畫と其の意義	北滿研究(2の5)	昭 9. 5
1934年度極東地方春蒔成績	北滿研究(2の9)	昭 9. 9
極東地方作付面積と食糧問題	北滿研究(2の5)	昭 9. 5
露領極東地方に於ける米作の概況(三輪孝)	北滿研究(2の8)	昭 9. 8
東部シベリア地方にける循環耕作の刷新	サヴエート聯邦極東地方事情(2の2)	大同 3. 2
極東地方農耕トラクター陣の現況	サヴエート聯邦極東地方事情(2の2)	大同 3. 2
極東の羽毛及び毛皮業	ソ聯極東地方要覽(滿鐵經調)	昭 9.10
ブリヤート牧畜の現況と將來	極東蘇聯事情(2)	康 2. 4
極東家畜數の現在並革命前の比較	露滿蒙時報(157)	昭 8. 1
極東露領毛皮有望一ケ年獲高	露滿蒙時報(159)	昭 8. 1
露領黑龍州の畜產業(上・下)(滿鐵調査課編)	同表題	昭 2.12
極東地方の1934年度羊毛納付義務	北滿研究(2の4)	昭 9. 4
露領極東の林業と林況(滿鐵調査課編)	同表題	昭 2. 3
露領極東の森林利權(滿鐵調査課編)	同表題	昭 3. 9
極東地方林產資源	極東蘇領事情(3)	康 2. 5
ソ聯邦極東地方に於ける林業の現狀(茂野清治)	露滿蒙時報(172)	昭 9. 2
極東地方林業	ソ聯極東地方要覽(滿鐵經濟調查會)	昭 9.10
林業の現在及將來	西伯利亞(民友社)	大正 8. 9
極東材と大平洋市場	北滿研究(2の4)	昭 9. 4
極東經濟破壞の一因と材採業	北滿研究(2の4)	昭 9. 4
露領材の輸入取引について	日露年鑑1935年版(日露通信社)	昭 10.12
露領極東の魚類及毛皮資源(上・下)(滿鐵調査課編)	同表題	昭 4. 3
極東地方漁業	ソ聯極東地方要覽(滿鐵經濟調查會)	昭 9.10
ソ聯極東漁業の現狀	ソヴエート聯邦事情(4の4)	昭 8. 4
數字的に見た沿海州の漁業(服部庄一郎)	邊疆支那(2の5)	昭 10. 5
極東の漁業	西伯利亞(民友社)	大正 8. 9
ソ聯林業經營組織の一例としての露領極東昭和八年度冬季造材計畫	ソヴエート聯邦事情(3の2)	昭 8.12
昭和9年度ソ聯極東漁業の全貌	ソヴエート聯邦事情(5の5)	昭 9. 8
カムチヤツカ蘇聯國立漁場を見る(綾岡信二郎)	改造(17の2)	昭 10. 2
極東地方の鹽に就いて	北滿研究(2の10)	昭 9.10
北洋漁業問題の沿革	日露年鑑(日露通信社)	昭 8. 8

題名(著者)	書名	發行年月
ソ聯邦の極東漁業實績	日露年鑑(日露通信社)	昭 8. 8
日ソ兩國の極東漁業關係機關	同上	昭 8. 8
ソ聯邦の極東漁業	日露年鑑1936年版(日露通信社)	昭 10.12
邦人露領漁業實績	同上	昭 10.12

○ 教育・宗教

ソ聯邦の教育學術概觀	ソヴエート現勢資料1934年版(露西亞通信社)	昭 9. 4
ソヴエート教育の新エポック	ソヴエート聯邦事情(3の11)	昭 7.11
ソ聯に於ける教育の潮脈(鳩野三郎)	ソヴエート聯邦事情(8の4)	昭 9. 4
ソ聯の教育組織と極東の教育狀況	北滿研究(2の11)	昭 9.11
極東地方各專門學校昭和8年度學生收容數	ソヴエート聯邦事情(4の6)	昭 8. 6
本年度極東學術調查隊	支那蠶業時報(83)	昭 10. 9
極東地方の學術研究計畫	支那蠶業時報(83)	昭 10. 9
東部シベリヤ地方に於ける新聞及雜誌	サヴエート聯邦極東地方事情(2の4)	康 1. 4
露國に於けるボリシエヴイズム發達史上・下(滿鐵調査課編)	同表題	昭 3. 3
ソ聯の反宗教運動とラマ教(吉村忠三)	邊疆支那(1の2)	昭 9. 9
蘇聯邦に於ける宗教壓迫の狀況及び其反動	關東軍弘報資料(133)	昭 10. 6

○ 社會・勞働

全聯邦共產黨の現勢	ソヴエート現勢資料1934年版(露西亞通信社)	昭 9. 4
共產黨インターナショナル	同上	昭 9. 4
ソヴエートに於ける配給制度(杉山哲夫)	露滿蒙時報(194)	昭 10.12
文化事業の新傾向	ソヴエート現勢資料1934年版(露西亞通信社)	昭 9. 4
思想問題	新露西亞風土記(大竹博吉)	昭 9.11
極東地方の農工文化計畫	ソヴエート聯邦事情(3の3)	昭 7. 2
沿海州の醫療施設(內山)	北滿研究(2の3)	昭 9. 3
蘇聯勞働事情	北滿研究(2の2)	昭 9.12
ソ聯最近の勞働事情	ソヴエート聯邦事情(4の2)	昭 8. 2
强制勞働で開發さるゝソ聯邦西比利亞の現狀	調查資料旬刊(237)	昭 9.12
重視すべき全國的勞銀基金制限問題	ソヴエート聯邦事情(4の5)	昭 8. 5
露領極東在住民の悲慘なる生活狀態に就いて	國政資料(4の12)	昭 9.12

新疆省

○ 歷史

新疆二千二百年史及ソ國の新疆一統	國政資料(5の11)	昭 10.11

題　　名（著者）	書　　名	發行年月
新疆を繞る英露支關係の今昔（冨士辰馬）	東　　亞（6の11）	昭　8.11
新　疆　歷　史	新疆調書（外務省調査部）	昭　10. 2
新疆概觀西域諸國略誌	大　亞　細　亞　主　義	昭　9.12

○　地　　理

新疆自然地理	新疆調書（外務省調査部）	昭　10. 2
新疆省の面積地勢氣候資源通商	國政資料（5の11）	昭　10.11
新疆省の現在人口	國政資料（5の11）	昭　10.11
新疆の人口・住民	新疆調書（外務省調査部）	昭　10. 2
新　疆　の　都　市	新疆調査（外務省調査部）	昭　10. 2
新疆境界に就いて（CB ネダーチン）	現代新疆（滿鐵經調）	昭　10. 6
住　　民	現代新疆（滿鐵經調）	昭　10. 6
新疆に於ける蒙古民族	善隣協會調査月報	昭　10. 1
新疆省の民族問題	支那邊疆と英露の角逐（入江啓四郎）	昭　10. 7
シベリア民族とその獨立氣運（吉村忠三）	邊疆支那（2の1）	昭　10. 1
新疆と「スメル」民族に就て（戸上駒之助）	大　亞　細　亞　主　義	昭　9. 4
ツラン人種とツラン民族（野副重次）…ツラン民族運動と日本の新使命（日本公論社）		昭　9.12
新　疆　省　事　情	支那邊疆概觀（東亞經濟調査局）	昭　10. 7
新疆省の現況	滿　鐵　調　査　月　報	昭　10. 4
新　疆　事　情	支那邊疆と英露の角逐（入江啓四郎）	昭　10. 7
新　疆　省　事　情	最新支那地理（西山榮久）	昭　3. 2
新疆及西藏事情	大　亞　細　亞　主　義	昭　9. 3
新　疆　概　觀	大亞細亞通信（67）	昭　10. 9
邊疆とは（重光藏）	支那邊疆概觀（東亞經濟調査會）	昭　10. 7
西北支那の現狀（神田正雄）	東　　洋（9の12）	昭　9.12
橘瑞超師の新疆探險（波多野乾一）	邊疆支那（2の2）	昭　10. 2
新疆よりゴビ沙漠を横ぎるーネダーチナ夫人の手記（田口稔）……	滿　洲　日　日　新　聞	昭10.11.20
新　疆　風　景	大亞細亞通信（57）	昭　10. 5

○　法　　制

新疆行政組織	現代新疆（滿鐵經調）	昭　10. 6
新疆省の行政區域	支那經濟地理誌（馬場銀太郎）	昭　8. 4
邊疆に於ける共產軍の動靜	東　　亞（8の9）	昭　10. 9
支那の共產運動	ソ聯邦と支那滿洲の共產運動（新光社）	昭　9. 9
中國共產軍と紅軍	同　　上	昭　9. 9

題　　名（著者）	書　　名	發行年月
總豫備隊としての支那共產軍（波多野乾一）	邊疆支那（1の3）	昭　9.10

○　政治・外交

新疆省の狀勢	支那經濟年報昭和十年版（支那經濟事情研究會）	昭　10. 2
其の後の新疆省	大亞細亞通信（49）	昭　10. 3
新疆問題の現狀	國　際　事　情	昭　10.3.5
新疆省政治外交	最新支那年鑑（東亞同文會）	昭　10. 6
新　疆　の　政　情	新疆調書（外務省調査部）	昭　10. 2
新疆の國際關係	新疆調書（外務省調査部）	昭　10. 2
新　疆　の　政　治	支那邊疆概觀（東亞經濟調査局）	昭　10. 7
新疆に關する主たる條約	支那邊疆概觀（東亞經濟調査局）	昭　10. 7
邊疆各省軍	最新支那年鑑（東亞同文會）	昭　10. 6
新疆の重大性について（中馬多太彥）	大　亞　細　亞　主　義	昭　9. 3
邊疆問題の重要性（大西齊）	邊疆支那　創刊號	昭　9. 8
新疆の國際關係及その前途	邊　疆　支　那	昭　10. 2
新疆を廻る列國の爭覇戰（馬醫四郎）	大　亞　細　亞　主　義	昭　9. 3
新疆を繞る英露の暗闘	現代新疆（滿鐵經調）	昭　10. 6
新疆に於ける蘇英の角逐	大　亞　細　亞　主　義	昭　9. 1
新疆に於ける英紙の論調	大亞細亞通信（57）	昭　10. 5
新疆問題と土耳古の輿論	大　亞　細　亞　主　義	昭　9.10
新疆事情と支那政客の改革意見（支那駐屯軍）	同　　表　　題	昭　8.12
南京の回疆政策（右近）	滿洲評論（5の5）	昭　8. 7
南京政府の新疆開發策	邊疆支那（2の2）	昭　10. 2
新疆の動搖獨立運動の經緯	大　亞　細　亞　通　信	昭　8.12
獨立せる新疆	東　　亞	昭　8. 6
新疆省政府の親蘇政策	國　際　事　情（446）	昭　10. 5
新疆の獨立とソ支接近	善隣協會調査月報（42）	昭　10.11
ソ聯と新疆（松村四郎）	滿洲評論（5の17）	昭　8.10
新疆省に於ける蘇聯勢力の擴充	蒙古事情研究資料（二）（蒙古事情研究會）	昭　9.10
露西亞の新疆省（清水泰二）	東　　亞	昭　8. 6
新疆に於ける露國の策謀（松本忠雄）	支　　那	昭　8. 8
新疆ソヴエート化へ	支　　那	昭　8. 8
新疆省のソヴエート化	東亞政情（外交部）	康　2. 9
新疆省とソ聯	國　際　事　情（462）	昭　10.10
新疆に於けるソ聯の活動	ソヴエート聯邦事情（4の10）	昭　8.10

題　　名(著者)	書　　名	發行年月
ソ聯新疆ソヴエート化を否定	國際事情(462)	昭 10.10
ソ聯邊疆政策の本質(中平亮)	邊疆支那(1の2)	昭 9. 9
新疆とロシア	現代新疆(滿鐵經調)	昭 10. 6
赤化新疆の一斷面(村田孜郎)	邊疆支那(2の2)	昭 10. 2
ソ聯邦の新疆赤化の狀況に就いて	滿洲國通信	昭10.11.13
支那西邊の諸問題(山口懷一)	滿洲行政(2の6)	昭 10. 6
中國の邊疆問題(高橋清四郎)	東洋	昭 10. 7
邊疆問題の重要性(大西齊)	邊疆支那(1の2)	昭 9. 9
支那邊疆の特質(重光葵)	支那(26の5)	昭 10. 5
邊疆問題に現はれたイギリスの動向(尾崎秀實)	邊疆支那(2の7)	昭 10. 7
支那邊疆問題と日本の關心(渡邊哲信)	邊疆支那(1の2)	昭 9. 9
外國に於ける支那邊疆の研究(松本忠雄)	邊疆支那(1の2)	昭 9. 9
支那邊疆赤化工作進展の意義(不三)	滿洲評論(9の12)	昭 10. 9
支那邊疆地方に對するサヴエートの影響	東亞	昭 10.10
共產軍の動向と支那西部邊疆の危機	東亞(8の6)	昭 10. 6
支那共產黨のソヴエート運動	滿鐵調査月報(15の2)	昭 10. 3
日支共同赤化防衞について	善隣協會調査月報	昭 10. 2

○ 交　　通

新疆の交通	新疆調書(外務省調査部)	昭 10. 2
新疆の通信	新疆調書(外務省調査部)	昭 10. 2
新疆の交通	現代新疆(滿鐵經調)	昭 10. 6
蘇聯邦の新疆交通政策	外交時報(745)	昭 10.12
支那西北地方開發と其の交通(鐘ヶ江信光)	山口商學雜誌(6の2)	昭 10. 6
新疆省の交通路	支那省別全誌　第6卷(東亞同文會)	大正 7. 1

○ 財政・金融

新疆の財政	新疆調書(外務省調査部)	昭 10. 2
新疆の金融	同　上	昭 10. 2

○ 商業・貿易

原料供給源としての新疆(重光葵)	支那邊疆概觀(東亞經濟調査局)	昭 10. 7
市場としての新疆	同　上	昭 10. 7
新疆經濟事象を支配するもの	同　上	昭 10. 7
新疆の產業	新疆調書(外務省調査部)	昭 10. 2
新疆省の經濟近況	天津日本商議時報	昭 10. 7

題　　名(著者)	書　　名	發行年月
新疆商業	現代新疆(滿鐵經調)	昭 10. 6
新疆省の經濟近況	東洋貿易研究(14の7)	昭 10. 7
新疆省經濟事情	東亞政情	康 2.10
新疆省經濟事情の一端	邊疆支那(1の2)	昭 9. 9
西北經濟近況(調査部)	新東洋	昭 10. 8
西北邊疆の資源	邊疆支那(1の4)	昭 9.11
支那邊疆の開發計畫	國際評論	昭 9. 8
中國ソヴエート區の經濟建設狀況(調査部)	上海	昭 10. 6
新疆に於けるソヴエートの經濟政策	東亞(6の10)	昭 8.10
新疆の貿易	支那邊疆概觀(東亞經濟調査局)	昭 10. 7
新疆の對蘇聯邦貿易の趨勢(侯厚吉)	國際評論(3の9)	昭 9. 9
ソ聯の對新疆貿易狀況	東亞	昭 8. 6
新疆の貿易關係(原勝)	邊疆支那(1の4)	昭 9.11
英領印度及新疆間貿易年報1934年	海外經濟事情(10の21)	昭 10.11
新疆の貿易	新疆調書(外務省調査部)	昭 10. 2

○ エ・鑛業

新疆工商	中國經濟年鑑(下)	民 24. 9
新疆省工鑛業	最新支那年鑑(東亞同文會)	昭 10. 6
西北工業概況	滿鐵調査月報	昭 10. 6
新疆工業	現代新疆(滿鐵經調)	昭 10. 6
支那ソヴエート區域の工業政策(漆琪生)	東亞(7の10)	昭 9.10
新疆礦業	中國經濟年鑑(下)	民 24. 9
蒙古新疆の鑛物資源	支那鑛業時報	昭 5. 8
新疆の地下埋藏物	新疆調書(外務省調査部)	昭 10. 2
西北鑛業概況	滿鐵調査月報	昭 10. 6
新疆石油問題の經緯	支那鑛業時報	大正10. 3
新疆省に於ける鑛產	支那省別全誌第6卷(東亞同文會)	大正 7. 1
新疆鑛業	現代新疆(滿鐵經調)	昭 10. 6

○ 農・畜

新疆省農業と牧畜	最新支那年鑑(東亞同文會)	昭 10. 6
新疆の農業	新疆調書(外務省調査部)	昭 10. 2
新疆農墾	中國經濟年鑑(下)	民 24. 9
新疆牧畜	中國經濟年鑑(下)	民 24. 9
新疆の牧畜	新疆調書(外務省調査部)	昭 10. 2

題　名(著者)	書　名	發行年月
新疆牧畜	現代新疆(滿鐵經調)	昭 10. 6
新疆狩獵	同　上	昭 10. 6

○ 教育・宗教

新疆の社會文化及教育	新疆調書(外務省調査部)	昭 10. 2
新疆の新聞	同　上	昭 10. 2
言語・宗教	同　上	昭 10. 2
新疆の回教	同　上	昭 10. 2
イスラム教の教義概觀	邊疆支那(2の1)	昭 10. 1
回教問題の重要性(須田正繼)	大亞細亞	昭 10. 5
アジア復興の底流イスラム教徒(千葉山男)	邊疆支那(2の5)	昭 10. 5
1931—35年に於ける回教徒の叛亂	現代新疆(滿鐵經調)	昭 10. 6

○ 民　俗

新疆の婚姻風俗(伊藤左右三郎)	同　仁(9の1)	昭 10. 1
中國ソヴエートの婦人と結婚問題(ラスコルニスク)	支　那	昭 10. 5

外　蒙　古

○ 歷　史

近代蒙古史研究(矢野仁一)	同　表　題	昭 3.10
外蒙古と清朝との歷史的關係	同　上	昭 3.10
唐奴烏梁海地方と清朝との關係	同　上	昭 3.10
哲布尊丹巴の出現と庫倫の起源	同　上	昭 3.10
蒙古史研究(箭內亙)	同　表　題	昭 5.10
外蒙近世史	善隣協會調査月報	昭 10. 8
蒙古史略	同表題(東亞產業協會)	昭 10. 6
民族の興亡より見たる過去の滿蒙(鶴居滋一)	日滿關係の地理教育(日黑書店)	昭 8. 9
清朝と內外蒙古との結緣	ツラン民族運動と日本の新使命(野副重次)	昭 9.12
蒙古略史	近世露滿蒙關係史	昭 10. 4
清時代の蒙古	同　上	昭 10. 4
外蒙古共和國の史的發展(滿川龜太郎)	大亞細亞主義	昭 9. 1
蒙古の世界史登場(オーエン・ラテイモア)	滿洲に於ける蒙古民族(善隣協會)	昭 9.11

○ 地　理

蒙古の現住地・名稱及び範圍(矢野仁一)	近代蒙古史研究(弘文堂)	昭 3.10

題　名(著者)	書　名	發行年月
庫倫の氣候	外蒙古の現勢(善隣協會)	昭 10. 1
外蒙古の面積	同　上	昭 10. 1
外蒙古の版圖	同　上	昭 10. 1
外蒙古の人口	同　上	昭 10. 1
外蒙古の都市	同　上	昭 10. 1
塞外民族(白鳥庫吉)	東洋思潮第12回 岩波書店)	昭 10.10
滿洲に於ける蒙古民族	同表題(善隣協會)	昭 9.11
蒙古系諸民族の分布狀態(浦本部隊)	偕行社記事	昭 10. 9
外蒙及新疆の近況	同　表　題	昭 10. 3
外蒙共和國の現狀	國際事情(457)	昭 10.10
外蒙共和國上・下(滿鐵調查課編)	同　表　題	昭 2. 1
外蒙古(阿坂篤)	月刊ロシア(1の1)	昭 10. 7
外蒙古と自治內蒙古の現情(盛島角房)	同　表　題	昭 9.12
外蒙古事情	實業部月刊	康 2. 9
國境及外蒙(山本實彥)	改　造	昭 10. 9
外蒙古事情	邊疆支那	昭 9. 8
西內蒙古及外蒙事情一班	蒙古事情研究資料(三)(蒙古事情研究會)	昭 9.10
今日の外蒙古(ゲオルギンスキイ)	東　洋(37の1) (37の3)	昭 9. 1 昭 9. 3
外蒙古一般事情(支那駐屯軍)	同　表　題	昭 9. 4
外蒙及新疆の近況	新　東　洋	昭 10. 7
外蒙古事情	最新支那地理(西山榮久)	昭 3. 2
外蒙古「サンベース」地方狀況	東亞政情第3號(外交部)	康 2.12
外蒙烏得の概要	善隣協會調查月報	昭 10. 4
庫倫の最近事情	善隣協會調查月報	昭 10. 9
外蒙古國民共和國最近事情(猪口正躬)	滿　蒙	昭 3. 6
蒙古民國事情	同　表　題	昭 2.11
張軍の現況と其關係(支那駐屯軍)	同　表　題	昭 8. 7
外蒙古都邑事情	滿蒙全書第7卷(滿鐵調查課)	大正12.12
外蒙古事情(山田久太郎)	滿　蒙	大正10. 7
外蒙古とはどんなところか(濱今朝人)	露滿蒙時報	昭 10. 3

○ 法　制

外蒙共和國政府の組織	最新支那年鑑(東亞同文會)	昭 10. 6
外蒙古國家組織	外蒙古の現勢(善隣協會)	昭 10. 1
外蒙古共和國憲法	外蒙古の現勢(善隣協會)	昭 10. 1

題名(著者)	書名	發行年月
○ 政治・外交		
蒙古獨立の顚末	近代蒙古史研究(矢野仁一)	昭 3.10
內外蒙古最近の政情	善隣協會調査月報	昭 10. 4
外蒙古政情及び軍備	最新支那年鑑(東亞同文會)	昭 10. 6
外蒙古の對外關係	外蒙古の現勢(善隣協會)	昭 10. 1
外蒙古軍事情況	外蒙古の現勢(善隣協會)	昭 10. 1
最近外蒙古の情勢(玉井莊雲)	支那	昭 8. 7
外蒙古の最近情勢と滿蒙關係(村田孜郎)	支那	昭 10.10
外蒙古の國際的展望(岸田英治)	外交時報	昭 10.10
內外蒙古を繞ぐる諸問題	善隣協會調査月報	昭 10. 8
外蒙共和國の發展と戰略的重要性(尾崎秀實)	東亞	昭 10. 7
外蒙古軍のハルハ占領事件	支那時報(22の3)	昭 10. 3
ソ聯支配下の外蒙	日蘇年鑑(日蘇通信社)	昭 10. 5
赤化せる蒙古	サ聯邦と支那滿洲の共產運動	昭 9. 9
外蒙古の赤化と銃後民衆の軍國化	日蘇年鑑1935年版(日蘇通信社)	昭 10. 4
外蒙古赤軍の解剖	蘇聯邦事情(284)(日蘇通信社)	昭 10. 4
蒙古方面に於ける對ソ關係(依田四郎)	蘇聯邦事情(280)	昭 10. 3
ソ聯の對外蒙新政策(中保與作)	邊疆支那創刊號	昭 9. 8
チタ會議に於ける蘇聯の對外蒙政策	蘇聯情報第1號(滿洲國協和會)	康 2. 5
外蒙共和國の蘇聯邦	支那時報	昭 10.10
外蒙共和國と蘇聯邦	國際事情(454)	昭 10. 9
外蒙と支那との關係	國際事情(454)	昭 10. 9
外蒙古に於ける英露の角逐	支那邊疆と英露の角逐(入江啓四郎)	昭 10. 7
露支蒙三國協定	國際事情(454)	昭 10. 9
外蒙の猛者を望む	新東洋	昭 10. 8
○ 交通		
外蒙古交通・通信	最新支那年鑑(東亞同文會)	昭 10. 6
外蒙古の交通及び通信	外蒙古の現勢(善隣協會)	昭 10. 1
外蒙古事情及道路狀況(藤田義文)	道 (3の8)	康 2. 8
蘇聯の外蒙古對策と鐵道計畫	蘇聯情報第1號(滿洲國協和會)	康 2. 5
張庫間交通紀要	善隣協會調査月報	昭 10. 9
○ 金融		
外蒙古の金融	最新支那年鑑(東亞同文會)	昭 10. 6

題名(著者)	書名	發行年月
○ 商業・貿易		
外蒙古の產業	外蒙古の現勢(善隣協會)	昭 10. 1
外蒙古の經濟及び貿易	外蒙古の現勢(善隣協會)	昭 10. 1
外蒙古の商事機關	北滿研究	昭 10. 1
外蒙古主要物產	最新支那年鑑(東亞同文會)	昭 10. 6
外蒙經濟の現狀	善隣協會調査月報	昭 10. 9
外蒙古產業の現狀	露亞時報 149	昭 7. 3
	露亞時報 150	昭 7. 4
外蒙古の門戶開放問題	外交時報	昭 10. 8
外蒙古及呼倫貝爾地方の資源	蒙古貿易及資源の調査(日蒙貿易協會)	昭 4.11
外蒙貿易の裏面觀	善隣協會調査月報(42)	昭 10.11
露蒙貿易	近代蒙古史研究(矢野仁一)	昭 3.10
蒙古貿易及資源の調査(日蒙貿易協會)	同表題	昭 4.11
外蒙新疆のソ聯經濟機關	善隣協會調査月報	昭 10. 7
○ 工・鑛業		
外蒙古の工業(ア・ペ・ヒオーニン)	北滿研究 自(2の4)	昭 9. 4
	至(2の8)	昭 9. 8
外蒙古の工業	外蒙古の現勢(善隣協會)	昭 10. 1
○ 農・畜		
外蒙古の農業	北滿研究(2の1)	昭 9. 1
外蒙古に於ける牧畜業(ア・ペ・ヒオーニン)	愛國	昭 9. 9
○ 教育・宗教		
外蒙古の教育	外蒙古の現勢(善隣協會)	昭 10. 1
外蒙古の宗教	外蒙古の現勢(善隣協會)	昭 10. 1
外蒙古教育	最新支那年鑑(東亞同文會)	昭 10. 6
蒙古に於ける喇嘛教信仰の起源	近代蒙古史研究(矢野仁一)	昭 3.10
ロシアの喇嘛教利用及び蒙古王公懷柔策	近代蒙古史研究	昭 3.10
○ 民俗		
蒙古の地域とその民情(小田斌)	產業經濟之滿洲	昭 10. 1
外蒙古庫倫の正月(雨江生)	滿蒙	大正14. 1
外蒙古の話	協和	昭 10.10
外蒙古の話(山田久太郎)	滿蒙	大正14. 5

察哈爾・綏遠

題　名（著者）	書　名	發行年月

○ 歷　史

察哈爾を中心とせる漢蒙兩族鬪爭史　上・下	同表題(滿鐵)	大正10. 6
察哈爾の沿革と現勢	察哈爾蒙古の近情(東亞產業協會)	昭　9.11
察哈爾の懷古	東蒙遊記(星武雄)	大正 9.12

○ 地　理

綏遠省	支那經濟年報(支那經濟事情研究會)	昭　10. 2
綏遠省（西山榮久）	支那	昭　8.11
綏遠特別區域管內都市事情	滿蒙全書(第7卷)(滿鐵)	大正12.12
綏遠特別區域	最新支那地理(西山榮久)	昭　3. 2
察哈爾と綏遠	蒙古事情研究資料(蒙古事情研究會)	昭　9.11
陰山部內綏遠特別區域地誌	同表題	昭　8. 8
綏遠事情西北開發の關鍵	同表題	昭　8. 9
塞外日記五原行（篠原之直）	亞東	昭　5. 2
包頭鎭	最新支那地理(西山榮久)	昭　3. 2
歸綏縣概況	亞東指要(山根棹三)	大正14.11
歸化城	最新支那地理(西山榮久)	昭　3. 2
五原縣概況	亞東指要(山根棹三)	大正14.11
百靈廟の所在地（盛島角房）	滿蒙	昭　10. 4
百靈廟附近の近狀	蒙古事情研究資料(蒙古事情研究會)	昭　10. 1
綏遠蒙旗事情	同表題	昭　9. 3
百靈廟紀行	善隣協會調查月報	昭　10. 7
察哈爾・綏遠兩省事情	支那各省經濟事情(日本國際協會)	昭　10. 2
中華民國察哈爾省戶口數	滿洲統計(1の6)	康　2. 6
察哈爾部の現況	善隣協會調查月報(39)號	昭　10. 8
察哈爾と綏遠	蒙古事情研究資料(蒙古事情研究會)	昭　9.11
察哈爾の現況	蒙古事情研究資料(蒙古事情研究會)	昭　10. 1
察哈爾省	支那經濟年報(支那事情研究會)	昭　10. 2
南部察哈爾省に就て	同表題	昭　8.12
興和道（察哈爾特別區域）都邑事情	滿蒙都邑全誌(山田久太郎)	大正15.10
察哈爾蒙古を描く	善隣協會調查月報	昭　10. 7
察哈爾を探る（香川信一郎）	滿洲公論	昭　10. 1
多倫諾爾（關喜市）	道（國道局）	康　1. 3

題　名（著者）	書　名	發行年月
多倫縣事情	滿鐵調查月報	昭　10. 8
張庫の現況と其關係	同表題	昭　8. 7
綏遠省概述	中國農村經濟資料(馮和法)	民　24. 8

○ 法　制

察哈爾蒙族組織（古川園重利）	同仁	昭　7. 6
盟旗の制度	察哈爾蒙古の近情(東亞產業協會)	昭　9.11
行政機關	察哈爾事情調查報告書(東亞產業協會)	康　1. 4
察東特別自治區行政系統	多倫縣政概要(多倫縣公署)	康　2.10

○ 政治・外交

察哈爾の問題	協和	昭　8. 8
察哈爾問題解決新非武裝地帶設定	善隣協會調查月報	昭　10. 7
北支問題と察哈爾事情	外交時報	昭　10. 7
錫盟の危機と其對策	蒙古事情研究資料(蒙古事情研究會)	昭　9.12
ハルハ國境問題の概觀	善隣協會調查月報	昭　10. 3
ハルハ事件交涉開始決定	支那時報	昭　10. 6
ハルハ交涉委員會具體化	善隣協會調查月報	昭　10. 5
ハルハ事件の重要性（吉村忠三）	外交時報	昭　10. 3
滿洲里會議	邊疆支那	昭　10. 7
察哈爾事件	邊疆支那	昭　10. 7
ソ聯と察哈爾事件（右近）	滿洲評論	昭　8. 7

○ 交　通

察哈爾省內交通通信	善隣協會調查月報	昭　10. 7
察哈爾交通通信	察哈爾事情調查報告書(東亞產業協會)	康　1. 4
察哈爾綏遠兩省交通通信	支那各省經濟事情(日本國際協會)	昭　10. 2
張庫間交通紀要	善隣協會調查月報(40號)	昭　10. 9
察哈爾道路狀況	察哈爾事情調查報告書(東亞產業協會)	康　1. 4
滿蒙國境線ハルハ河に就て	善隣協會調查月報	昭　10. 7
京張綏鐵道の現況	支那經濟地理誌交通全篇(馬場鍬太郎)	大正14.12
京綏鐵道事情	同前	同
京綏鐵道	支那鐵道概論(滿鐵北京公所)	昭　2.10
綏遠省水利事業	中國經濟年鑑 中	民　24. 9

題名(著者)	書名	發行年月
○ 財政・金融		
財政	察哈爾事情調查報告書(東亞產業協會)	康 1. 4
察哈爾省二十二年度歲入歲出概況	中國經濟年鑑(上)	民 24. 9
綏遠省租佃制度概況	中國經濟年鑑(中)	民 24. 9
察哈爾省租佃慣例	中國經濟年鑑(上)	民 23. 5
綏遠省租佃慣例	中國經濟年鑑(上)	民 23. 5
○ 商業・貿易		
察哈爾經濟事情	滿鐵調查月報	昭 10. 3
察哈爾の經濟概況	東亞政情(2號)	康 2.10
察哈爾省に於ける外國人事業	滿鐵調查月報	昭 9. 3
歸綏商情	中國經濟年鑑(下)	民 24. 9
包頭商情	中國經濟年鑑(下)	民 24. 9
多倫縣經濟	滿鐵調查月報	昭 10. 8
多倫商會組織並職員名表	滿鐵調查月報	昭 10. 8
多倫縣城內商號調查表	滿鐵調查月報	昭 10. 8
多倫諸爾經濟概況	海外經濟事情	昭 10. 2
綏遠省經濟事情	東洋貿易研究	昭 7.11
綏遠省の資源	善隣協會調查月報	昭 10. 7
察哈爾通商貿易	察哈爾事情調查報告書(東亞產業協會)	康 1. 4
張庫貿易の過去及現在	善隣協會調查月報	昭 10. 7
多倫を中心とする對蒙貿易	善隣協會調查月報(39號)	昭 10. 8
○ エ・鑛業		
察哈爾の工業	滿鐵調查月報	昭 10. 3
綏遠の工業	善隣協會調查月報	昭 10. 7
綏遠省の工業概況	滿鐵調查月報	昭 10. 6
察哈爾省鑛產	支那鑛業時報	昭 5.12
熱河察哈爾及綏遠の鑛產資源に關する新資料	ソ聯邦事情	昭 8. 8
察哈爾綏遠兩省鑛業	支那各省經濟事情(日本國際協會)	昭 10. 2
察哈爾省鑛業	中國經濟年鑑(上)	民 23. 5
察哈爾省煤鑛業	中國經濟年鑑(中)	民 24. 9
綏遠の鑛業	支那鑛業時報	昭 5.12
綏遠省鑛產物資源	支那鑛業時報	昭 5. 8

題名(著者)	書名	發行年月
綏遠の鑛產	善隣協會調查月報	昭 10. 7
綏遠省鑛業概況	滿鐵調查月報	昭 10. 6
綏遠省鑛業	中國經濟年鑑(上)	民 23. 5
綏遠土默特旗大青山炭田の地質	支那鑛業時報	大正15. 3
○ 農・畜		
察綏農業經濟(天野元之助)	新東洋	昭 10. 9
察哈爾綏遠農業經濟の大觀(天野元之助)	滿蒙	昭 10. 7
察綏農業經濟の大觀(天野元之助)	滿蒙	昭 10. 8
察哈爾農村經濟	中國農村經濟資料(馮和法)	1933. 3
察哈爾省農民副業概況	中國經濟年鑑(上卷)	民 24. 9
察哈爾省の農林牧場及副業	滿鐵調查月報	昭 10. 3
察哈爾省主要作物の概況	滿洲評論	昭 8.10
察哈爾地方の牧畜(山田久太郎)	滿蒙	大正11. 1
察哈爾の牧畜概況	滿鐵調查月報	昭 10. 3
畜產國西ウデムチン(田口鎭雄)	農業の滿洲	昭 9. 1
綏遠の開發と農業(宮脇賢之助)	東亞經濟研究	昭 7. 8
綏遠の農產	善隣協會調查月報	昭 10. 7
綏遠省物產の概要	同表題	昭 8. 9
綏遠省農村經濟資料	中國農村經濟資料(馮和法)	1933. 3
綏遠開墾事業の概況	滿鐵調查月報	昭 10. 6
綏遠の牧畜	善隣協會調查月報	昭 10. 7
包頭に於ける羊毛取引	同表題	昭 8. 4
包頭鎭の羊毛取引事情	東洋貿易研究	昭 8. 5
○ 教育・宗教		
教育宗教	察哈爾蒙古の近情(東亞產業協會)	昭 9.11
察哈爾省の天主教	善隣協會調查月報(41號)	昭 10.10
多倫の喇嘛廟	善隣協會調查月報	昭 10. 9
綏遠の教育概況	善隣協會調查月報	昭 10.10
歸綏之廟會	中華全國風俗志(卷9)(胡樸安)	民 12. 6
○ 民俗		
察哈爾地方風俗・習慣・衞生	察哈爾蒙古の近情(東亞產業協會)	昭 9.11
察綏蒙古人の經濟生活	善隣協會調查月報	昭 10. 9
綏遠之風俗	中華全國風俗志(卷9)(胡樸安)	民 12. 6

寧夏・甘肅・青海

題名(著者)	書名	發行年月
○ 寧　夏		
寧夏省の狀勢	支那經濟年報昭和十年版(支那經濟事情研究會)	昭 10. 2
包寧鐵道沿線主要地經濟事情—寧夏	滿鐵調査月報(15の12)	昭 10.12
寧夏府城	支那省別全誌　第6卷(東亞同文會)	大正 7. 1
寧夏省22年度歲入歲出概況	中國經濟年鑑　上卷	民 24. 9
寧夏省財政概況	民國23年申報年鑑	民 23. 4
寧夏に於ける工業	支那省別全誌　第6卷(東亞同文會)	大正 7. 1
寧夏に於ける商人の風尙及社會的地位	支那省別全誌　第6卷(東亞同文會)	大正 7. 1
○ 甘　肅		
甘肅省事情	最新支那地理(西山榮久)	昭 3. 2
甘肅省概況	支那各省經濟事情(日本國際協會)	昭 10. 2
自甘肅省及寧夏省至露領威爾合控定斯克地理之概況(支那駐屯軍)	同　表　題	昭 9. 3
甘肅省事情	支那省別全誌第6卷(東亞同文會)	大正 7. 1
甘肅省交通及通信	支那各省經濟事情(日本國際協會)	昭 10. 2
甘肅省水利事業	中國經濟年鑑(中)	民 24. 9
甘肅省の公路近情	旅行情報	昭 10. 7
甘肅省財政及金融	支那各省經濟事情(日本國際協會)	昭 10. 2
甘肅省租約內容	中國經濟年鑑(中)	民 24. 9
甘肅省財政概況	民國23年申報年鑑	民 23. 4
甘肅省產業及資源	支那各省經濟事情(日本國際協會)	昭 10. 2
甘肅省に於ける鑛產	支那省別全誌第5卷(東亞同文會)	大正 7. 1
甘肅省羊毛產額	中國經濟年鑑(中)	民 24. 9
○ 青　海		
青海事情	東　亞(8の9)	昭 10. 9
青海概況	最新支那年鑑(東亞同文會)	昭 10. 6
青海事情とその開發	善隣協會調査月報	昭 10.10
西藏(青海及び川邊を含む)事情	最新支那地理(西山榮久)	昭 3. 2
青海及西藏の狀勢	支那經濟年報昭和10年版(支那經濟事情研究會)	昭 10. 2
青海省概述	中國農村經濟資料(馮和法)	民 24. 8
青海及び新疆政策	ツラン民族運動と日本の新使命(野副重次)	
青海省財政概況	民國23年申報年鑑	民 23. 4
青海省租佃制度概況	中國經濟年鑑(中)	民 24. 9
青海省22年度歲入歲出概況	中國經濟年報(上)	民 24. 9
青海の經濟概要	善隣協會調査月報	昭 10. 9

884
257

滿洲事情案內所沿革

○昭和八年一月十八日……關東軍ノ特殊指令竝ニ左記各機關ノ後援ニヨリ新京記念館內ニテ滿洲經濟事情案內所ノ名稱ノ下ニ滿洲經濟事情ノ調査紹介事務開始

1 滿洲國政府
2 駐滿日本大使館
3 南滿洲鐵道株式會社

○昭和九年一月二日……多數利用者ノ要求ニ應ズル爲メ更ニ左記機關ノ後援ヲ加ヘテ事業範圍ヲ擴張、同時ニ名稱ヲ滿洲事情案內所ト改稱

1 關東廳
2 駐滿海軍部司令部

○昭和九年三月二十四日……滿洲視察斡旋委員會成立ニヨリ視察團體斡旋事務開始

○昭和九年八月二十五日……業務ノ擴張、利用者ノ增加ニ應ズル爲メ「新京中央通六番地」ノ現位置ニ移轉

昭和十一年一月二十五日印刷
昭和十一年二月 一 日發行

編輯兼發行人 新京中央通六番地 滿洲事情案內所

印刷人 奉天工業區四馬路 關眞

印刷所 奉天工業區四馬路 股份有限公司興亞印刷局

發行所 新京中央通六番地 滿洲事情案內所
電話 (三)四九三八番 (三)五五三〇番
振替奉天九七九番

684
257

○滿洲事情案內所ノ事業

當所ハ滿洲ニ於ケル一般及經濟事情ノ調査紹介ヲ行ヒ併セテ滿洲視察斡旋委員會ノ實際事務機關トシテ視察者ニ對シ各種斡旋ノ任ニ當ル事ヲ以ツテ目的トシテヰル。卽チ當所ノ事業ヲ列記スレバ左記ノ如クデアツテ利用者ノ爲ノ調査斡旋ハ總テ無料デ行ツテ居ル。

事業

一、來訪及ビ書面ニヨル諸事情ノ照會ニ對スル回答
二、視察者ニ對シ各機關トノ連絡斡旋其他便宜供與
三、滿洲國ヲ中心トスル諸事情ノ調査及ビ調査指導
四、前項ニ必要ナル參考調査資料ノ蒐集竝ニ其整理
五、滿洲事情紹介ニ必要ナル印刷物ノ刊行及ビ頒布
六、以上ノ外滿洲事情普及徹底ノ爲ニ必要ナル事項